

MATSUSHIRO CASTLE-TOWN RUINS

# 松代城下町跡(3)

～殿町～

長野松代総合病院診療棟・病棟増築工事にともなう  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月

長野市教育委員会



調査地(A区)全景[南より]



石組池(A2区①-2)

## 序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。土地に残された歴史の痕跡は、私たちの先祖の知恵と文化の集積であります。埋蔵文化財は、先人たちの文化を伝えるとともに、現在を生きる私たちの文化を見つめ直すきっかけを与えてくれます。

松代藩真田家の城下町であった松代は、武家屋敷や町屋、神社仏閣などの町並みや、各家の庭園に残る泉水、城下を流れる水路網など、往時の景観を今に残す情緒あふれる城下町として知られています。このたび、松代藩の上級武士の屋敷地であった松代町殿町において、長野松代総合病院診療棟・病棟の増改築工事にともなう発掘調査を実施しました。調査では、江戸時代後期から現代にいたる武家屋敷地の土地利用の変化や、水路・池などの様子が明らかになりました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財第114集」として報告するものです。報告書の内容は、連綿と継られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました長野松代総合病院の各位、そして発掘作業に携わっていただきました地元の皆様、また、報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成18年3月

長野市教育委員会

教育長 立岩睦秀

## 例　　言

- 1 本書は、長野県長野市松代町松代における開発事業「長野厚生農業協同組合連合会 長野松代総合病院 診療棟・病棟増築工事」に先立ち実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査事業は、委託者 長野厚生農業協同組合連合会 長野松代総合病院 院長 野口 修 と受託者 長野市長 鶴澤正一との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、平成16年度に長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市松代町字松代180番地ほかであり、開発事業の総面積約12,100m<sup>2</sup>のうち、新たに増築する範囲約3,600m<sup>2</sup>を埋蔵文化財保護対象面積とし、うち建物建築部分約2,200m<sup>2</sup>を発掘調査の実施対象範囲とした。現地における発掘調査は平成16年度に実施し、整理調査は平成17年度に実施した。
- 4 現場における発掘調査は矢口の指導の下飯島が担当し、山野井・宮沢が補助した。整理調査および本書の編集は宿野・宮沢が担当し、各調査員・作業員が作業を分担した。執筆分担は第1章第1節を宿野が、 第1章第2節以降（第IV章を除く）を宮沢が分担して執筆した。
- 5 本書の第IV章では関連調査成果として各氏・各機関より玉稿を貰った。それぞれの執筆者名および所属名は目次および各論の冒頭に明記させていただいた。
- 6 調査によって得られた全ての資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 凡 例

- 1 調査地点の略号は「M J H P (M J =Matsushiro Joukamachi、H P =病院地点)」とし、出土遺物の注記や遺構図の整理など、調査全般においてこれを用いた。
- 2 各遺構に対しては、調査区ごとに番付けしている。本報告書中では、下記例のとおり略記号を用いている。

調査区 遺構検出面 遺構番号  
(例) B 1 区 ② - 5 「B 1 区 第Ⅱ 遺構検出面 第5号遺構」

- 3 本調査では、3 時期に相当する遺構検出面を確認した。調査時においては、調査区ごとに検出次面を設定していたが、整理作業の終了した本報告書においては遺構検出面として統一した。なお、出土遺物の注記には調査時の検出面が記されている。  
〔報告書記載 遺構検出面〕 〔調査時 検出面〕  
「A区①・②・③ (変更なし)」 ← 「A区①・②・③」  
「B 1 区③」 ← 「B 1 区①」  
「B 2 区②・③」 ← 「B 2 区①・②」
- 4 地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、すべて座標北を表している。調査地における座標北からの真北方向角は約0°9'56"であり、また磁北は真北より西へ約6°40'の偏差がある。
- 5 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第VII系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値（旧日本測量系）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「AT-S」のうち、光波測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。
- 6 遺構図の縮尺は各図中に明示した。遺物に関しては全て原寸で実測図を作成した。本書では基本的に土器・陶磁器実測図1/4に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。
- 7 插入した遺構・遺物写真的縮尺は任意である。
- 8 遺物観察表に記載した法量中、\*印が併記された値は復元推定値を示している。計測部位はそれぞれの表欄外の注を参照されたい。

# 本文目次

序  
例 言  
凡 例  
目 次

第Ⅰ章 調査経過 .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査日誌抄 .....	3
第3節 調査体制 .....	4
第4節 調査方法 .....	6
1 発掘調査の方法      2 整理調査の方法	
第Ⅱ章 松代城下町跡の立地と環境 .....	8
第1節 地理的環境 .....	8
第2節 歴史的環境 .....	9
第Ⅲ章 発掘調査成果 .....	14
第1節 発掘調査の概要 .....	14
1 基本層序      2 検出遺構の概要      3 出土遺物の概要	
第2節 遺構と遺物 .....	16
1 検出遺構      2 出土遺物	
第Ⅳ章 関連調査成果 .....	109
第1節 出土陶磁器の様相 .....	(西本) 109
第2節 木製品樹種同定調査 .....	(吉田生物研究所) 120
第3節 出土漆器の漆膜構造調査 .....	(吉田生物研究所) 125
第Ⅴ章 調査の成果と課題 .....	128

報告書抄録  
奥 付

## 図版目次

頁

図1 調査地位置図	(1)	図36 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③-1検出面)	(55)
図2 調査地周辺位置図・調査区位置図	(6)	図37 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③-1検出面)	(56)
図3 松代町字図	(8)	図38 第Ⅱ遺構検出面出土陶磁器(A2区検出面)	(57)
図4 松代城下町跡周辺道路分布図	(11)	図39 第Ⅱ・Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A1区)	(58)
図5 松代城下町の土地利用図	(12)	図40 第Ⅱ遺構検出面出土陶磁器(A1・2区②)	(59)
図6 周辺調査位置図	(13)	図41 第Ⅱ遺構検出面出土土器(A2・3区②)	(60)
図7 基本土層形式図	(14)	図42 第Ⅱ遺構検出面出土陶磁器(A3区②)	(61)
図8 遺構面相図図	(14)	図43 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区③)	(63)
図9 第Ⅲ遺構検出面(B1区)	(17)	図44 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区・B2区)	(64)
図10 第Ⅲ遺構検出面(A区)	(18)	図45 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区③-2下層検出面)	(65)
図11 方形土坑(A1区③-1)	(20)	図46 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区)	(66)
図12 溝状遺構(A2区③-1)	(21)	図47 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(B1区)	(67)
図13 磚石列(A3区③-1)	(23)	図48 金属製品(1)	(85)
図14 石組池状遺構(B1区③-1)	(24)	図49 金属製品(2)	(86)
図15 石列(B1区③-3)	(25)	図50 金属製品(3)	(87)
図16 第Ⅱ遺構検出面(A区)	(27)	図51 木製品(1)	(94)
図17 第Ⅱ・Ⅲ遺構検出面(B2区)	(28)	図52 木製品(2)	(95)
図18 方形土坑(A1区②-2)	(31)	図53 木製品(3)	(96)
図19 磚石列(A3区②-6)	(32)	図54 木製品(4)	(97)
図20 木組土坑(A3区②-15)	(33)	図55 木製品(5)	(98)
図21 溝状遺構(B2区②-1)	(34)	図56 石製品(1)	(104)
図22 第Ⅰ遺構検出面(A区)	(36)	図57 石製品(2)	(105)
図23 方形石組構(A1区①-1)	(38)		
図24 第Ⅰ遺構検出面 泉水路全体図および石組構大図	(40)		
図25 石組池(大)(A2区①-2)	(42)		
図26 石組池(小)(A2区①-8)	(43)		
図27 石組構(B1区③-2)	(45)		
図28 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③-2・3・4号遺構)	(47)		
図29 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③-1・4号遺構)	(48)		
図30 第Ⅲ遺構検出面出土土器(A2区③-1号遺構)	(49)		
図31 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A3区③-1分遺構・検出面)	(50)		
図32 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A1区③-1分遺構・検出面)	(51)		
図33 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A1区③-1号遺構・検出面)	(52)		
図34 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器 (A1区③-1・2号遺構・検出面)	(53)		
図35 第Ⅲ遺構検出面出土陶磁器(A2区③-1検出面)	(54)		

## 写真目次

頁

写真1 調査地全景	(2)
写真2 表土除去	(3)
写真3 作業風景	(3)
写真4 遺構測量風景	(3)
写真5 発掘調査参加者	(3)
写真6 第Ⅲ遺構検出面(A区)	(16)
写真7 第Ⅲ遺構検出面(B1区)	(16)
写真8 第Ⅲ遺構検出面(B2区)	(16)
写真9 方形土坑(A1区③-1)	(20)
写真10 溝状遺構(A2区③-1)	(22)
写真11 構造遺構(A2区③-1)拡大	(22)

写真12 碳石列 (A3区②-1) .....	(22)	写真49 A3区①-1出土陶磁器 (1) .....	(62)
写真13 石組池状遺構 (B1区②-1) .....	(25)	写真50 A3区①-1出土陶磁器 (2) .....	(62)
写真14 石列 (B1区②-3) .....	(25)	写真51 A区・B1区第II・III遺構面出土陶磁器 .....	(67)
写真15 第II遺構横出面 (A区) .....	(26)	写真52 金属製品 (1) .....	(88)
写真16 第II遺構横出面 (B2区) .....	(26)	写真53 金属製品 (2) .....	(90)
写真17 性格不明落ち込み (A2区②-16) .....	(30)	写真54 銀貨 .....	(92)
写真18 土坑群 (A3区) .....	(30)	写真55 木製品 (1) .....	(100)
写真19 墓桶 (B2区②-10) .....	(30)	写真56 木製品 (2) .....	(101)
写真20 方形土坑 (A1区②-2) .....	(31)	写真57 木製品 (3) .....	(102)
写真21 土留め板樋 (A1区②-2) .....	(31)	写真58 石・その他遺物 .....	(107)
写真22 碳石列 (A3区②-6) .....	(32)	写真59 石・その他遺物 .....	(108)
写真23 木組土坑 (A3区②-15) .....	(32)		
写真24 木組土坑 (A3区②-15) 壁面 .....	(33)		
写真25 潛状遺構 (B2区②-1) .....	(34)		
写真26 第I遺構横出面 (A区) .....	(35)		
写真27 A1区擾乱状況 .....	(35)	表1 江戸後堀遺構面 遺構観察表 .....	(19)
写真28 建築基礎 (A2区①-8) .....	(35)	表2 幕末・明治中期遺構横出面 遺構観察表 (1) .....	(29)
写真29 墓桶 (A2区) .....	(37)	表3 幕末・明治中期遺構横出面 遺構観察表 (2) .....	(30)
写真30 方形石組遺構 (A1区①-1) .....	(38)	表4 明治中唐・昭和前期遺構面 遺構観察表 .....	(37)
写真31 石組溝 .....	(39)	表5 土器・陶磁器観察表 (1) .....	(68)
写真32 石組溝導水部 (A3区) .....	(39)	表6 土器・陶磁器観察表 (2) .....	(69)
写真33 A2区 石組池 .....	(40)	表7 土器・陶磁器観察表 (3) .....	(70)
写真34 石組池 (大) (A2区①-2) .....	(41)	表8 土器・陶磁器観察表 (4) .....	(71)
写真35 石組池 (大) 石積み状況 .....	(41)	表9 土器・陶磁器観察表 (5) .....	(72)
写真36 石組池 (小) 根木突出状況 .....	(41)	表10 土器・陶磁器観察表 (6) .....	(73)
写真37 石組池 (小) (A2区①-5) .....	(44)	表11 土器・陶磁器観察表 (実測対象外) (1) .....	(74)
写真38 石組池 (小) 根木突出状況 .....	(44)	表12 土器・陶磁器観察表 (実測対象外) (2) .....	(75)
写真39 石組溝 (B1区③-2) .....	(44)	表13 土器・陶磁器観察表 (実測対象外) (3) .....	(76)
写真40 A3区①-1出土陶磁器 .....	(61)	表14 土器・陶磁器観察表 (実測対象外) (4) .....	(77)
写真41 A2区①-2出土陶磁器 .....	(61)	表15 土器・陶磁器観察表 (実測対象外) (5) .....	(78)
写真42 A2区①-4出土陶磁器 .....	(61)	表16 土器・陶磁器観察表 (実測対象外) (6) .....	(79)
写真43 A2区①-5出土陶磁器 .....	(61)	表17 土器・陶磁器観察表 (実測対象外) (7) .....	(80)
写真44 A2区①-7出土陶磁器 (1) .....	(61)	表18 土器・陶磁器観察表 (実測対象外) (8) .....	(81)
写真45 A2区①-7出土陶磁器 (2) .....	(61)	表19 金属製品観察表 .....	(88)
写真46 A2区①検出面出土陶磁器 .....	(62)	表20 銀貨観察表 .....	(91)
写真47 A1区①-1出土陶磁器 .....	(62)	表21 木製品観察表 .....	(99)
写真48 A3区①-3出土陶磁器 .....	(62)	表22 石・その他遺物観察表 .....	(106)

## 表 目 次

頁

# 第Ⅰ章 調査経過

## 第1節 保護協議の経過

長野県厚生農業協同組合連合会長野松代総合病院（以下「松代病院」）の診療棟・病棟増築工事予定地は、銀行や民家、松代病院の駐車場が存在する松代町の中心部にあたる。当該地区は、松代町殿町とよばれ、江戸時代松代藩の上級武家屋敷地であったといわれている。

平成15年7月に依頼に基づき開発予定地において試掘調査を行い、松代城下町跡の遺構を確認する。翌16年の6月に松代病院と「埋蔵文化財発掘調査協定書」及び「平成16年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。6月10日より現地にて埋蔵文化財の発掘調査を開始し、9月8日に完了する。発掘調査は総面積2,200m<sup>2</sup>、調査期間は91日におよぶ。調査は、当初、試掘調査の所見から2面の調査面を予定していたが、発掘調査実施中に破壊を免れた上層遺構が部分的に残存していることが判明し、結果として3面の調査面を設定した。

平成17年度は、埋蔵文化財センター屋内における整理調査を実施した。協定書に基づく当該年度分の契約を平成17年5月27日付で締結し、平成18年3月に完了した。整理業務としては、出土遺物の洗浄・接合・図化・写真撮影、検出遺構の製図・整理などを主に実施した。以下、日を追って事務経過を記述する。

〔平成15年度〕

7月2日 開発設計を請負う株式会社エーシーエ設計（以下「設計」と協議：埋蔵文化財の保護・試掘の実施について

7月22日 埋蔵文化財試掘調査の依頼を受ける（土地所有者の承諾書添付）

7月28日 試掘調査を実施、2面にわたる遺構の存在を確認

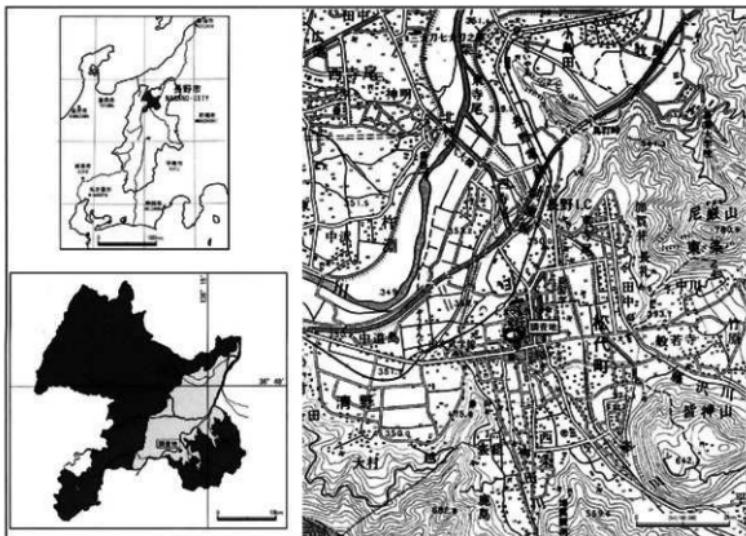


図1 調査位置図

- 8月5日 開発事業主体者（松代病院）と協議：埋蔵文化財発掘調査の期間・費用について
- 12月12日 開発設計と発掘調査の実施時期について協議
- 1月6日 設計と協議：既存銀行の建物と倉庫の基礎として、コンクリート基礎と、松の丸太杭が相当数埋め込まれており、埋蔵文化財がすでに破壊されている可能性が高いことが判明
- 1月19日付 「土地収用法第18条2項第5号に基づく意見書交付に関する追達依頼について」長野県厚生農業協同組合連合会代表理事理事長井出秀人より市教委教育長あてに提出
- 1月28日付 15教文第653号県教委回答「当該地を起業地に該当する土地へ編入して差し支えない」  
【平成16年度】
- 4月23日付 松代病院院長野口修より文化財保護法57条の2 第1項の規定による「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」及び「埋蔵文化財発掘調査依頼書」、「土地所有者の承諾書」が提出される
- 5月11日付 16教文第5-42号県教委教育長から発掘調査実施の通知を受理
- 6月1日 「埋蔵文化財発掘調査協定書」・「平成16年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結
- 6月10日 発掘調査を開始
- 9月8日 発掘調査終了。調査面積2,200m<sup>2</sup>、調査日数は91日間（土日等含む）。
- 3月29日 協定書と委託契約書の変更契約を締結した。
- 3月30日 16埋第409号「発掘調査委託業務実績報告書」と「収支精算書」を松代病院に提出  
【平成17年度】
- 5月27日 「平成17年度埋蔵文化財発掘調査委託契約（整理業務）」を締結
- 3月30日 『長野市の埋蔵文化財第114集 松代城下町跡（3）～殿町～』を刊行



写真1 調査地遠景

## 第2節 調査日誌抄

2004(平成16)年

- 6月10日 A区表土除去開始。  
6月15日 作業員参加、A区1次面遺構検出。  
6月21日 遺構確認状況写真撮影、各遺構掘り下げ。  
6月25日 雨のため終日作業休止。  
7月5日 A区1次面完掘。写真撮影。  
7月6日 A区1次面遺構測量。  
7月9日 A区2次面調査開始、重機掘削開始。  
7月14日 A区2次面遺構検出。  
7月16日 雨により午後作業休止。  
7月21日 A区2次面遺構測量（一部）。  
7月27日 A区2次面写真撮影、遺構測量。  
8月4日 A区3次面調査開始、重機掘削開始。  
8月8日 A区3次面遺構検出。  
8月9日 A区3次面と併行してB-1区調査開始、重機掘削開始。  
8月10日 A区3次面各遺構掘り下げ  
8月12日 A区3次面写真撮影、遺構測量。  
8月13~16日 作業休止。  
8月17日 B1区遺構検出。  
8月19日 B2区1次面調査開始、重機掘削開始。  
8月23日 B2区1次面遺構検出。  
8月25日 B1・2区写真撮影。  
8月26日 B1区1次面・B2区1次面遺構測量。  
8月30日 B2区2次面調査開始、重機掘削開始、遺構検出。  
8月31日 雨により午前作業休止。  
9月1日 C区調査開始、後世の搅乱が著しく遺構が存在しないことを確認。写真撮影、測量。  
9月2日 雨のため終日作業休止。  
9月6日 B2区2次面写真撮影。  
9月7日 B2区2次面遺構測量。  
9月8日 機材撤収、現場における作業を終了する。



写真2 表土除去



写真3 作業風景



写真4 遺構測量風景



写真5 発掘調査参加者

### 第3節 調査体制

本調査は、長野市長 鹿澤正一が受託し、長野市教育委員会の直轄事業として長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

#### 【平成16年度】

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	立 岩 謙 秀
調査機関	長野市教育委員会文化財課	課 長	鹿澤 一郎
	文化財課埋蔵文化財センター	局主幹兼所長	矢 口 忠 良
庶務担当	係 長 山岸 恒雄	事務員	吉村 久江
調査担当	係 長 青木 和明	専門員	長瀬 出
	主 査 飯島 哲也（調査主任）	専門員	山野井智子（調査員）
	主 査 風間 栄一	専門員	石丸 敦史
	主 事 小林 和子	専門員	小出 泰弘
	専門員 堀内 健次	専門員	森田 利枝
	専門員 清水 竜太	専門員	宮沢 浩司（調査員）
	専門員 遠藤恵実子	専門員	山岸 千晃
整理調査員	青木善子、池田寛子、小野由美子、多羅沢美恵子、鳥羽徳子、中殿章子、武藤信子、矢口栄子		
発掘作業員	青木つや子、青木正次、荒井貞幸、内山健至、内山弘子、内山善徳、海沼けい子、風間貞男、佐藤節子、小宮山盛雄、坂口一誠、坂口美知子、高橋和哉、多城恵子、多門睦夫、新田早智子、半田芳子、保坂豊子、増田益利、丸山武雄、宮尾秀男、宮林重成		
整理作業員	倉島敬子、小泉ひろ美、清水さゆり、関崎文子、塚田容子、富田景子、西尾千枝、三好明子、村松正子		
金属・木製品保存処理業務委託	株式会社吉田生物研究所		

#### 【平成17年度】

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	立 岩 謙 秀
調査機関	長野市教育委員会文化財課	課 長	北 村 真一郎
	文化財課埋蔵文化財センター	局主幹兼所長	矢 口 忠 良
庶務担当	係 長 宮沢 和雄	事務員	吉村 久江
調査担当	係 長 青木 和明	専門員	山野井智子（調査員）
	主 査 風間 栄一	専門員	石丸 敦史
	主 査 小林 和子	専門員	小出 泰弘
	主 事 審野 隆史（調査主任）	専門員	森田 利枝
	専門員 清水 竜太	専門員	宮沢 浩司（調査員）
	専門員 遠藤恵実子	専門員	山岸 千晃
	専門員 長瀬 出	専門員	加藤 拓也

整理調査員 青木善子、池田寛子、小野由美子、多羅沢美恵子、島羽恵子、中殿章子、武藤信子、  
矢口栄子  
整理作業員 倉島敬子、小泉ひろ美、清水さゆり、関崎文子、塙田容子、富田景子、西尾千枝、  
三好明子、村松正子  
土器・陶磁器整理業務委託 株式会社 アルカ

発掘調査および整理調査を通じて、下記の方々、関係機関より数多くの貴重なご指導・ご助力を賜った。

調査協力者 長野市教育委員会文化財課 専門員 小林育英、海野 修  
長野市立博物館 学芸員 降幡浩樹  
松代文化施設等管理事務所 学芸員 原田和彦、専門員 北村典子、利根川淳子

## 第4節 調査方法

### 1 発掘調査の方法

今回の発掘調査はこれまでの松代城下町跡における発掘調査のなかでも比較的広範囲が調査対象となっており、文献から調査対象地は武家屋敷地の範囲であったとされることから、松代城下町における武家屋敷の様相を明らかにできるのではないかと考えられた。このことから、発掘調査においては以下の視点に基づき調査を実施するよう努力した。

- a 確認された遺構について、その性格と遺構相互の関連性から土地利用の様相を把握すること。
- b これまでの調査で確認された大火にともなう焼土層及び水害にともなう洪水堆積層の確認と災害時期の比定。
- c 松代城下町に特徴的な遺構である泉水路の確認と流路の検討。

発掘調査対象範囲は当該事業総面積約12,100m<sup>2</sup>のうち建物建築部分約2,200m<sup>2</sup>とした。発掘調査の実施にあたっては既存の建物の移転・解体と併行して調査を実施する必要があったことなどから調査地を3区に区分した(図2)。調査区西側の病院駐車場と民家部分をA区(816m<sup>2</sup>)、北東側の銀行倉庫と駐車場部分をB区(890m<sup>2</sup>)、南東側の銀行建物部分をC区(504m<sup>2</sup>)とした。なおA・B区は調査の都合上それぞれ細分している。A区は病院駐車場部分、民家敷地部分、銀行駐車場部分を含んでいる。調査成果からも、それぞれ遺構の関連性が希薄であり、区画・境界を意識していることが予想された。したがって、病院駐車場北側部分をA1区、銀行駐車場部分をA2区、病院駐車場南側と民家敷地部分をA3区と設定した。B区では銀行建物の解体工事の進捗状況から全面にわたって調査することができなかったことから銀行倉庫部分をB1区、銀行駐車場部分をB2区と設定してそれぞれ調査を実施した。調査の工程は既存建物の解体工事の進捗状況に合わせ、A区から調査を開始し、A区の調査が全て終了した後、B1区の調査に着手、その後B1区の調査途上でB2区の調査を併行して開始する変則的なスケジュールとなった。なお、C区については調査以前から既存建物による搅乱が遺構面までおよんでいることが予想されていたことから全面調査ではなく、搅乱の影響が少ないとみられる部分を選択し、トレンチ調査を実施した。

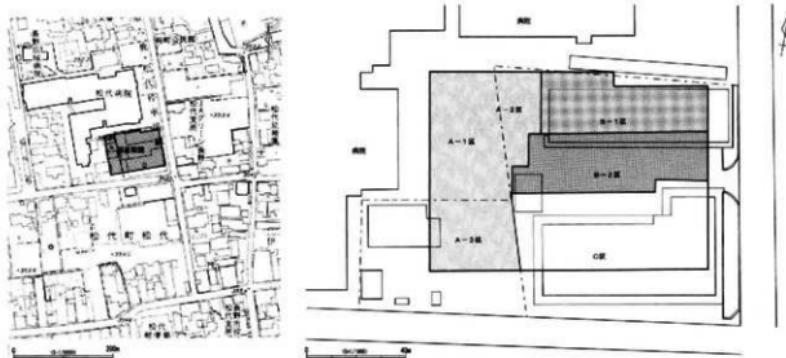


図2 調査地周辺位置図・調査区位置図

実際の発掘調査にあたっては試掘調査において把握された遺構確認面直上まで重機を援用して表土及び現代整地層を除去した後、人力によって遺構面まで掘り下げ・遺構検出を行い、調査を実施した。そして調査後、トレーナーによって下層の状況を確認し、重機を用いて次の遺構確認面直上まで掘削し、調査するという手順をとった。遺構面の調査にあたっては地下水位が高く、湧水地も点在する松代町の特性に留意し、調査区の周囲に側溝を掘削して常時湧水の排水に努めた。しかしながら梅雨時や豪雨の際には度々水没し、調査に支障をきたした。

測量についてはその業務を株式会社写真測図研究所に委託し、同社開発の遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光波測距儀を用いた「コーディック・システム」により、1/20ないし1/10縮尺の測量原図を作成した。また調査中は隨時写真撮影を実施した。調査区全体については遺構面検出時と遺構面完掘時に、他の遺構・遺物出土状況などは適宜行った。撮影機材は35mm一眼レフカメラ及び補助機材としてデジタルカメラ（300万画素相当）を使用し、モノクロネガとカラーポジの各フィルムに同一カットで3枚ずつ露光を変えて撮影した。

## 2 整理調査の方法

整理調査は平成17年度に長野市埋蔵文化財センターにおいて実施した。出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測・浄書および、遺構図・写真などの整理・図版化などであり、これをもとに発掘調査報告書を作成した。また、平成16年度には出土遺物の一部の保存処理業務を株式会社吉田生物研究所に委託して実施した。具体的には脆弱性が高く、劣化の恐れのある出土木製品の一部と金属製遺物の一部であり、木製品については樹種同定も行い、加えて漆塗木製品については漆膜構造調査も実施した。処理方法については高級アルコール法によった。さらに、平成17年度には出土陶磁器の产地同定・所属時期の調査・観察表の作成などの整理業務を株式会社アルカに委託して実施した。

## 第Ⅱ章 松代城下町跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

長野県の県庁所在地である長野市は長野県北部に位置する。その地勢は中央部の長野盆地と西側の西部山地、東側の東部山地に大別される。

長野市中心市街の広がる長野盆地は南西から北西に長軸をとる狭長な盆地であり、その幅は最大で10kmほどである。盆地の中央を千曲川が北流し、西武山地を抜けて盆地に流入する犀川がこれに合流している。西部山地の北部には標高1,917mの飯縄山が位置するが、総じて600~1000m級の丘陵性の山地が多く、緩やかな山々が連なる。西部山地からは犀川によって形成された川中島扇状地や浅川により形成された浅川扇状地が広がっている。東部山地は西部山地に比して急峻であり、その山麓は複雑に屈曲し、あたかもアリスト海岸のような入り組んだ姿を見せる。こうした東部山地にあって皆神山は異様な存在である。皆神山は35万年前の溶岩ドームであり、周囲の山地からは独立している。この山から産出する普通輝石紫蘇輝石安山岩は赤色を呈し、脆弱である。この石材は皆神石と呼ばれ、松代城や城下町の石垣や建物の礎石として広く用いられている。

松代城下町はこの東部山地の山裾に広がる扇状地の扇端から千曲川背渉地にかけての地域に形成された近世城下町である(図1)。この扇状地形は東部山地から長野盆地に流入する蛭川、神田川、藤沢川などによる堆積作用が合わさって形成されたもので、緩やかな傾斜で扇端は千曲川氾濫原に接し、一部は自然堤防に達し、これと一体化している。

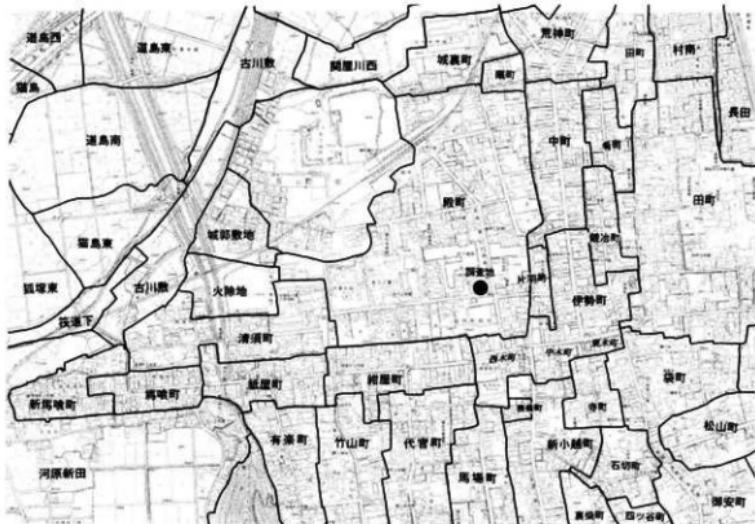


図3 松代町字図

松代城下町の北面を流れる千曲川は松代周辺では盆地の東縁を蛇行して流れている。これは西部山地から長野盆地へ流入する犀川によって形成された川中島扇状地に押されたことによるものであり、このため千曲川後背湿地は扇状地と千曲川に挟まれ、狭い範囲にとどまっている。松代城の前身である海津城はこの千曲川自然堤防上に築城された。築城当時の海津城は城の北側を千曲川が流れる天然の要害であった。しかし太平の世となった江戸時代以降はこの立地が災いし、城下町および城は度重なる水害に悩まされた。そして1742（寛保2）年のいわゆる「皮の満水」と呼ばれる大洪水によって城のほとんどが浸水し、さらに城下にも多大な被害が出たことを機に千曲川の流路を変える漸替えが行われ、現在の流路に変更された。このとき変更された千曲川の旧河道は松代城北側の百間堀や神田川沿いの微低地として現在も姿をとどめている。

#### 引用・参考文献

長野市誌編さん委員会 編『長野市誌』第1巻 自然編 長野市

## 第2節 歴史的環境

### 原始・古代の松代城下町跡周辺

原始・古代において松代城とその城下町近辺は人々の生活の場として積極的に利用されることは少なかったようである。このことは原始・古代の遺跡分布からも窺える。長野盆地において千曲川自然堤防の利用は繩文時代にその萌芽が認められるものの、自然堤防上への集落の進出が本格化するのは弥生時代以降のことであり、千曲川河東地域には松原遺跡や四ツ屋遺跡の大規模集落が営まれるようになる。しかし、いずれの遺跡も松代城下町に隣接した別の後背湿地に立地している。また、同一扇状地上に展開する屋地遺跡などの集落遺跡は松代城下町の位置する扇端ではなく、全て扇尖部に位置している。このように原始・古代における松代城下町中心部とその周辺は居住域とされることとなかった。

その最大の要因にはやはり地形的要因があると考えられる。とりわけ千曲川のもたらす水害はその最大の要因であった。水害について詳細な記録が残されるようになる江戸時代においても千曲川は度々氾濫し、城下町は水害に悩まされた。治水技術が発達した江戸時代でさえ水害に苦しんだのであるから、それ以前において人々がより水害の少ない地域に居住したことは当然であろう。こうした状況は松代城の前身である海津城築城まで続いたと考えられる。

### 松代城下町の成立

松代城下町付近に人々が本格的に集住し始めるのは武田信玄による海津城築城を待たなくてはならない。海津城築城は1558（永禄元）年から1561（永禄3）年の間と言われているが正確な時期ははつきりしていない。その後、真田信之入封までの60年余りの間、頻繁に城主が変わっている。これにともなって中世城郭であった海津城も近世城郭へと姿を変え、城の名前も海津城から侍城、松城と変わる。現在の松代城に改められたのは1711年（正徳元）、松代藩3代藩主真田幸道の頃であった。

城下町の形成に関しては一説には戦国期の山城である尼ヶ城の城下町が海津城築城や往来の移動によって移ってきたと言われている。これ以後次々と城主が移り代わる過程において、それぞれの城主の家臣団や直属の商工業者が松代城下に集住したと考えられる。彼らの中には城主が代わっても松代に残った者もあり、城下町は次第

に発達していった。そして、1622（元和8）年の真田信之の松代入封時には、後に「町八町」と呼ばれる荒町、肴町、中町、鍛冶町、伊勢町、縫屋町、紙屋町、馬喰町の町人町と、武家町（侍町）などの松代城下町の基本的な町割は既に形成されていたと考えられている。その後も城下町は拡大しつづけ、江戸中期までには寺町や町人町の間や町八町の外側に居住する住民が増えた。これらは町外町と呼ばれた。

#### 調査地周辺の土地利用

松代城下町において多くの面積を占める武家町は大きく2つの区域に分けられる。まず、松代城の周りは重臣や上級武士の屋敷地が存在し、さらに城下町の周縁部は中・下級武士の屋敷地とされていた。今回の調査地である殿町は前者の松代城周辺部にあたり、家老級の上級武士の屋敷地であった。調査区は現存する絵図を基にした文献調査で真田家と鎌原家の屋敷地であったことが推定されている。

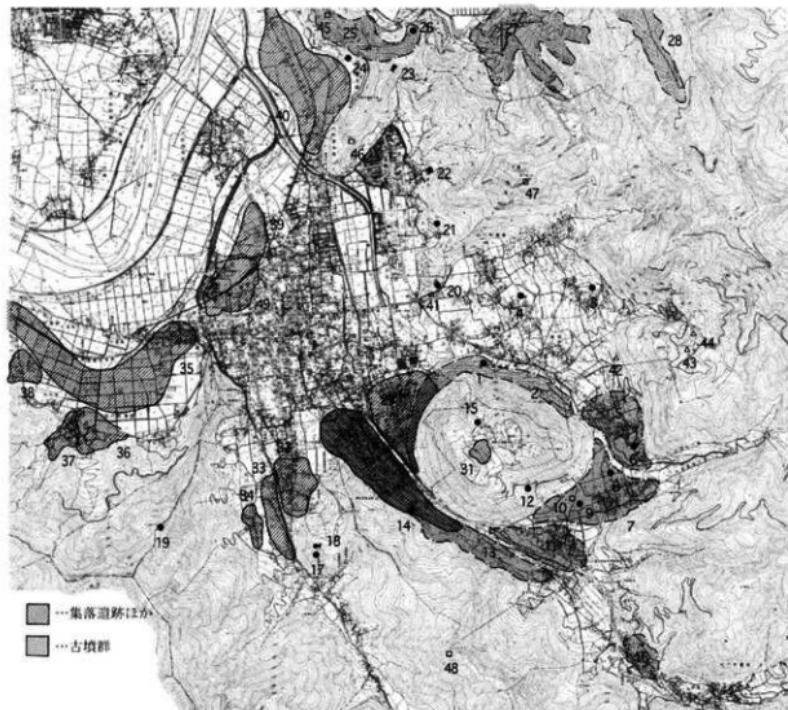
国文学資料館が所蔵する真田家文書に含まれる1826（文政9）年の記載がある絵図によると調査区にあたる区画には「鎌原司馬」ならびに「真田図書」と屋敷の所有者とみられる人物の名が記されている。第V章で詳述するが、両家は幕末期に家老を輩出するなど、松代藩内では上級武士の家系にあったようである。この两家の屋敷地境は発掘調査前に確認できた、銀行と病院駐車場との境界とほぼ同じ位置であったと想定される。

#### 引用・参考文献

長野市史編さん委員会 編 『長野市誌』第2巻 歴史編 原始・古代・中世 長野市

長野市史編さん委員会 編 『長野市誌』第3巻 歴史編 近世一 長野市

長野市史編さん委員会 編 『長野市誌』第4巻 歴史編 近世二 長野市



- |               |                 |                   |                 |
|---------------|-----------------|-------------------|-----------------|
| 1 西前山古墳       | 14 宮崎古墳         | 27 大室古墳群北谷支群      | 40 松原道跡 (繩文～中世) |
| 2 告神山北麓古墳群    | 15 小丸山古墳        | 28 大室古墳群大室谷支群     | 41 天王山窓跡 (平安)   |
| 3 桜間王塚古墳      | 16 開星古墳群        | 29 屋地遺跡 (弥生～中世)   | 42 牧内窓跡 (平安)    |
| 4 竹原翁塚古墳      | 17 舞鶴山1号古墳      | 30 中条遺跡 (弥生～平安)   | 43 池の平窓跡 (平安)   |
| 5 牧内古墳群       | 18 舞鶴山2号古墳      | 31 菅神山道跡 (繩文)     | 44 流本窓跡 (平安)    |
| 6 牧内1号古墳      | 19 母袋山古墳        | 32 市場遺跡 (弥生～平安)   | 45 金井山城跡 (中世)   |
| 7 桑根井鎧塚古墳群    | 20 天王山古墳群       | 33 中村遺跡 (繩文～平安)   | 46 寺尾城跡 (中世)    |
| 8 桑根井空塚古墳     | 21 長札山古墳群       | 34 麻鳥遺跡 (繩文)      | 47 尼跡城跡 (中世)    |
| 9 桑根井鎧塚1・4号古墳 | 22 加賀井古墳        | 35 四ツ屋遺跡 (弥生～平安)  | 48 ノロシ山 (中世)    |
| 10 眼音塚古墳 (消滅) | 23 北平1号古墳       | 36 大村遺跡 (弥生～平安)   | 49 松代城跡 (近世)    |
| 11 平林古墳群      | 24 北原1号古墳       | 37 林正寺遺跡 (平安～中世)  |                 |
| 12 南大平古墳群     | 25 大室古墳群金井山支群   | 38 宮村遺跡 (平安)      |                 |
| 13 虫歌官崎古墳群    | 26 大室古墳群第406号古墳 | 39 松代城北遺跡 (古墳～平安) |                 |

図4 松代城下町跡周辺遺跡分布図

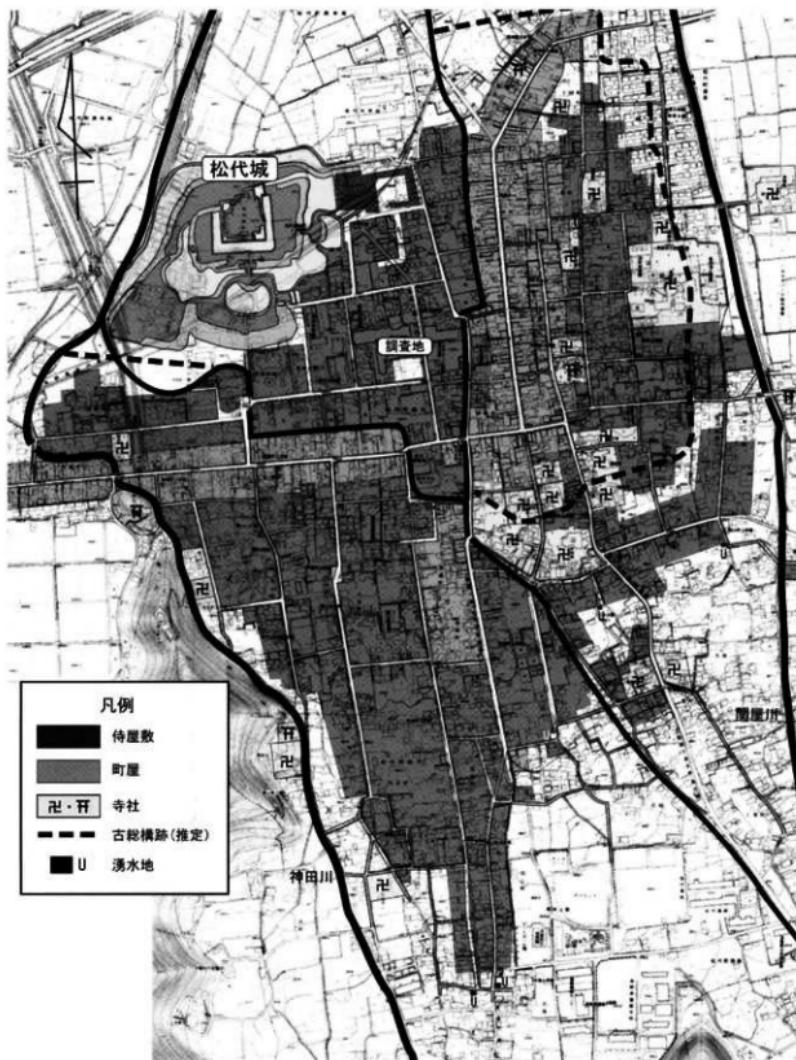


図5 松代城下町の土地利用図  
(文政年間 (1823年頃)、北村1968を加筆・修正)

## 松代城下町跡におけるこれまでの発掘調査

松代城下町跡については近年、発掘調査が実施されるようになったところであり、まだまだその全体像を明らかにするには至っていない。しかしながらこれまでの発掘調査によって、文献からは検討が困難であった松代城下町の形成過程や具体的な生活の様相を知ることができた。以下はそのうち代表的な調査とその成果である。

### 松代城下町跡 木町通り地点（平成13・14年度）（図6-1）

街路整備に伴ない発掘調査が実施された。調査地点は北国往還にあたり、町屋の店先および武家屋敷の門前と考えられる礎石建物跡や溝などの建物跡を確認した。また火災痕跡とみられる焼土層を確認し、焼土層に伴なう出土陶磁器などから灾害記録との時期比定が試みられている。さらに、桃山時代末（16世紀末）にさかのぼる遺物包含層を確認した。松代城下町形成期の様相を示す資料として注目される。

長野市教育委員会『松代城下町跡～中木町・西木町・紺屋町』長野市の埋蔵文化財第109集 平成17年

### 松代城下町跡 八十二銀行地点（平成15年度）（図6-3）

銀行移転に伴ない発掘調査が実施された。今回の調査地点と同じく般町にあたり、上級武家の屋敷地であったと考えられる。調査では火災に伴なう焼土整地層、建物基礎、泉水路の可能性のある構などが検出された。

こうした松代城下町跡に関する調査以外にも史跡整備にともなう発掘調査が松代城ならびに新御殿について進められており、今後は松代城を含めた松代城下町全体としての様相が明らかにされるものと思われる。

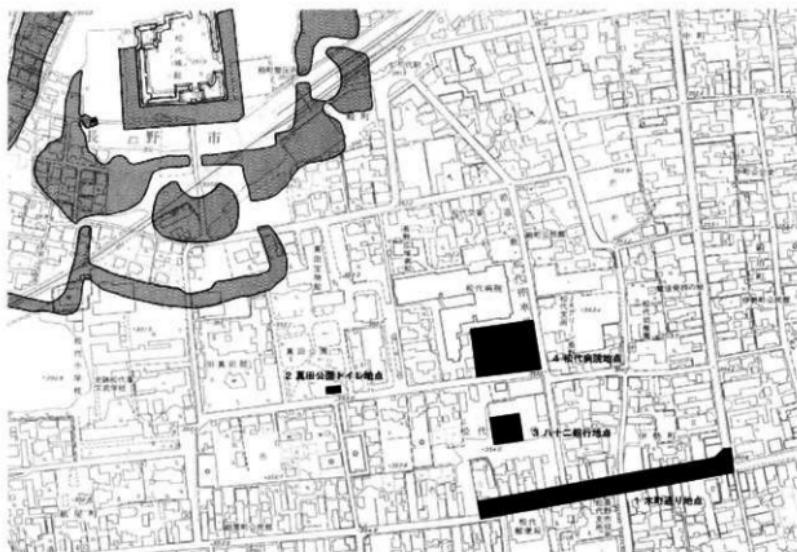


図6 周辺調査位置図 (S=1/5,000)

## 第III章 発掘調査成果

### 第1節 発掘調査の概要

#### 1 基本層序

本遺跡の基本層序を図7に示す。

調査地点の地表は標高352.3m前後である。調査区北側に向かって僅かに傾斜し、調査区北端の地表高は352.5m、南端の地表高は352.2mであった。表土としては現代の整地層（碎石）が30cmにわたってみられ、整地層下には前代の整地層が確認された。第I遺構検出面はその整地層下標高351.7m付近に確認された遺物包含層を基準として設定した。第II遺構検出面下層はややグライ化の進んだ暗茶色土層であり、第III遺構検出面は暗灰褐色土層とこれより下層の土層との間層として把握された。第IV遺構検出面は第II遺構検出面より30cm下層で確認された厚さ10cm程の炭化物を含んだ黒灰色土層に設定した。これより下層はグライ化がさらに進んだ粘土層が堆積し、第V遺構検出面下1m（標高350.0m）付近まで下層確認を実施したが、明確な遺物包含層は確認されなかった。

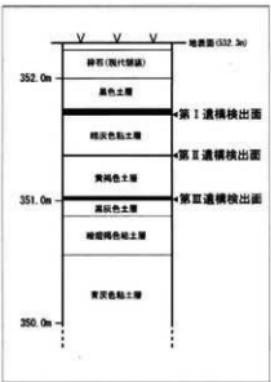


図7 基本土層様式図

本調査地点では近世から近現代まで、3期にわたる土地利用の様子が3面の遺構面として確認された。本報告書では上層から順に第I・II・III遺構検出面としている。各遺構面からの出土陶磁器などから、第I遺構検出面は明治時代中期から昭和時代前期、第II遺構検出面は江戸時代末（幕末）から明治時代前期、第III遺構検出面は江戸時代後期と想定される。

なお、発掘調査の時点では、調査区ごとに検出次面を設定して、遺物の取り上げ、遺構番号の整理等実施している。<sup>1</sup>このため、出土遺物には調査時の検出次面が注記されている。

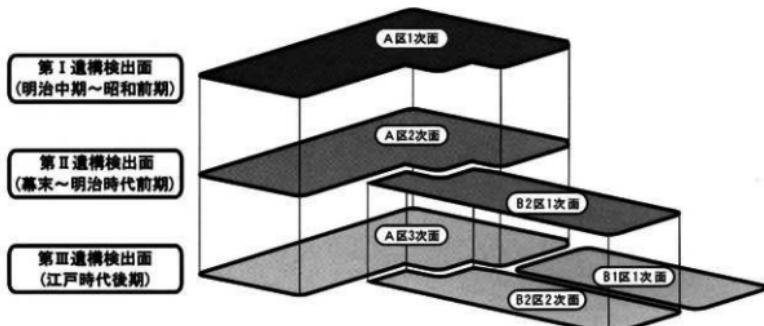


図8 遺構面相関図

## 2 検出遺構の概要

先述したとおり、今回の調査ではA・B区において3つの遺構面を確認することができた。出土遺物から第Ⅰ遺構検出面は明治時代中期から昭和時代、第Ⅱ遺構検出面は江戸時代末期（幕末）から明治時代初期、第Ⅲ遺構検出面は江戸時代後期までに比定される。第Ⅲ遺構検出面（江戸後期）では溝状遺構2、石組池1、土坑9、石列3、埋桶2などを検出した。遺構数は少ないものの、礎石建物跡とみられる石列や敷地境の溝とみられる遺構など、江戸時代後期の土地利用の一端を捉えることができた。第Ⅱ遺構検出面（幕末～明治初期）では溝状遺構7、方形土坑（性格不明）2、土坑29、埋桶6、石列1などを検出した。性格の不明な遺構が多く、土坑についてはそのほとんどが性格不明である。第Ⅰ遺構検出面では方形板組遺構と石列が注目される。方形板組遺構は横板と杭によって壁面の土留めをはかった土坑であり、その覆土から多くの遺物が出土した。石列は礎石列と考えられ、調査区南西側に礎石建物の存在が想定される。

第Ⅰ遺構検出面では溝状遺構7、石組池2、埋桶5などを検出した。調査区の広範囲にわたって現代の所産と見られる搅乱（石炭殻廃棄土坑）を被っていたこともあり、建物跡は確認されなかった。特筆すべきは泉水路と見られる石組溝及び石組池が検出されたことである。調査区のほぼ全域にわたって確認することができた。ただしその構築時期は江戸時代ではなく、明治以降と考えられる。また、トレンチ調査を実施したC区では地表下1.8mまで掘り下げ、遺構検出を試みたものの、後世の搅乱が著しく、遺構・遺物は確認されなかった。

## 3 出土遺物の概要

出土した遺物の内容は土器（土器・陶器・磁器など）、土製品、金属製品、木製品、石製品、ガラス製品、骨角製品などであり、その大部分は陶磁器が占める。また、出土遺物の遺構面ごとの出土量を見てみると明治中期～昭和初期の遺構面（第Ⅰ遺構検出面）からの遺物出土量が卓越している。下層に行くにしたがって量を減じ、江戸後期の遺構面（第Ⅲ遺構検出面）を含め、江戸時代の遺構にともなう遺物はそれ程多くない。

今回の調査では地下水位の高い松代城下町の環境を反映して木質遺物も多数出土した。木製品には漆器椀、漆器蓋、漆器膳、漆器盤、下駄、匙、柄杓、箸、桶、曲物などがある。また、金属製品には鉄、銅（銅合金含む）、金製品が出土し、その内容は鉄貨、煙管、鉄釘、匙、簪、銅椀、槍先など多岐にわたる。

1 図8にみえる1次面、2次面、3次面という表記が調査時の検出次面にあたる。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 検出遺構

#### (1) 第Ⅲ遺構検出面（江戸時代後期）（図9、10・写真6、7、8）

第Ⅲ遺構検出面はA・B区において確認された。標高351.0m前後に広がる遺構面である。検出面を含めた各遺構の出土陶磁器から推定される遺構面の所属時期は、江戸後期から幕末にかけての時期（18世紀末から19世紀中葉）にあたる。江戸時代の土地利用の一端を示すとみられる溝状遺構、石列、石組池状遺構などの遺構が確認された。

A1区とA2区との境界上からは溝状遺構が検出された。南北方向にA1区とA2区を分かつ形で延びており、水路として使用された痕跡も認められる。後述するが敷地境の溝と考えられる。また、A1区では方形土坑が検出された。性格は不明であるが、陶磁器をはじめ多くの遺物が出土した。A3区では建物跡の可能性のある石列が検出された。また、A3区からは底面が平坦で遺構面からの深さも浅い複数の土坑が確認された。ここからの出土遺物は比較的古相を示す。今回の調査では江戸時代後期にあたる本遺構より下層からは明確な遺構・遺物は確認されなかったが、前代から継続的に利用されてきた可能性が考えられる。

B1区では、現代の建物基礎の掘り込みや基礎杭によって遺構面が広範囲にわたって搅乱を受けており、確認することのできた遺構はわずかであった。中でも石組池状遺構は石組の残存状態こそ悪かったものの、泉水や庭園に関わる遺構と見られる。泉水路が長期にわたって継続的に利用されてきた松代城下町の状況を鑑みると、時代は異なる遺構ではあるが、第Ⅰ遺構検出面の泉



写真6 第Ⅲ遺構検出面（A区）



写真7 第Ⅲ遺構検出面（B1区）



写真8 第Ⅲ遺構検出面（B2区）

水間連造構との関連性も検討する必要があろう。

B2区では、溝状造構や土坑など比較的小規模な造構が検出された。しかしながら、B1区同様に現代建築による搅乱が一部におよんでいたこともあり、隣接調査区と遺構の関連性を検討することが困難であった。他方、B2区西半の広い範囲で検出された焼土面は注目される。平成13年から14年にかけて調査された松代城下町跡木町通り地點では江戸時代から明治時代にかけての大火灾にもともなうと見られる被熱面および火災後の整地層が確認されており、それぞれの被熱面の年代比定も文献の成果から検討されている。

本調査地では確認できた焼土面が部分的で、出土遺物も少ないとからこのような検討は困難であるが、大火に関連する灾害痕跡の可能性も含め、注目される遺構といえる。

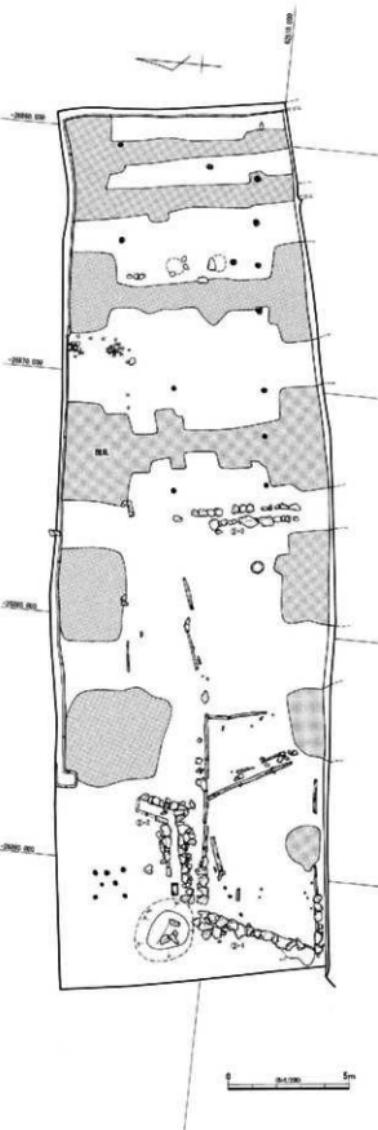


図9 第III遺構検出面（B1区）

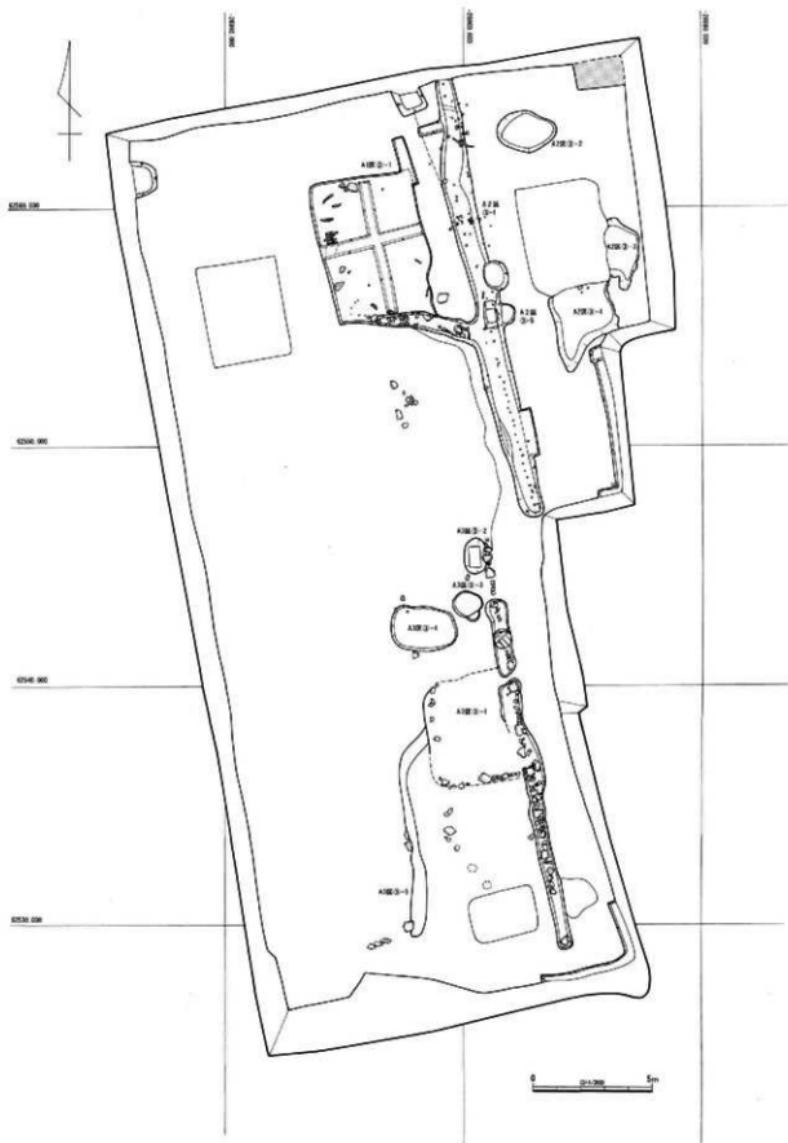


図10 第III造構検出面（A区）

表1 江戸後期遺構面 遺構観察表

調査区	遺構番号	性 格	形狀・断面	規 模	方向等	備 考	時 期
第三遺構面(江戸時代後期)							
A-1	③-1	性格不明遺構	長方形	6.3×5.9m, 深さ0.2m	長辺南北方向	性格不明。ゴミ廐棄土坑か	江戸後期
A-1	③-2	性格不明遺構	溝状・舟底形	幅0.5m、長さ3m、 深さ0.15m	東西方向	溝状遺構の可能性あり	江戸後期
A-2	③-1	溝状遺構	台形	幅1m、長さ17.5m以上、 深さ0.2m	南→北方向	溝内核多数、転状の板組あり	江戸後期～幕末
A-2	③-2	土坑	不整形	2.5×1.8m、 深さ0.2m	—	底面平坦。A-2②-7に切られる。	幕末
A-2	③-3	土坑	不整形	3×1.3m、深さ0.15m	—	A-2①-2、B-1①-1により切られる。 燒土面	幕末
A-2	③-4	土坑	不整形	2.5×3.6m、 深さ0.25m	—	A-2①-2により切られる。燒土面	江戸後期～幕末
A-2	③-5	亂	円形	1×1.2m、深さ0.6m	—	A-2③-1を切る	
A-3	③-1	石列	方形区画	4×17m	長辺南北方向	礎石状の石列。建築基礎か	江戸中期～幕末
A-3	③-2	木組枠	長方形	0.75×0.45m(木枠) 1.4×0.85m(塗方)	長辺南北方向	木枠内木質遺物多款	
A-3	③-3	土坑	円形	1.25×1.3m、 深さ0.05m	—	2つの土坑が切り合う。底面平坦	江戸後期
A-3	③-4	土坑	楕円形	1.9×2.7m、 深さ0.12m	—	底面平坦	江戸後期
A-3	③-5	石列	L字形	幅0.2m、長さ2.2m	—	直角に交わる。礎石列の角部分か	
A-3	③-6	埋桶	円形	ø 0.7m	—	側板1/2残存。A-3③-1側方より検出	
B-1	③-1	石組池状遺構	方形	4.5×8m、 深さ0.6m以上	長辺東西方向	石組み部分的に残存(2段)、 東側改修の可能性あり	明治以降
B-1	③-2	石組渠状遺構	底面平坦	幅0.45m、長さ5.5m	東西方向	上層遺構 A-2④-1次面2号遺構(石組池)と接続	幕末
B-1	③-3	石列	—	幅0.8m、長さ5.2m	南北方向	石組水路状に2列の石列が並ぶ。 性格不明	
B-1	③-4	土坑	円形	ø 4.5m、深さ0.15m	—	内部炭化物、炭酸カリウム	
B-2	③-1	溝状遺構	L字形	幅0.5m、長さ8.1m以上、 深さ0.1m	南北方向	埋土は焼、転状の遺構。 北側は焼成で切られる。	明治～昭和初期
B-2	③-2	土坑	円形	ø 0.8m、深さ0.18m	—	底面に川原石が敷かれる。断面台形	
B-2	③-3	亂	円形	ø 0.65m、深さ0.09m	—	断面台形	
B-2	③-4	土坑	円形	0.55×0.7m、 深さ0.18m	—		江戸後期?
B-2	③-5	土坑	楕円形	0.6×0.95m、 深さ0.14m	—		
B-2	③-6	埋桶	円形	ø 0.2m(桶) ø 0.45m(塗方)	—	絹などの漆皮製。底板なし。 桶でない可能性あり	
B-2	③-7	亂	溝状	幅0.85m、深さ8.6m	南北方向	現代建物基礎	昭和以降
B-2	③-8	亂	不整形	1.35×1.05m、 深さ0.1m	—	底面繊維多款	
B-2	③-9	亂	圓形	1.4×1m、深さ0.15m	—	底面平坦	
B-2	③-10	亂	不整形	1.1×0.45m、 深さ0.1m	—		
B-2	③-11	亂	円形	ø 0.45m、深さ0.02m	—	底面平坦	
B-2	③-12	亂	楕円形	0.65×0.45m、 深さ0.1m	—	底面平坦	
B-2	③-13	矢番	—		上面①-3の壓り込み		

### 方形土坑【A1区③-1】(図11・写真9)

A1区東側にて検出された。幅約2.2m、長さ約3mの長方形を呈する土坑である。遺構面からの深さ約10cm程を測り、緩やかに中央部に向かって傾斜している。南側には溝状遺構の可能性があるA1区2号遺構が、本遺構を切る形で接している。また、遺構底面を中心として覆土中から多くの木製品が出土した。その大半が建築部材に関連するものであるが、漆器椀などの木製品も出土している。

出土遺物は上述した漆器椀以外にも陶磁器が比較的多數出土している。中でも京・信楽系の陶器が碗類を中心多く含まれる点は特徴的である。

遺構の性格については判然としない。南側に接するA1区2号遺構を水路であると考えるならば、溝状遺構(A2区1号遺構)に接続する池状遺構とも考えることができるが、ここではその可能性を指摘するに止めた。

本遺構の廃絶時期に関しては、出土陶磁器中に19世紀以降生産が本格化する瀬戸美濃系磁器が含まれないことから18世紀後半から18世紀末と考えられる。



写真9 方形土坑(A1区③-1)

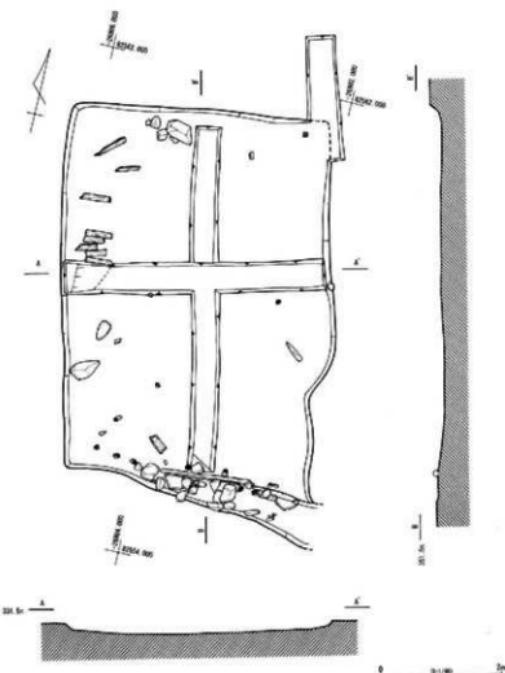


図11 方形土坑(A1区③-1)

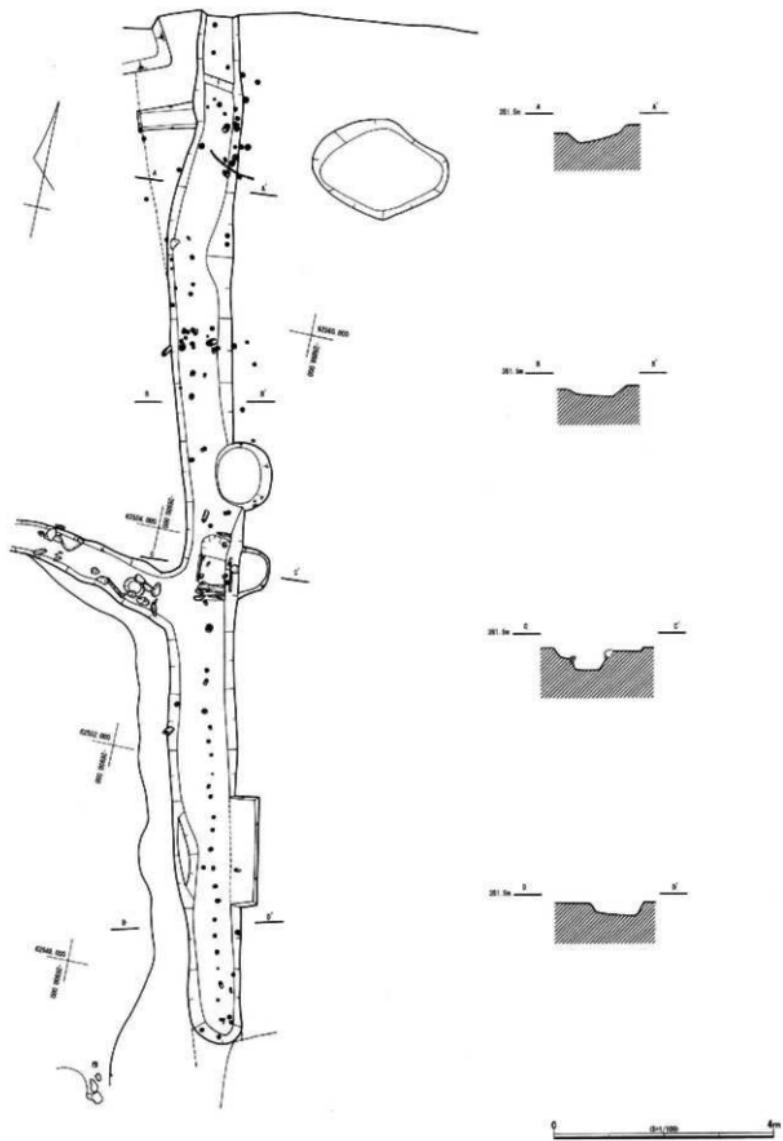


图12 溝状造構 (A2区③-1)

#### 溝状遺構【A2区③-1】(図12・写真10, 11)

A2区西側、A1区との境界上に沿う形で南北方向に検出された幅約1m、長さ19m以上の溝状遺構である。断面形状は台形を呈し、遺構面からの深さ最大50cmを測るが、深さは一定ではなく浅い部分では深さ20cmほどである。また、遺構南端は底面が緩やかに浅くなり、やや不自然な形で途切れていることから上部が削平されている可能性があり、さらに南に延びるものと推測される。北端についても調査区外へ延びているものとみられる。

南側ではφ5cm程の杭が南北方向に列をなして検出された。この他北側でも多くの杭が検出された。また、以降中央部付近からは板材と杭で構築された堰状の遺構が検出された。これはコの字形に板材を組んで堅杭で固定したもので、その内側は周囲よりも深く掘り込んであるという構造を有する。その用途としては水をせき止めるというよりもむしろコの字の内側に水を貯留させることにあったと推測される。

本遺構についてはその位置から屋敷地境の構と考えられることは先述した通りであるが、上記のような杭列や堰状遺構の存在から水が流れていたものと考えられる。

溝内からは陶磁器を始め多くの遺物の出土を見た。中でも特筆すべきは木製品が数多く出土したことであり、漆器椀や下駄など、今回の調査で出土した木製品全体の出土量のうちおよそ10%が本遺構からの出土品で占められる。出土陶磁器から推定される本遺構の存続期間は17世紀末から19世紀前半までと推定される。

#### 礎石列【A3区③-1】(図13・写真12)

A3区東側において検出された。方形の石列を中心とする石列である。φ20cm～30cmの石材が1mの間隔で配置されている。石列の中心部分とみられる方形区画部分では多くの石材が失われているものの、3.5m×3.5mの方形区画が復元された。また、この方形区画に接する形で南北方向に延びる石列も検出された。長さ15mを測る。この石列については建物に付随する雨落溝に関連する石列とも、礎石列とも考えられるが、判然としない。



写真10 溝状遺構 (A2区③-1)



写真11 溝状遺構(A2区③-1)拡大



写真12 純石列 (A3区③-1)

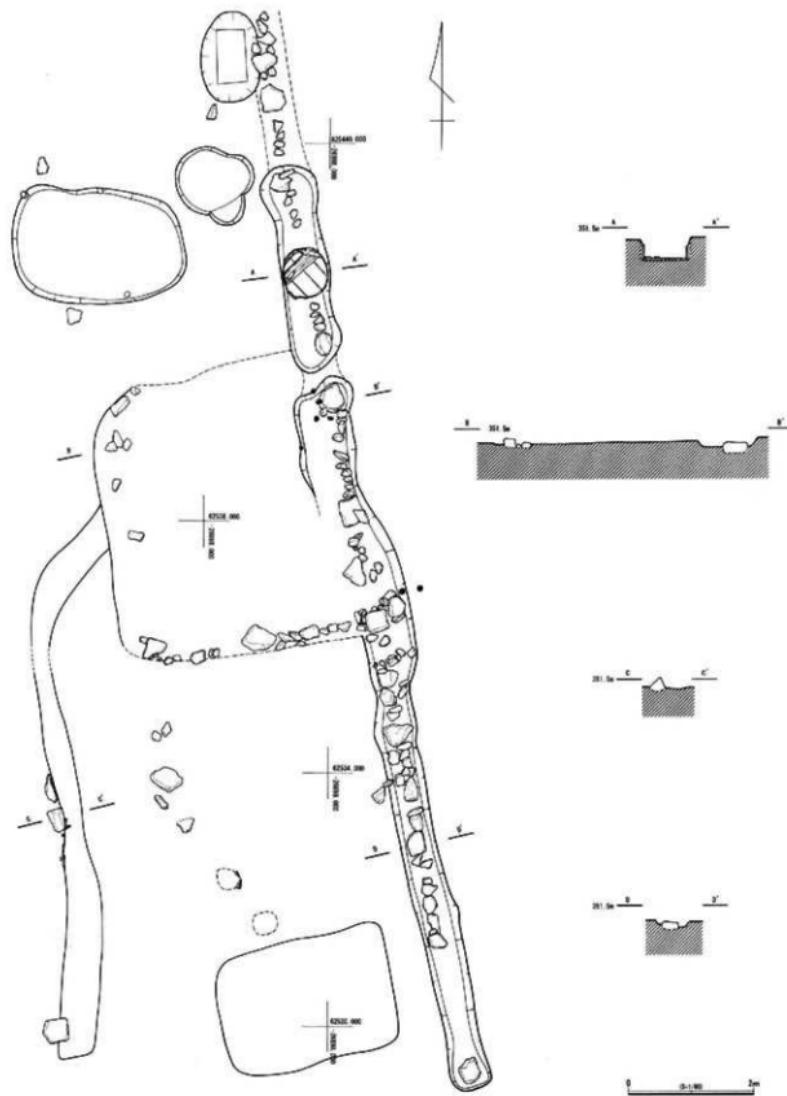


図13 碓石列 (A3区②-1)

### 石組池状遺構【B1区③-1】(図14・写真13)

B1区西側で検出された。後世の搅乱によって石組みが失われているため正確な規模は不明であるが、残存する胴木から復元される規模は8m×4.5mであり、台形状を呈する。石組みは西側部分のみが破壊を免れており、最下段から2段目まで残存している。これ以外の部分は一部に最下段の石組みが残存しているものの、ほとんどは胴木のみが残存している状態であった。また、南東角と南壁の一部は後世の建築基礎による搅乱を受けており、胴木も含めて残存していない。その石積みは基礎に約10cm程の丸太材を敷いて胴木とし、最下段にやや扁平な石材を用いて根石とし、その上段に小口を掘て順次石材を積んでいくものであり、小口は平らな面となるように加工を施しているが、全体的には石材に大きな加工を施していない。控えには約5~10cm程の角礫を用いている。また、北西角の池内側では約10~15cmの丸太杭6本が遺構底面から50cm程突き出た形で検出された。当初は後世の建物の基礎杭とも思われたが、調査区内で数多く確認されたこうした基礎杭との径、材質の違いや遺構北西角を区画するように列をなす点から池状遺構に間連する杭列と判断した。

本遺構東側からは池の大掛かりな改変の痕跡が確認された。石組みの基礎と推定される胴木が2ヵ所で検出され、池状遺構はその規模を大きく変更していたことが明らかとなった。胴木の違いや周囲の石材の残存状況などから当初構築された石組池は8×4.5mの規模であったが、ある時点で規模を縮小するよう改修され、約5m×4.5mの台形状となつたと推定される。

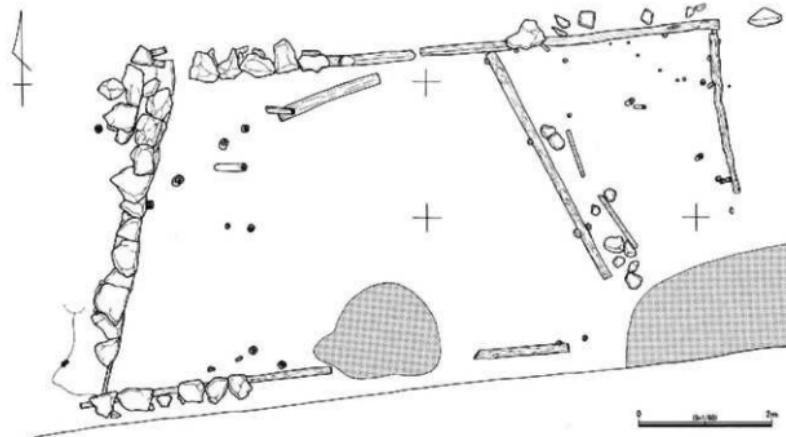


図14 石組池状遺構(B1区③-1)

この石組池が松代城下町を流れる水路にどのように組み込まれていたのかは接続する水路が確認されなかつたことから不明である。しかしながら北西角には石組みが途切れている部分がある。この部分に関しては溝や暗渠などと接続していた可能性がある。この視点に基づけば北西角の杭列は水路に関連した堰状遺構と評価することもできよう。

本遺構からは池内覆土および裏込土中から陶磁器が出土した。出土量並びにその器種は多岐に渡り、これら出土遺物の年代も17世紀末から20世紀初めと、相当な時期幅がある。ただし、石組裏込土から明治時代に下る陶磁器が出土していることから石組池の構築年代は明治時代に下る可能性が高い。ただし、大規模な改修の痕跡も認

められることから、残存している石組みについても全面的に積みなおされている可能性があり、遺構の最初の構築時期をそのまま示すとは言い切れない。幕末期の遺物も一定量認められることから幕末から明治時代にかけて存続した遺構であると推測される。



写真13 石組池状遺構 (B1区③-1)

#### 石列 [B1区③-3] (図15・写真14)

B1区中央部で検出された。長さ5.2m、幅0.8mの石列である。南北方向に軸を持つが残存状態が悪く、本来の長さは不明である。2つの石列が並行しており、一見すると溝状を呈しているが、上面が平坦になるように石材を配置しており、さらに上段に石積みを行った形跡も認められないことから、水路として使用された遺構ではないと考えられる。石材は一辺30cm~50cmのやや扁平な石を用いている。また西側の石列では面を揃えて並べている。

本遺構の性格としては建物に関係する遺構である可能性が高い。礎石列、雨落溝などの可能性が考えられるが、後世の擾乱が著しく、部分的に石列を検出するにとどまったため、特定は困難である。なお、本遺構からは遺物の出土を見なかった。



写真14 石列 (B1区③-3)

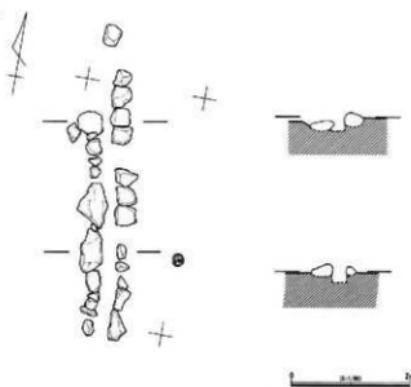


図15 石列 (B1区③-3)

(2) 第Ⅱ遺構検出面（幕末～明治時代中期）（図16、17・写真15、16・表2、3）

第Ⅱ遺構検出面はA区及びB2区において確認された。標高351.3m前後に広がる遺構面である。本遺構面の所属時期は検出面及び各遺構出土陶磁器の年代などから概ね江戸時代末（幕末）から明治時代中期とみられる。

A1区では上層の石炭殻廃棄とともに擾乱がおよぶものの、多くの土坑が検出された。また壁面を杭と葦状の植物で土留めを囲った方形遺構も検出された。さらにA1区南東側では比較的広範囲にわたる方形の落ち込みがみられた。建物に関する遺構の可能性もある（写真17）。

A2区では3条の溝状遺構（A2区②-2・4・5）を検出した。しかしいずれの溝もその用途、性格は判然としない。B1区との境界上からは石組遺構が確認された。この遺構はB1区での調査で石組池状遺構の一部であることが判明している。

A3区においては調査区の西側と東側で遺構の様相が全く異なる。西側においては土坑が数多く検出された（写真18）。

これら土坑の多くは円または不整円形で深さは浅く、10～15cm程度である。また、規則性を有して直線上に配置された石列が検出された。礎石列の一部とみられ、その周囲には多くの杭が確認された。さらにこのA3区西側では遺構面が硬化しており、これを生活痕跡として認識した。こうした西側の状況に対し、A3区東側では遺構面はφ3～5cmの角錐からなる礎面であり、確認された遺構も少ない。後世の影響も考えられるものの、A3区東西で土地利用のあり方が異なっていたことを暗示させる。また、A3区東側で検出された遺構の一つに方形板組遺構がある。壁面を横板と縦杭で土留めを施した遺構であり、埋土からは金銅製鉗と鉄製槍先が出土した。



写真15 第Ⅱ遺構検出面（A区）



写真16 第Ⅱ遺構検出面（B2区）

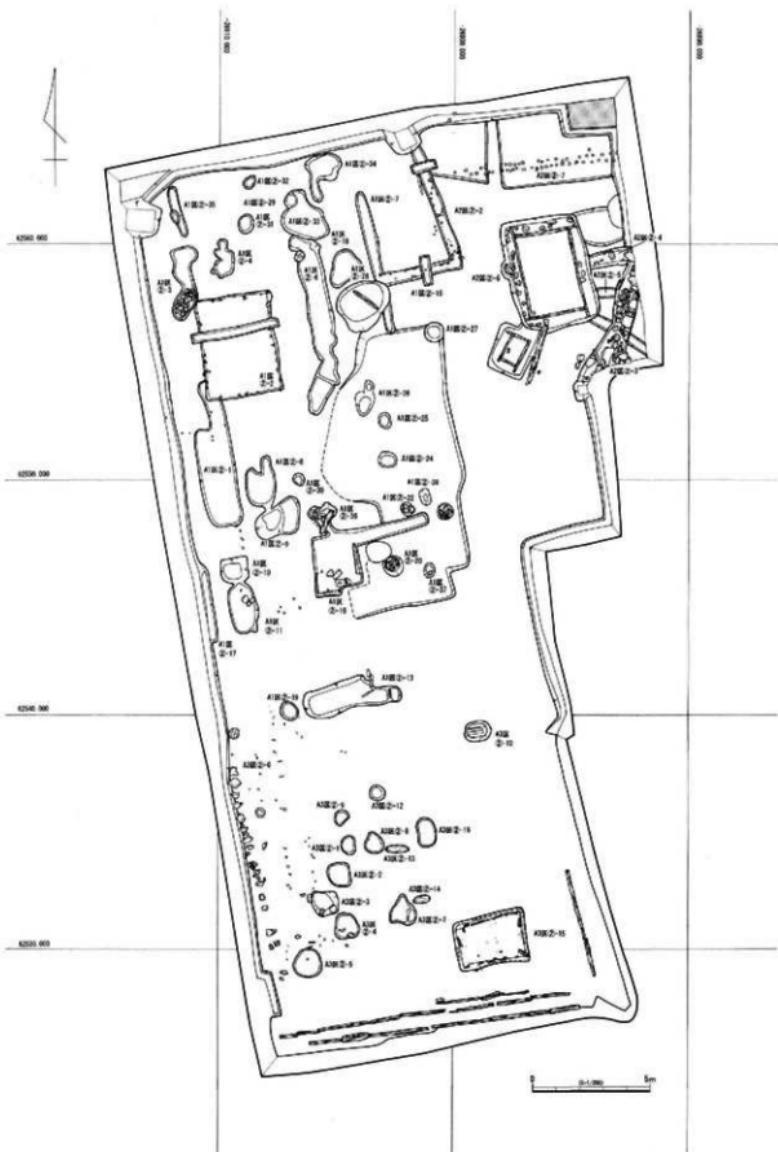


図16 第II造構検出面 (A区)



图17 第II・III造構検出面 (B2区)

表2 幕末～明治中期遺構検出面 遺構観察表(1)

調査区	遺構番号	性格	形状・断面	規模	方向等	備考	時期
第Ⅱ遺構面(幕末～明治時代中期)							
A-1	②-1	複雜	長方形	1.5×6.3m, 深さ0.6m	南北方向	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-2	方形土坑	長方形	4.2×3.3m, 深さ0.5m	北辺・南北方向	①-2切られ、底面は斜面で、側壁は垂直。底面内に杭。地盤構成	幕末
A-1	②-3	複雜	不整形	3.1×1.1m, 深さ0.15m	南北方向	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-4	複雜	不整形		—	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-5	欠番					
A-1	②-6	複雜	溝状	1×7.7m, 深さ0.06m	南北方向	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-7	欠番					
A-1	②-8	複雜	不整形	1.25×2m, 深さ0.2m	—	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-9	複雜	隅丸長方形	2×1.4m, 深さ0.25m	—	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-10	複雜	隅丸長方形	1.15×0.7m, 深さ0.4m	—	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-11	複雜	梢円形	2.1×1.1m, 深さ0.1m	—	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-12	欠番					
A-1	②-13	複雜	長方形	4.15×1.2m, 深さ0.5m	東西方向	①-14と同一	明治以降
A-1	②-14	欠番				①-13と同一	
A-1	②-15	溝状遺構	U字形	幅0.5m, 長さ5.1m, 深さ0.05m	東西方向	溝内に石列(2列)。A-1②-28, 7に切られる	幕末～明治初期
A-1	②-16	生土跡遺構	不整形(方形断面)	2×2.5m, 0.7×3.3m	—	板材・杭など多数検出	幕末～明治初期
A-1	②-17	複雜	方形	3.3×0.5m以上, 深さ0.05m	南北方向	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込み	昭和初期(1945~)
A-1	②-18	複雜	不整形	1.2×1.65m, 深さ0.08m	—		
A-1	②-19	土坑	梢円形	0.6×0.7m, 深さ0.15m	—	断面V形, 性格不明	
A-1	②-20	土坑	梢円形	1×0.85m	—	底面に幼虫頭大の石多数	
A-1	②-21	埋埴-2	円形		—		
A-1	②-22	柱穴	梢円形	0.5×0.6m(基部), 0.5×0.5m(上部)	—	柱材一部残存。杭の可能性あり	
A-1	②-23	埋埴-3	円形	ø0.6m(基部), ø0.7m(上部)	—	底板のみ原位置を保つ。側壁は崩壊	時期不明
A-1	②-24	土坑	梢円形	ø0.8×0.65m, 深さ0.61m	—	性格不明	
A-1	②-25	土坑	円形	ø0.8m, 深さ0.03m	—	性格不明	
A-1	②-26	土坑	不整形	0.8×1.55m, 深さ0.68m	—	性格不明	
A-1	②-27	土坑	円形	ø0.85m, 深さ0.06m	—		江戸後期?
A-1	②-28	土坑	梢円形	2.3×1.9m	—	底面に木材, A-1②-7に切られ, A-1②-6に切られる	幕末
A-1	②-29	土坑	不整形	2.8×1.9m	—	A-1②-33と同一遺構。底面に石。A-1②-6に切られる	幕末
A-1	②-30	土坑	円形	ø0.45m, 深さ0.01m	—	性格不明	
A-1	②-31	土坑	梢円形	0.7×0.8m	—		幕末
A-1	②-32	土坑	円形	0.6×0.5m, 深さ0.14m	—		江戸後期?～幕末
A-1	②-33	欠番				A-1②-29と同一遺構	
A-1	②-34	複雜	不整形	1.5×1.9m	—	1次面の石炭殻廃棄土坑の掘り込みか	
A-1	②-35	土坑	U字形	0.4×2.2m	南北方向	性格不明	幕末～明治初期
A-1	②-36	土坑	不整形	1.2×2m	—	土内に木質物多数。性格不明。ゴミ廃棄土坑か	幕末?～昭和初期
A-1	②-37	土坑	梢円形	0.6×0.45m	—	底面より下駄出土	
A-1	②-38	土坑	隅丸方形	0.6×0.45m, 深さ0.1m	—		
A-1	②-39	埋埴-5			—		時期不明
A-2	②-1	欠番				A-2区1次面8号遺構の掘り込み	
A-2	②-2	溝状遺構	U字形	幅0.5m, 長さ5.5m, 深さ0.05m	南北方向	A-2区8号遺構と接続	幕末～明治
A-2	②-3	石槽遺構			—	B-1区①-1の一部	幕末～昭和初期
A-2	②-4	溝状遺構	台形	幅0.5×5.5m, 高さ0.5m	東西方向	A-2②-2, A-2②-3に切られる	
A-2	②-5	溝状遺構	台形	幅0.4×2.5m, 高さ0.3m	東西方向	A-2②-2, A-2②-3に切られる	
A-2	②-6	埋埴-4	円形	ø0.55m	—	1/2残存, A-2②-2に切られる	時期不明
A-2	②-7	杭州		幅0.3m, 長さ7m以上	東西方向	2列の杭列。20~30cm間隔。性格不明	
A-3	②-1	土坑	梢円形	0.6×0.8m, 深さ0.18m	—	中央に杭入り。底面平坦	
A-3	②-2	土坑	方形	0.69×0.9m, 深さ0.2m	—	底面平坦	
A-3	②-3	土坑	方形	0.9×1m, 深さ0.15m	—	断面浅いV形	幕末
A-3	②-4	土坑	梢円形	1×1.1m, 深さ0.07m	—	底面平坦	明治以降
A-3	②-5	土坑	円形	ø1.2m, 深さ0.2m	—	底面平坦, 杭あり	明治以降

表3 幕末～明治中期遺構検出面 遺構観察表(2)

調査区	遺構番号	性格	形状・断面	規 模	方向等	備 考	時 期
第Ⅱ遺構面(幕末～明治時代中期)							
A-3	②-6	石列		幅0.3m、長さ5.1m	南北方向		幕末～明治
A-3	②-7	土坑	不整形	1.1×1.25m、深さ0.07m	—	底面平坦	
A-3	②-8	土坑	不整円形	0.9×0.8m	—	底面平坦	
A-3	②-9	土坑	不整円形	0.6×0.65m、深さ0.6m	—	底面平坦	
A-3	②-10	埋植-1	隅丸長方形	1.0×1.0m、1.0×0.5m	長辺東西方向	鉄製タガ。現代遺構	大正～昭和以降
A-3	②-11	土坑			—		
A-3	②-12	土坑	円形	φ0.65m、深さ0.2m	—	断面台形	幕末～明治初期
A-3	②-13	埋乱	不整円形	1×0.3m、深さ0.05m	—		
A-3	②-14	埋乱	不整円形	0.75×0.35m、深さ0.05m	—		
A-3	②-15	木綿土坑	長方形	4.0×1.3m、高さ0.3m 3.1×2.6m(壁厚)、高さ0.3m	長辺東西方向	横板と杭で壁面土留め。性格不明	幕末～明治前期
A-3	②-16	土坑	楕円形	0.75×1.25m、深さ0.05m	—		
A-3	②-17	埋植-6		φ0.45m	—	側板1/2欠	時期不明
B-2	②-1	溝状遺構	台形	幅0.55m、高さ0.3m、深さ0.1m	南北方向	板組木路。東壁は残存せず	
B-2	②-2	溝状遺構	台形	幅0.6m、高さ0.3m、深さ0.15m	南北方向	途中で分岐し、側壁なし。石垣地盤上に築かれたもの可能性あり	昭和期以降?
B-2	②-3	土坑	不整円形	1×1m、深さ0.3m	—	明黄色地粘土を土坑内面に貼り付け	
B-2	②-4	溝状遺構	U字形	幅0.4m、高さ0.7m、深さ0.1m	南北方向	調査式南側由南東方向へ屈曲	昭和期以降?
B-2	②-5	欠番			—		
B-2	②-6	埋乱	隅丸長方形	1.5×1.3m、深さ0.2m	—	時代の金属・ガラス品が切たたき出土。時代ズミ埋蔵土坑	昭和期以前(1945~)
B-2	②-7	埋乱	楕円形	8.5×1.2m、深さ0.13m	—	時代の金属・ガラス品が切たたき出土。時代ズミ埋蔵土坑	昭和期以前(1945~)
B-2	②-8	埋乱	楕円形	幅0.65m、高さ0.6m、深さ0.3m	南北方向	石灰岩を充填した土坑にともなう埋り込み	昭和期以前(1945~)
B-2	②-9	埋乱	楕円形	0.5×0.75m、深さ0.2m	—		時期不明
B-2	②-10	埋植	円形	4.0×4.0m、高さ0.85m	—	側板残存	時期不明
B-2	②-11	埋乱	楕円形	0.45×0.6m、深さ0.04m	—	底面平坦	時期不明
B-2	②-12	埋乱	円形	0.8×0.7m、深さ0.2m	—		時期不明
B-2	②-13	埋乱	隅丸長方形	1×0.8m	—		時期不明



写真17 性格不明落ち込み (A 1 区②-16)



写真18 土坑群 (A 3 区)



写真19 埋植 (B 2 区②-10)

#### 方形造構【A 1 区②-2】(図18・写真20, 21)

A 1 区西側において検出された。規模 $1.7\text{m} \times 2.2\text{m}$ 、造構面からの深さ最大 $25\text{cm}$ を測る。壁面は垂直であるが、底面は中心に向かってゆるやかに傾斜する。一部南西角が擾乱を被っているものの残存状態は良好であつた。壁面は約 $20\text{cm}$ の間隔で $\varnothing 5\text{ cm}$ 程の丸杭を打ち込み、ここに葦状の植物を横方向に互い違いにあたかも杭に編みこむかのようにして垣根状にすることで土留めとしての役割を果たしている。

この構造は規模とその構造材こそ違うものの、東京都沙留遺跡において確認されている土留め竹柵造構<sup>2</sup>と共に通

するものであり、近世には土留め工法の一つとして広く用いられていたことがうかがえる。出土遺物は陶磁器がそのほとんどを占め、その推定年代は幕末期にあたる。本造構の性格については不明である。調査当初は池状造構として把握していたが、その後櫻土土層断面の検討から池状造構の可能性は低いと判断した。周囲から本造構に接続する溝など、関連する造構が検出されなかつることもこの所見に矛盾しない。想定される性格としては塵芥溜めなどが考えられる。

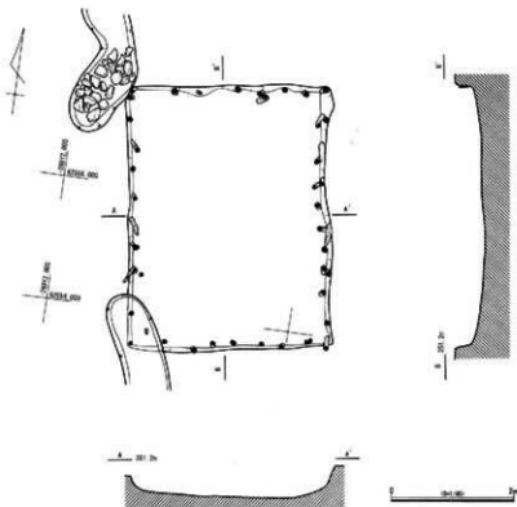


図18 方形土坑(A 1 区②-2)



写真20 方形土坑(A 1 区②-2)

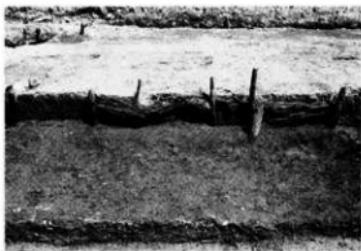


写真21 土留め板柵(A 1 区②-2)

### 礎石列 [A3区②-6] (図19・写真22)

A3区西壁に沿うように直線に並ぶ形で検出された。幅30cm、長さ9mを測り、その北端は調査区外へと続いているとみられる。石材は15~20cm角であり、その上面が平坦面をなすように中心間約30cmの間隔で配置されている。このような規則性を有することから礎石列と判断した。調査区内には他に本遺構に関連する石列が確認できず、調査区外へ石列が続いていると想定されることから調査区外西側に礎石建物が存在するとみられ、本遺構はこの一部にあたると考えられる。なお、この礎石列と軸を同じくする杭列が2列認められる。この他にもA3区西側では多くの杭が検出されており、この建物跡と何らかの関連性を有するものと考えられる。また、A3区西側は遺構面が硬く締まった硬化面を呈している。この硬化面の性格については生活によって踏み固められた生活痕跡の可能性が高く、礎石建物とその周辺の生活面という景観が復元できる。なお、本遺構からは遺物が出土しなかった。



写真22 磨石列 (A3区②-6)

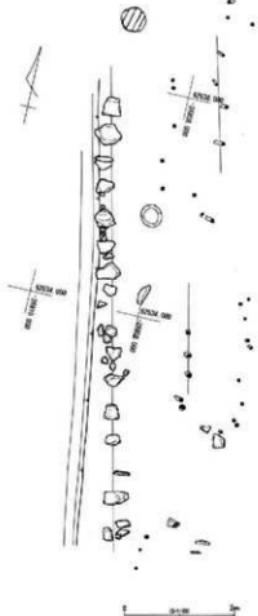


図19 磨石列 (A3区②-6)

### 木組土坑 [A3区②-15] (図20・写真23, 24)

A3区南東側において検出された。約3m×2.3mの長方形を呈し、短辺を南北方向にとる。深さは最も深い中央部で遺構面からの深さ35cmを測り、中央に向かってゆるやかな播鉢状の底面形状を有する。その壁面は横板と堅杭によって構築されており、A1区②-1遺構同様に土留めを目的としていたことが看取できる。また、使用された木材は転用材がほとんどで、やや雑然とした印象を受ける。



写真23 木組土坑 (A3区②-15)

本遺構の埋土からは比較的多数の遺物が出土した。その多くは陶磁器であり、18世紀末から19世紀初頭の年代を示す資料が大半を占める。煎茶碗が完形品を含め、多数出土している点が本遺構出土陶磁器の特徴である。また、特筆すべき遺物として金銅製鉢と鉄製槍先がある。どちらも床面直上より出土しており完形であった。埋土中の出土遺物より推定される本遺構の廃絶年代は明治時代前期である。構築年代については不確定な要素が多いものの、江戸時代後期（18世紀末）を上ることはないと推測される。また本遺構の性格についても不明な点が数多い。調査当初、池状遺構、地下室状遺構、塵芥溜（ゴミ穴）等の可能性が考えられたが、埋土の堆積状況からは本遺構が短期間に内に埋没していたことが窺え、池状遺構であった場合に存在するであろう自然堆積土が認められない。さらに擂鉢状の底面形状は地下室状遺構としてはやや不向きであろうと考えられることから、池状遺構および地下室状遺構の可能性は低いと考えられる。ここでは塵芥溜の可能性を挙げておきたい。



／写真24 木組土坑（A3区②-15）壁面

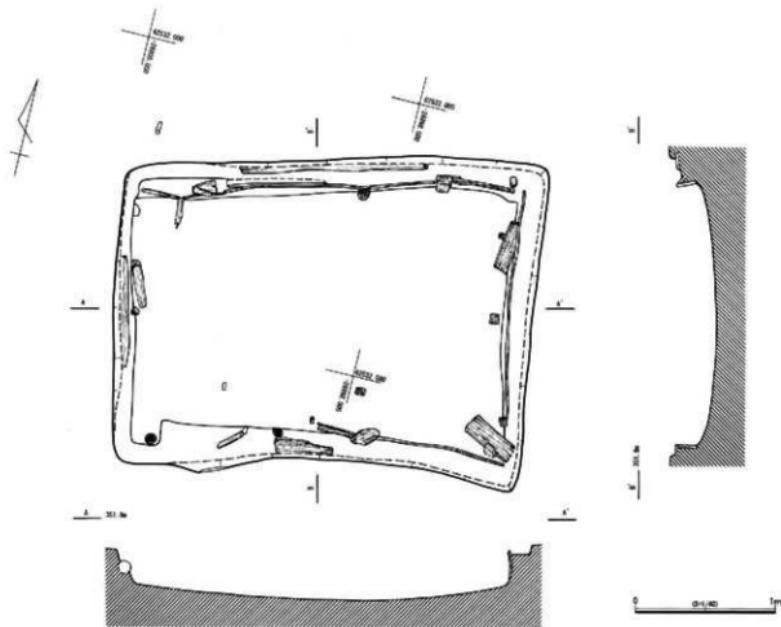


図20 木組土坑（A3区②-15）

### 溝状遺構 [B2区②-1] (図21・写真25)

B2区東側において検出された。幅0.7m、長さ6m以上で南北方向に延びる。遺構面からの深さ4cmを測る溝状遺構である。上部は削平されており、溝の底面と立ち上がりの部分しか捉えることができなかつたが、西壁では横板と堅杭を用いて壁面を構築していることが確認された。東壁では検出されなかつたものの、東壁も同様の構造であったと推測され、側壁に板組を用いる板組溝であった可能性が高い。この板組溝は北側について調査区外、南側はB1区の範囲内に延びていると想定されるものの、B1区では擾乱のため確認できなかつた。

そのため本遺構の性格について不明な点が多い。一つの可能性として考えられるのは、本遺構の東方向に走る街路との関連性である。この街路は絵図などから江戸後期においても現在と同じく南北方向に延びていたことが確認されている<sup>3</sup>。本遺構はこの街路と並行する形で延びていることから街路を意識して構築された可能性がある。ただし本遺構は街路から約9m程西側に位置することから、ここでは街路に面した建物などに付随する雨落溝や排水溝であったと推測しておく。

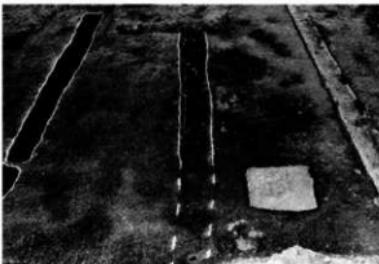


写真25 溝状遺構 (B2区②-1)

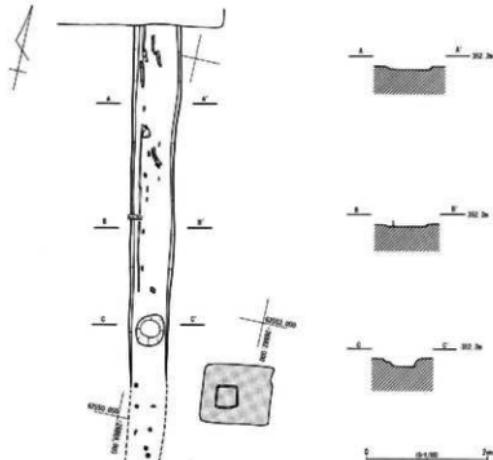


図21 溝状遺構 (B2区②-1)

(3) 第Ⅰ造構検出面（明治中期～昭和前期）（図22・写真26・27・28・表4）

第Ⅰ造構検出面はA区において確認された。標高351.7m前後に広がる造構面である。本造構面の所属時期は各造構出土遺物より、19世紀中頃～20世紀中頃（明治中期～昭和前期）と考えられる。

A3区では調査区の壁面に沿って延びる形で東方向・北方向にそれぞれ石組溝状造構が検出され、A2区ではこれに接続するとみられる大小の石組池状造構が検出された。後述するが、泉水路とこれに接続する池であると考えられる。A1区では現代の搅乱が著しく造構がほとんど残存していないかったものの、方形石組造構が検出された。なお、A1区において確認された搅乱は石炭が燃焼した後に残る石炭殻を廃棄した振り込みによるものである。南北方向に長い布掘りを何本も掘削し、石炭殻を廃棄している状況が確認された（写真27）。このA1区とA2区の境界上からは、両区を分かつて溝状造構が検出された。その性格は敷地の境界施設に關係するものとみられ、おそらく近現代の堀の基礎と考えられる。また、A2区においては北側で疊敷面が検出された。当初は性格が不明であったが下層確認の結果、疊面下に多量の丸太が積きつめられていたことから、本造構は重量建物の基礎地盤に関する筏状基礎の一形と判明した（写真28）。この他A3区では覆土中に比較的大形の木材を多く含む溝状造構が検出された。ただし周辺に關係する造構が見られず、性格は不明である。また、第Ⅰ造構検出面からは5基の埋桶が検出された（写真29）。直径は30cm程度のものと50cm程度の2つの法量が存在するようである。側板が完存するものはみられず、桶内埋土からの出土遺物も数少ない。



写真26 第Ⅰ造構検出面（A区）



写真27 A1区擾乱状況



写真28 建築基礎（A2区①-8）

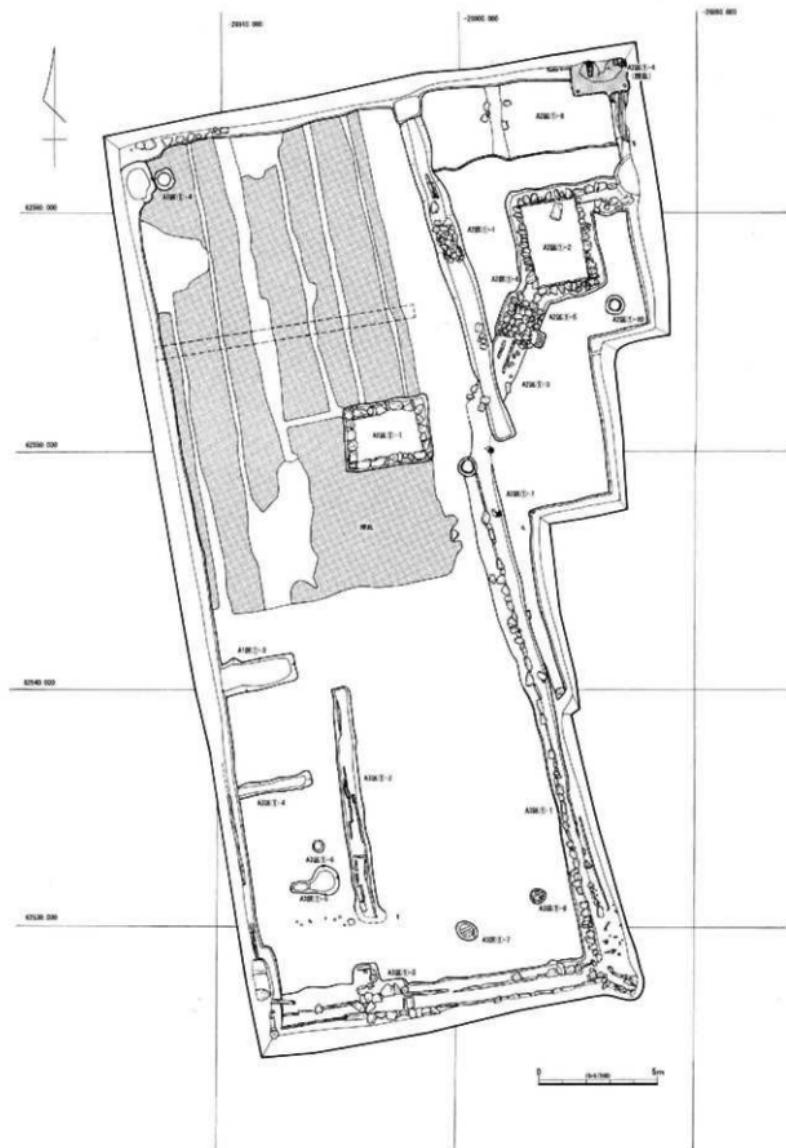


図22 第1遺構検出面（A区）

表4 明治中期～昭和前期遺構面 遺構観察表

調査区	遺構番号	性格	形状・断面	規模	方向等	備考	時期
第1 遺構面 (明治時代中期～昭和時代前期)							
A-1	①-1	方形石組遺構	長方形	1.8×2.5m	長辺・東西方向	石積み2段目まで残存。 地下状遺構か。	明治中期～昭和初期
A-1	①-2	矢番					
A-1	①-3	複雑	長方形・U字形	1.2×3.0m, 深さ0.3m	東西方向	現代ゴミ廃棄土坑	昭和期以降(1945～)
A-1	①-4	埋植-1		ø 0.5m(幅), ø 0.8m(奥行)	—		時期不明
A-2	①-1	構状遺構	台形		南北方向	現代建築基礎・埋土角樋 (ø 10~15cm)	昭和期以降(1945～)
A-2	①-2	石組池(大)	長方形	2.3×3.5m, 深さ0.85m	長辺・東西方向	小型の池状遺構と接続、南→北東水路に よりB1区①-2と接続。	明治～昭和初期
A-2	①-3	石組構状遺構	底面平坦	幅0.3m	南西→北東 方向	石組は削平され、胴木のみ残存。A2③-9 に切られる。	幕末～昭和初期
A-2	①-4	複雑	長方形(推定)	(1.3)×2.2m, 深さ0.45m	長辺・東西 方向	矢状状の木枠、床面コンクリート。現代 の沿岸水閑施設	昭和期以降
A-2	①-5	石組池(小)	長方形	0.8×1.2m, 深さ0.45m	長辺・北東～ 南西	A2③-1, 3, 6と接続、南からの水を貯留し、 ①～5～。皆神山系石材で構築される	明治～昭和初期
A-2	①-6	石組構	底面平坦	幅0.5m, 長さ0.8m	南西→北東 方向	A2③-5と接続、西側壁には板材使用	明治～昭和初期
A-2	①-7	石組構	底面平坦	幅0.4m, 長さ 13.6m, 深さ0.3m	南→北方向	A2③-3, A3③-1と接続、A2③-1を切る	幕末～昭和初期
A-2	①-8	建築基礎		3.5×8.3m	丸太・南北方向, 東西方向	丸太を並べ、端で埋める。2区画に分かれる。重量堆 積基礎(仮称基礎?)か。A2③-1に切られる	昭和期以降
A-2	①-9	矢番					
A-2	①-10	埋植-3		ø 0.5m(幅), ø 0.8m(奥行)	—		時期不明
A-3	①-1	石組構	底面平坦	幅0.3m, 長さ 9.1m, 深さ0.3m	南→北方向	南西端に導水路。A2③-7, A3③-3と接続	明治末～昭和初期
A-3	①-2	構状遺構	台形	幅0.4m, 長さ 3.9m, 深さ0.2m	南北方向	埋土に板材など多數含む。性格不明	時期不明
A-3	①-3	石組構	底面平坦	幅0.5m, 長さ 13.4m, 深さ0.2m	東→西方向	最下段のみ残存。A3③-1と接続。建築材 を転用した胴木を使用	大正～昭和初期
A-3	①-4	複雑	溝状・台形	幅0.5m, 長さ2.2m 以上, 深さ0.2m	東西方向		時期不明(昭和?)
A-3	①-5	複雑	柄輪形	2m×1.2m, 深さ0.45m	—		時期不明(昭和?)
A-3	①-6	埋植-1		ø 0.28m(幅), ø 0.6m(奥行)	—		時期不明
A-3	①-7	埋植-2		ø 0.6m(幅), ø 0.85m(奥行)	—		時期不明
A-3	①-8	埋植-5		ø 0.35m(幅), ø 0.8m(奥行)	—		時期不明

## 方形石組遺構 [A1区①-1] (図23・写真30)

方形石組遺構 (A1区①-1) は大きさ3.7m×2.8m、遺構面からの深さ40cmの方形石組で構成される。石積みは部分的ではあるが2段目まで残存しており、最下段下には胴木が検出された。ただし、この胴木は未加工の丸太を板材などに加工する際に生じる最外縁部の材を用いており、胴木というよりもむしろ板材とも言えるもので、他の遺構で確認された胴木と比較して強度も極端に弱く、石組の基礎地盤としては脆弱である。このことから本遺構の石組みは3段程度の小規模なものであったと推測される。本遺構はA1区全域に広がる石炭窓の大規模な廃棄土坑による搅乱を切って構築されていることから、その構築時期はかな



写真29 埋植 (A2区)

なり新しいと推測される。石炭殻の廃棄土坑は昭和30年代頃の製糸工場の操業にともなうものと考えられることから本遺構はこれ以後の所産の可能性が高い。出土した陶器についても、昭和中期を中心とする現代の遺物が主体を占めることから、遺構からの所見と矛盾しない。その性格については不明な点が多く判然としないものの、構造が簡単であり、水路との関連性も認められないことから池状遺構以外の遺構であると推測される。



写真30 方形石組遺構（A1区①-1）

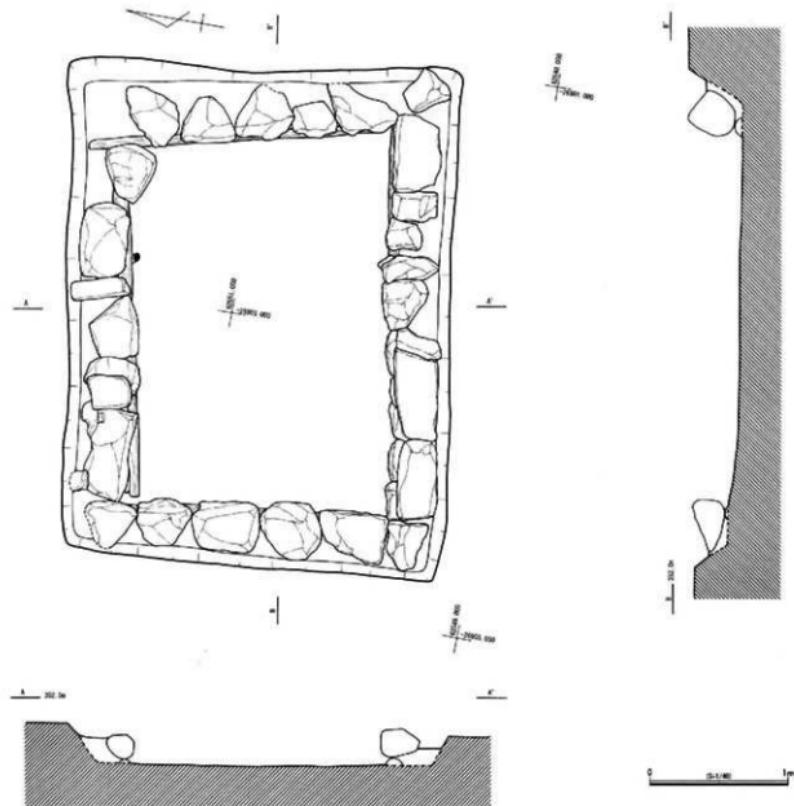


図23 方形石組遺構（A1区①-1）

### 石組溝【A2・3区】(図24・写真31、32)

A2・3区を横断し、B1区に至る形で検出された。A3区南西端より東西方向に延びる溝(A3区①-2)、南北方向に延びる溝(A3区①-1、A2区①-7)の2系統が検出され、後者は大小の石組池と接続する。本遺構はいわゆる泉水路と呼ばれる性格のものであると考えられ、松代城下町を特徴付ける遺構の一つである。遺構断面および地形の検討からA3区南西端から調査区内に導水し、東方向と北方向へと流れる2系統の流路をとっていたと推定される。A3区南西端からは導水路と考えられる石組溝が検出された。幅約20cm、高さ約30cmを測り、石組みは2段まで残存している。最下段には胴木が確認できた。また、溝内への石積みのせり出しを抑えるためか、φ5cmの杭が打たれてい。この導水路は1mほど続き、Y字形に2系統に分かれ。東方向に延びる溝(A3区①-3)は一部分を除くとほとんど石積みが残存しておらず、胴木のみが検出された。その規模は胴木間の幅20cm、導水路との分岐点からの長さ13.5mを測る。調査区外へと方向を変えることなく延びていることから実際の長さは不明である。

このA3区①-3遺構の特徴として挙げられることは胴木が建築部材の転用品であることであり、角材を多く用いる点が主として丸太を用いる他の石組溝と異なる。南方向に延びる溝(A3区①-1・A2区①-7)は幅15~20cm、導水路との分岐点から石組池との接続点までの長さ約28mを測る。遺構面からの深さは15~30cmである。その特徴としては調査区の境界に沿うように構築されている点が挙げられる。A3区とC区との境界線に沿うように北方向へ延びた後、方向を変じてA2区の石組池へと接続しており、敷地境に沿って流れる泉水路の様子が想起される。なお、石組池との接続部手前で現代の建築基礎に切られている。また接続部一帯は遺構の残存状態が悪く、一部で溝の範囲を確認することができなかった。そのため推定ラインを示している。

石組溝からは多くの遺物が出土した。そのほとんどが陶磁器であり、これら出土遺物の年代から本遺構の時期をある程度知ることができる。石組溝裏込土からの出土遺物は概ね明治末期の年代の陶磁器であり、これに対し、溝内出土の陶磁器には昭和中期まで年代の下るもののが含まれる。このことから、本遺構は明治末期に構築され、昭和中期に廃絶されたものと考えられる。



写真31 石組溝



写真32 石組溝導水部 (A3区)

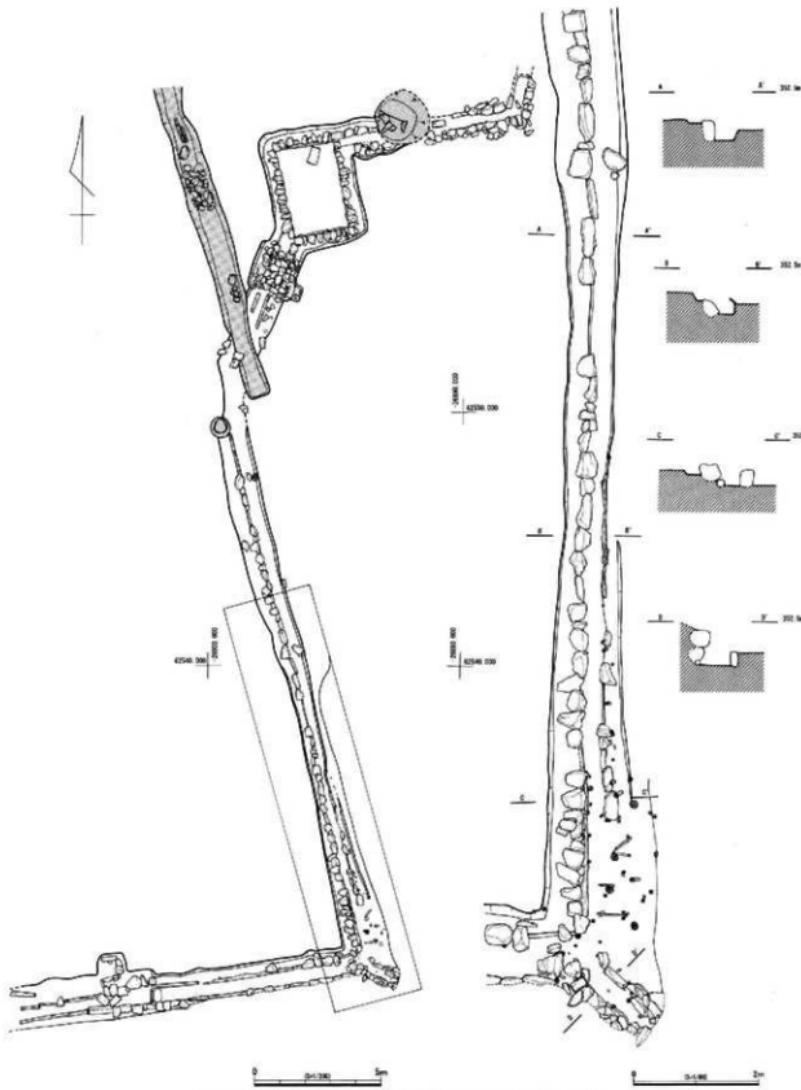


図24 第1造構検出面 泉水路全体図および石組溝拡大図

### 石組池(大) [A2区①-2] (図25・写真33, 34, 35, 36)

石組池(大)(A2区①-2)は石組み内側の大きさ3.5m×2.5m、構築土坑の大きさ5m×3.5m遺構面からの深さ1.1mを測る。最大4段の石積みで構築され、最下段には胴木が確認できる。石組池(小)(A2区①-5)とは南東端において板組溝(A2区①-6)を介して接続している。また、北西角には石組溝が片側の壁を石組池の北壁と連続するように接続しており、擾乱の影響を受けた部分もあるものの、第Ⅲ遺構面に属するB1区1次面において検出された、上層遺構である石組溝(B1区①-2)と接続している。後述するが、B1区①-2の石積みは2段まで残存しており、3.5m程西方向に延びた後、北方向へとその向きを変えている。この遺構がこの後どのような流路をとるかは擾乱により不明である。

本遺構の石積みは胴木上にやや大型の石材を積んだ後にやや小型の石材を各段毎順次積んでおり、その小口は整えられている。控えには拳大程の石材おおよび煉瓦を裏込め石として用いている。

本遺構の所属時期に関しては、構築時期に直接関わる要素として石積みの裏込め石に煉瓦が少なからず用いられていたことが挙げられる。国内での煉瓦の本格的な生産開始と使用は明治以降のことであり、石積みの最下段においても裏込めに煉瓦が用いられていたことからも、本遺構の構築時期は明治以降であることは明らかである。

出土遺物は陶磁器がほとんどである。その年代は江戸後期から昭和初期までと幅広く、遺構の時期を知るにはやや難があるものの、上記の通り遺構構築時期は明治以降であることは確定的であり、また遺構の掘り込みが江戸後期の遺構面にまでおよんでおり、遺物の搅乱・混入の可能性は無視できないことからも、本遺構は明治以後に構築され、遅くとも昭和初期までには廃絶されたと考えるのが妥当であろう。



写真33 A2区 石組池



写真34 石組池(大) (A2区①-2)



写真35 石組池(大) 石積み状況



写真36 石組池(大) 脇木検出状況

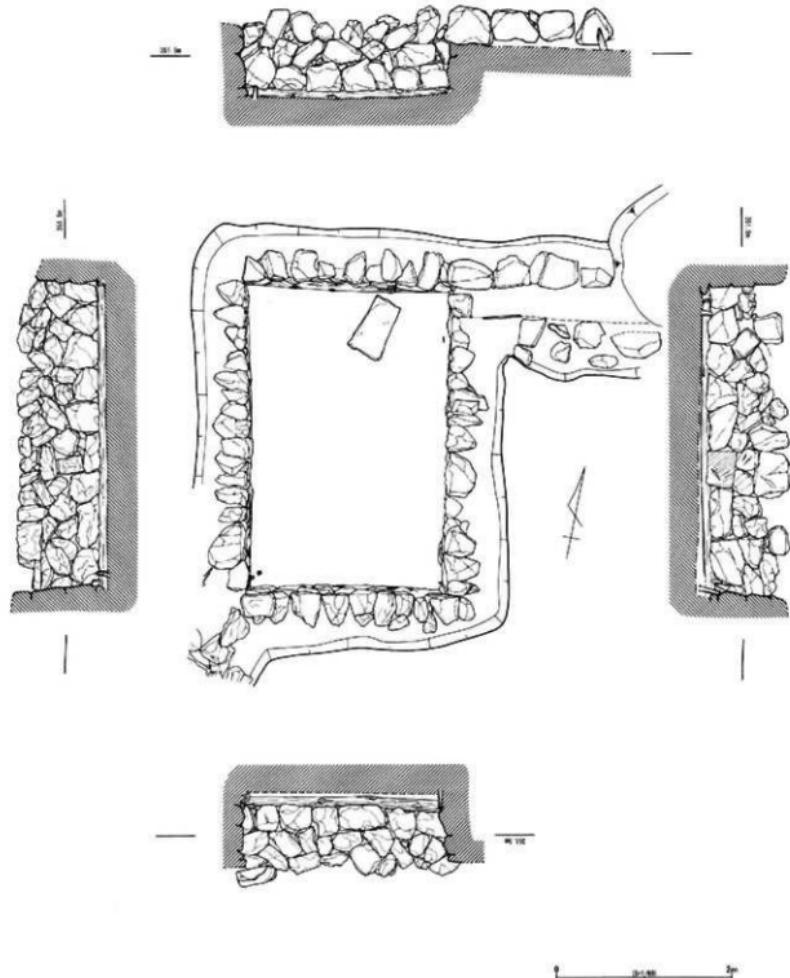


图25 石组池(大) (A2区①-2)

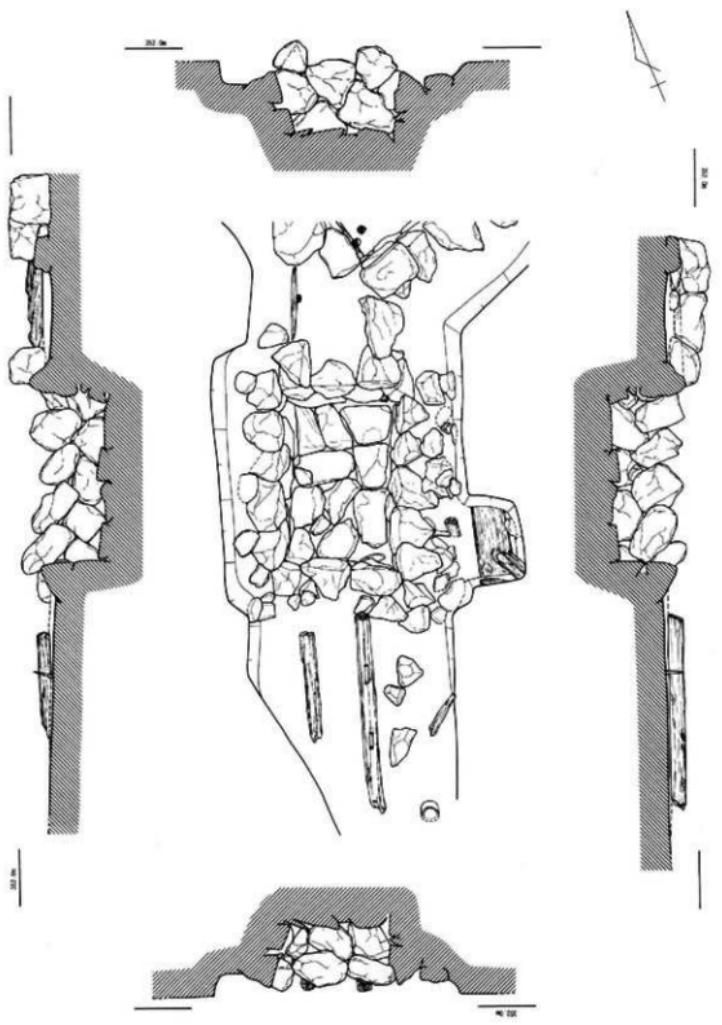


图26 石组池(小) (A 2区①-5)

### 石組池（小）【A2区①-5】（図26・写真37、38）

石組池（小）は大きさ1.2×1.8m、深さ70cmを測る。底面も石組みで構築され、側面は2段の石積みが残存している。構築石材はその全てが赤色を呈する皆神山産安山岩とみられる点が特徴的である。石積みは石組池（大）とその技法を異にし、胴木を方形に配置した内側に底面となる板状の石材を敷き、両長辺から石積みを開始する。その積み方長方形に整えた石材を斜めにして、隣接する石材にもたれかけるようにして、各段毎積んでいくというものである。長辺が完成後、短辺の石積みを行うという一連の工程が復元される。

本遺構の時期については、遺構からはその構築・廃絶時期を示す有力な手がかりは得ることができなかった。しかし、陶磁器を中心とする出土遺物から推測することは可能である。これによると、本遺構の出土陶磁器は江戸後期・幕末から昭和初期までと広い時期幅のものが出土しているが、主体となるのは明治以降のものである。江戸時代の遺物に関しては石組池（大）同様に石組池構築にともなう搅乱・混入の可能性がある。だが、本遺構に関しては石組池（大）で見られたような、裏込めに煉瓦を用いるなど明らかに明治以降とされる要素が見られないことから江戸後期から幕末に構築時期が測る可能性は排除しきれない。しかしながら、本遺構は石組池（大）の付帯施設としての性格が想定されることから、石組池（大）と同時期あるいはそれ程間をおかずして構築されたと考えるのが自然であろう。このことから本遺構は明治以降に構築され、昭和初期まで存続した可能性が高いと考えられる。



写真37 石組池(小) (A2区①-5)



写真38 石組池(小) 脇木検出状況

### 石組溝【B1区③-2】（図27・写真39）

B1区1次面において部分的に検出された。本来B1区1次面はA区3次面と対応する遺構確認面であり、第Ⅲ遺構検出面にあたる。当初、B1区では第Ⅰ・Ⅱ遺構検出面は後世の搅乱を受け、破壊されていることが判明したため、A区3次面と対応する面を1次遺構確認面として調査を開始した。しかしながら上層の遺構である本遺構だけが部分的に搅乱を免れていたため、調査を実施したものである。このためB1区1次面上に土手状に遺構を検出する形での調査という異例の形となった。石組溝は長さ2.6m、幅20cm、深さ20cmを測



写真39 石組溝 (B1区③-2)

る。この石組構は先述したとおり、第1遺構検出面で確認された泉水路の一部と考えられ、石組池（大）から続く石組溝と接続することが図面上からも確認できた。石積みは部分的に2段目まで残存しており、A区石組構とは異なり樹木は確認されなかった。

水は石組池から流れてくるものと想定され、B1区内を通ってさらに調査区外へと流れていたものと考えられるが、B区では本遺構以外は擾乱のため残存していない。本遺構の年代については溝内および石組裏込土からの出土陶磁器の年代が参考になろう。溝内出土

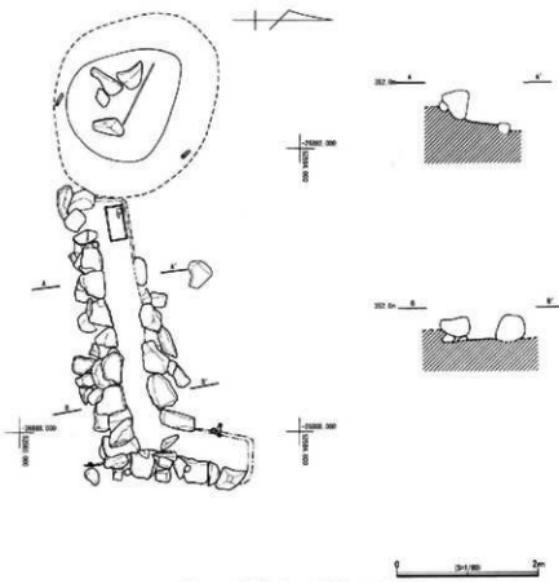


図27 石組構（B1区③-2）

陶磁器は江戸時代に比定されるものが主であるが、明治時代に下るものも見られることからその下限年代は明治時代であると言える。また、石組裏込土からも明治時代に比定される陶磁器が出土している。このことから本遺構は明治時代に構築され、比較的短期間で廃絶された可能性が高いと言える

1 長野市教育委員会 2005 『松代城下町跡～中木町・西木町・御屋町』長野市の埋蔵文化財第109集

2 東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡II－旧汐留貨物駅跡地内の調査－』

## 2 出土遺物

### (1) 土器・陶磁器（図28～47、表5～18）

今回の調査では陶磁器を中心に多くの出土をみた。この中には明治中期～昭和初期の造構面の遺物も含まれる。整理調査にあたっては全出土土器・陶磁器のうち、江戸時代に所属すると考えられる造構を中心に、造構単位および検出面単位で整理委託業務を行い、実測遺物の選定および実測対象遺物、実測対象外遺物ごとに遺物観察表を作成し、実測図化を実施した。したがって報告書掲載遺物は全出土土器・陶磁器の内のほんの一部に過ぎず、全造構・全造構面の様相を完全に示すものではないことを断つておく。しかしながら、遺物の選択に際しては江戸期の造構および造構面の様相が明示できるよう留意し、明治以降の造構面についても限られた数量ではあるが造構別の様相が提示できるよう努めた。掲載にあたって、陶磁器類は以下のように類別した。

土器・瓦質土器・陶器・軟陶<sup>1</sup>・焼締<sup>2</sup>・半磁器<sup>3</sup>・磁器

推定生産地については出土陶磁器の多くを占め、他地域の近世遺跡でも広く認められる肥前産や瀬戸美濃産、京焼などの分類に加え、関西系（三田焼など）や在地産のものについても可能な限り細かく生産地推定を行った。これに加え、松代城下町に特徴的な遺物に松代焼がある。これは材地産の陶器であり、18世紀末頃、松代藩の殖産興業政策の一環として開窯されたものであり、主に壺・甕・鉢などの実用品が焼成された。その特徴としては、胎土がかなり粗く、赤茶褐色から暗灰色で白色粒子を多く含み、器壁は総じて厚い傾向がある。また、施される釉は白釉、銅緑釉、鉄釉などであり、釉調は厚めでぼってりとした印象である。この松代焼は松代城下町およびその周辺の各窯で生産されていた。今回は細別できるものについては以下のとおりに細別した。

松代焼天王寺窯・松代焼寺尾名窯・松代焼荒神町窯・松代系<sup>4</sup>

これら出土土器・陶磁器の造構毎の特徴や時期別の変遷については第IV章第1節に詳しい。

1 軟陶…軟質施釉陶器を指す。楽焼や三彩など鉛釉の低火度焼成陶器がこれにあたる。

2 焼締…無釉の陶器を指す。

3 半磁器…胎土が磁器質だが白色に至らないものを指す。18c～19cの瀬戸美濃系、波佐見系粗製品などが含まれる。

4 松代系…松代焼ではあるが生産窯の細別が困難な資料がこれにあたる。

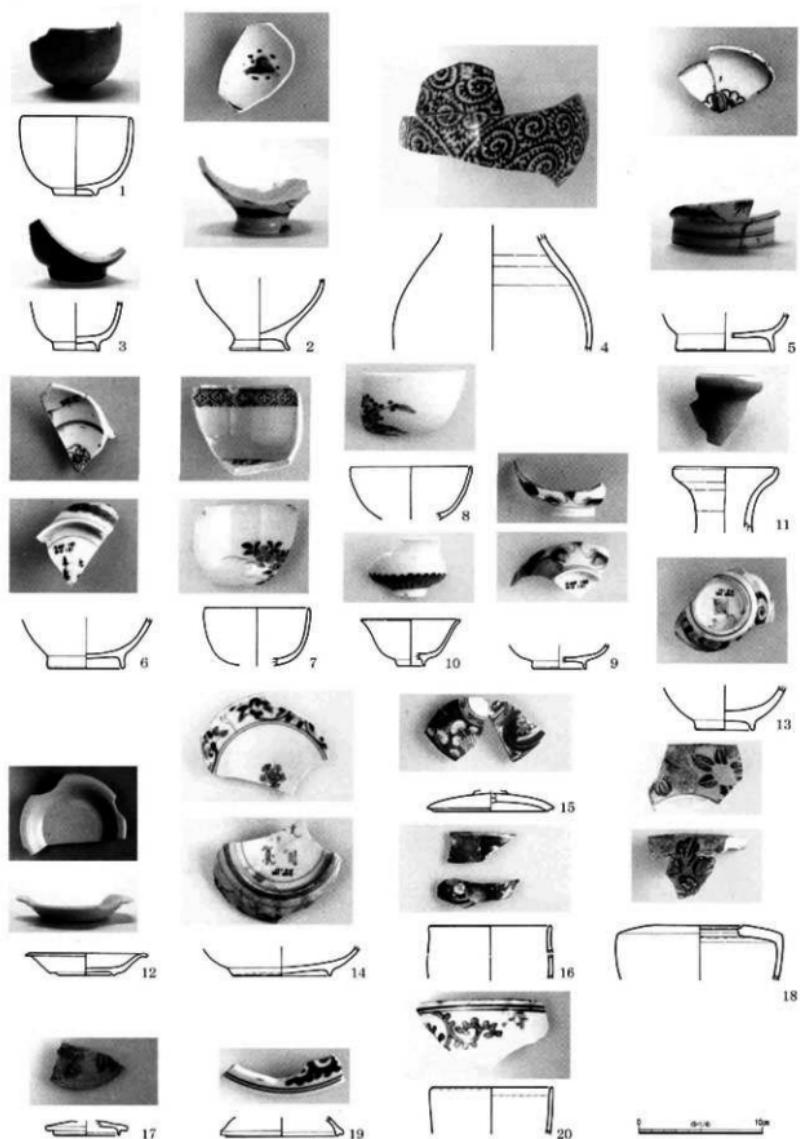


图28 第III遣構検出面出土陶磁器(A2区③-2・3・4号遣構)

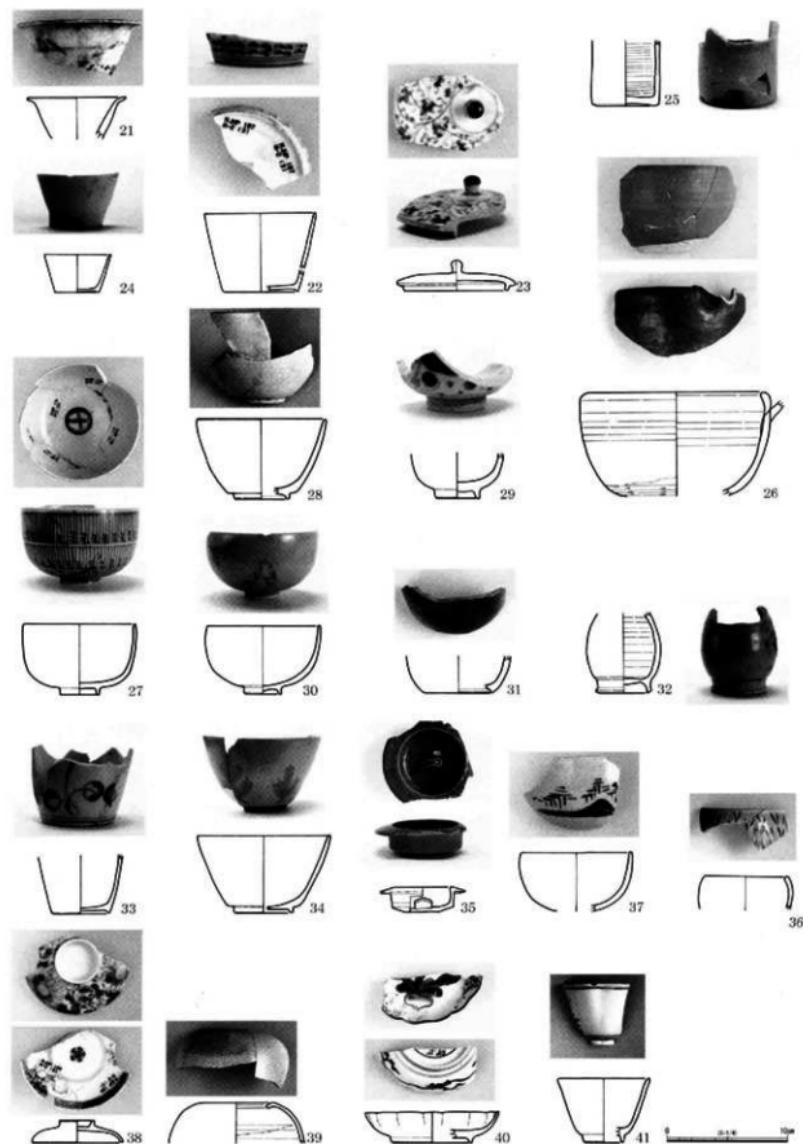


图29 第III遺構検出面出土陶磁器(A2区③-1・4号遺構)

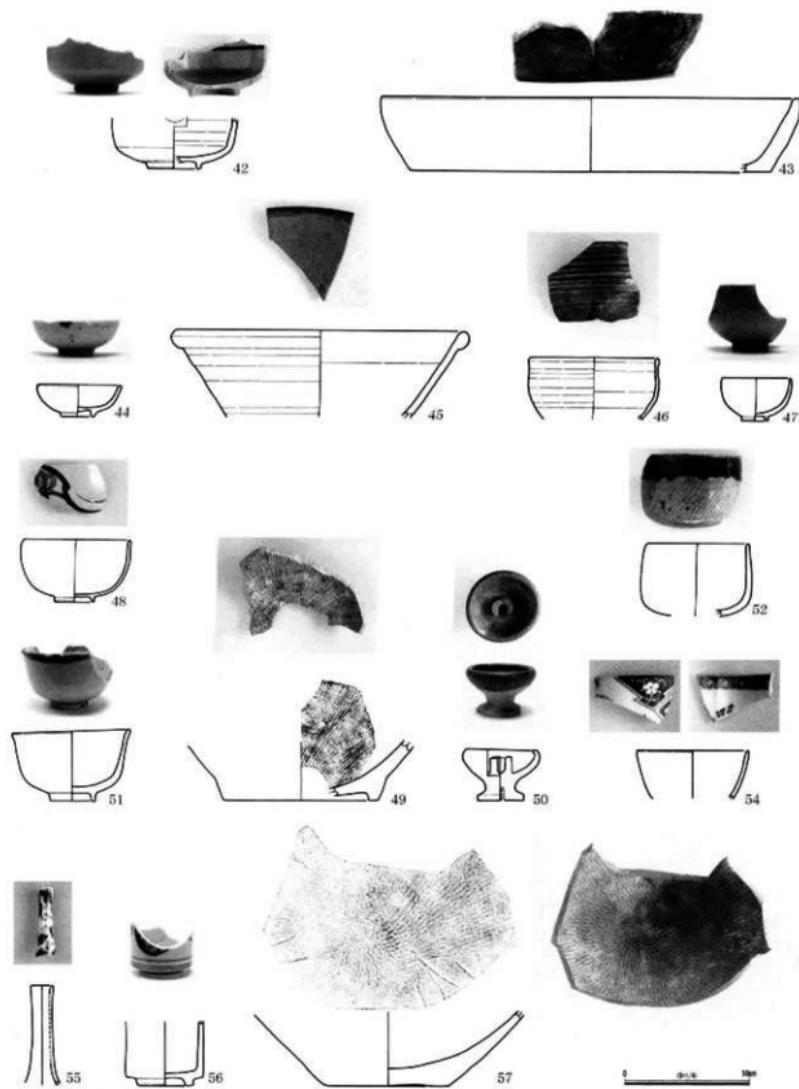


图30 第三遗址出土土器(A2区③-1号遗构)

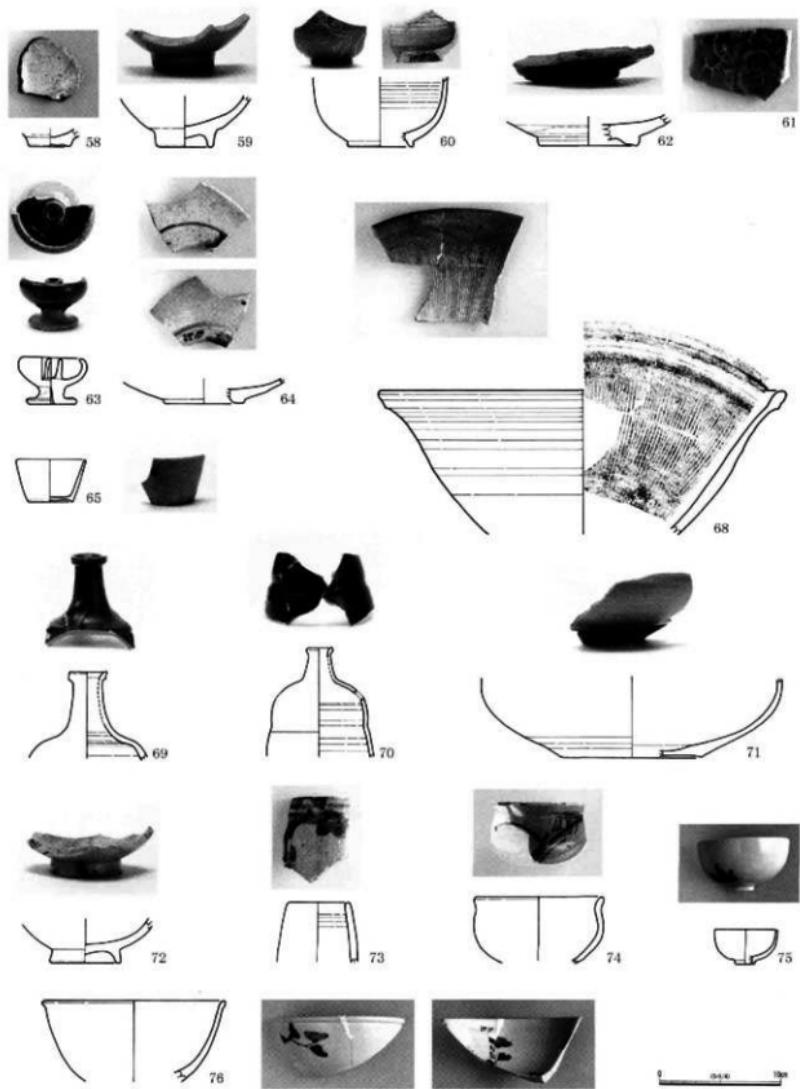


图31 第III遣構検出面出土陶磁器(A3区③-1号遣構・検出面)

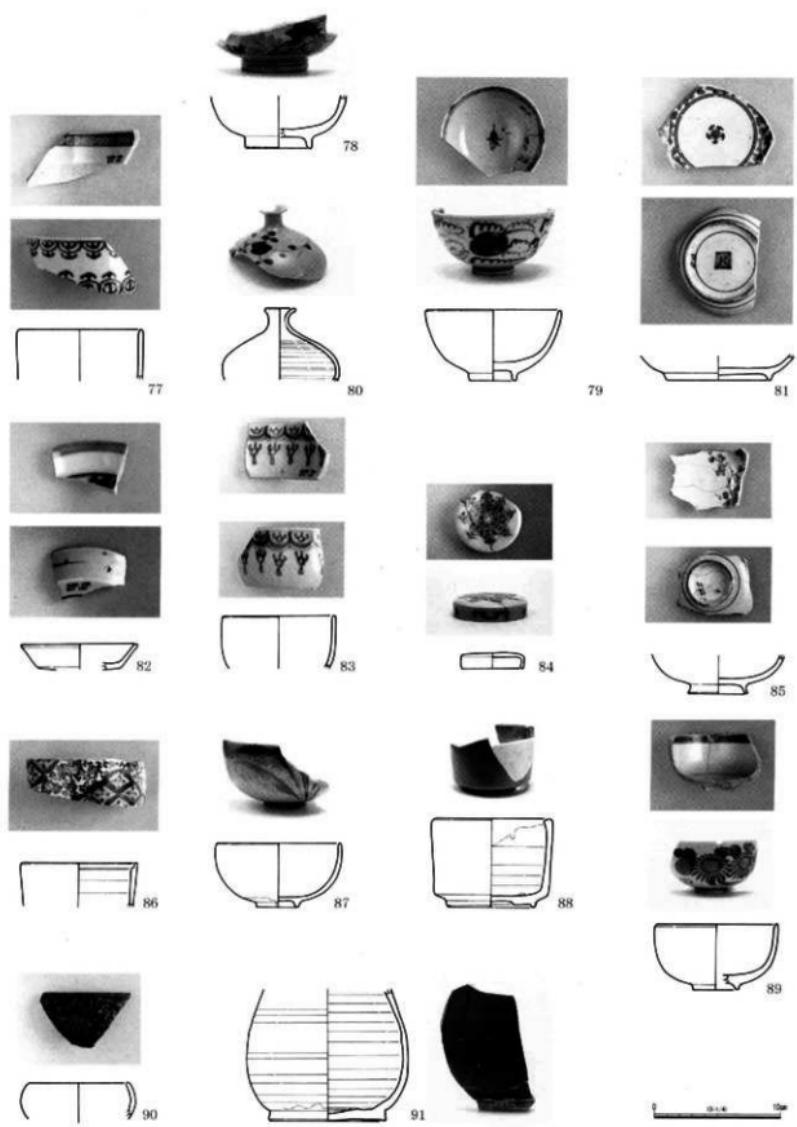


图32 第III遣構検出面出土陶磁器(A1区③-1号遣構・検出面)

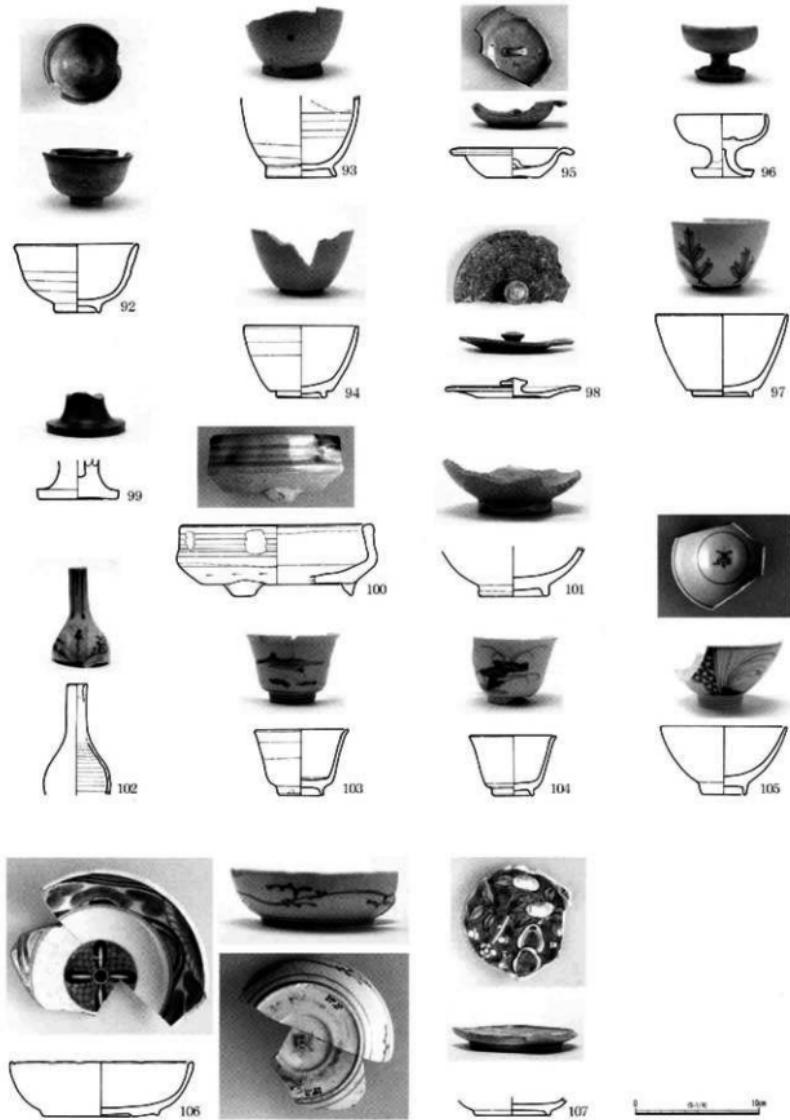


图33 第III遗构检出面上出土陶器(Δ1区③-1号遗构检出面)

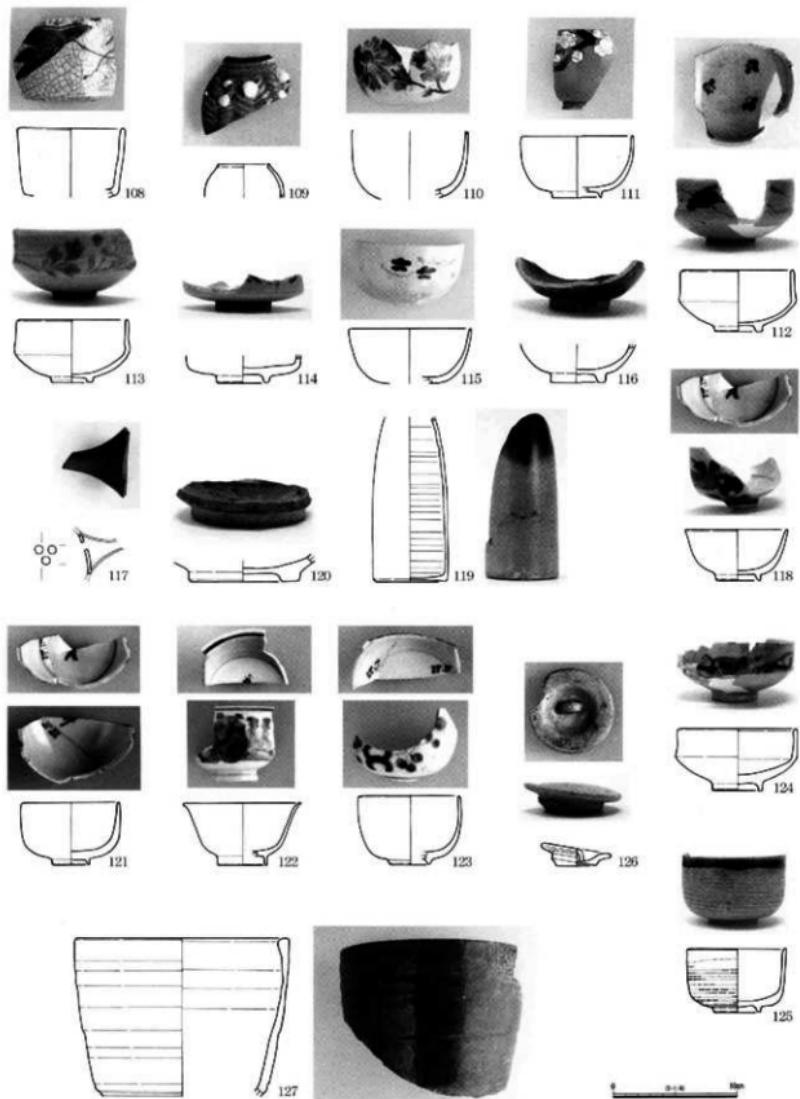


图34 第III造構検出面出土陶磁器(A1区③-1・2号造構・検出面)

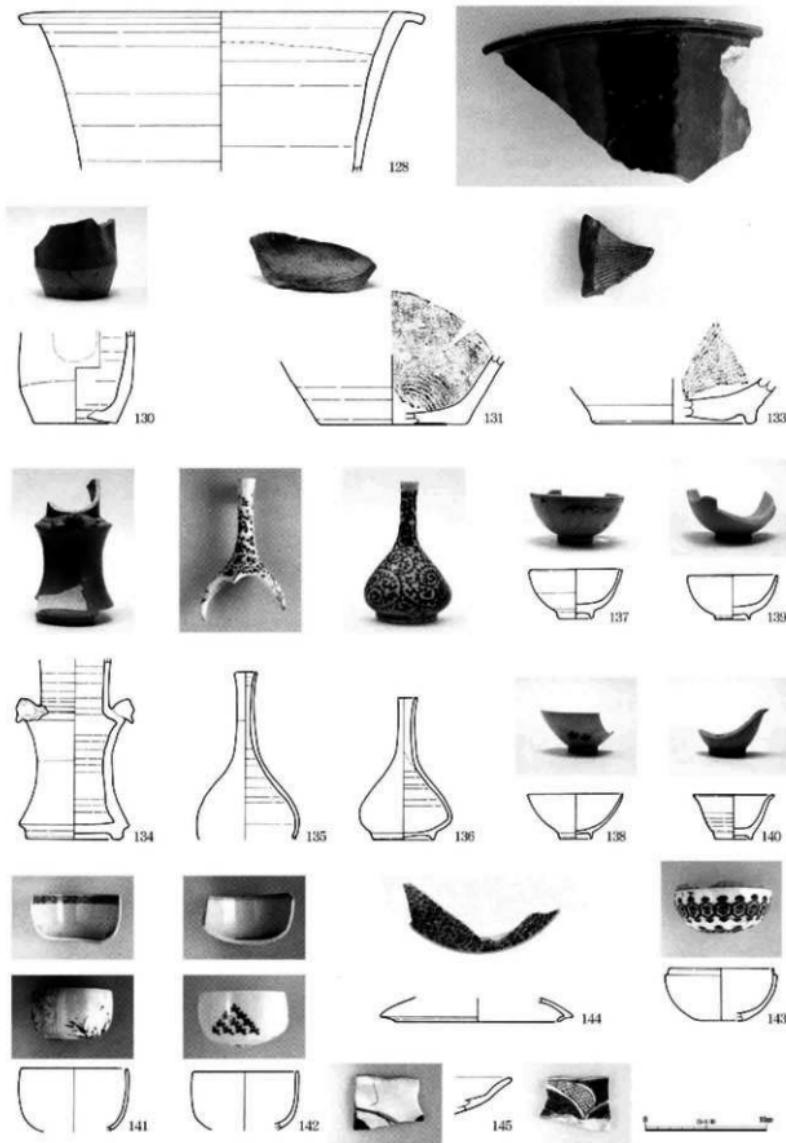


图35 第III遣柵检出面出土陶磁器(A2区③-检出面)

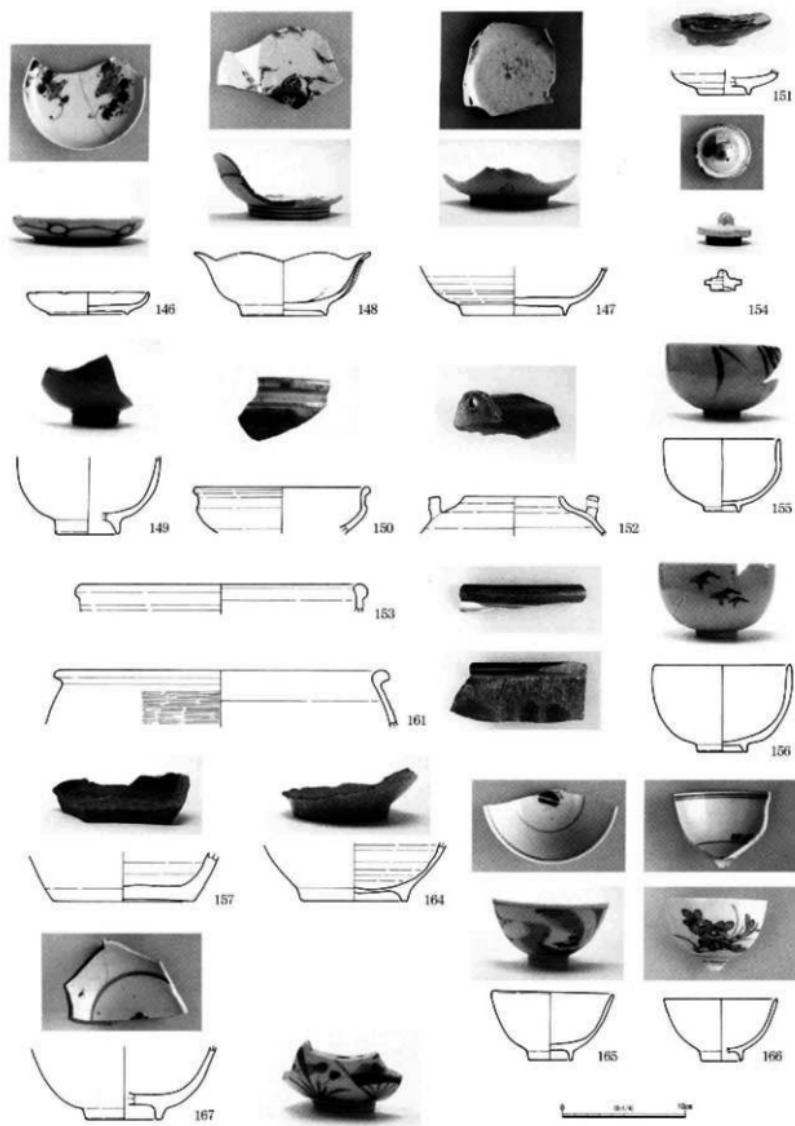


图36 第III遗构检出面出土陶磁器(A2区③-检出面)



图37 第III道槽检出面出土陶器(A2区③-检出面)

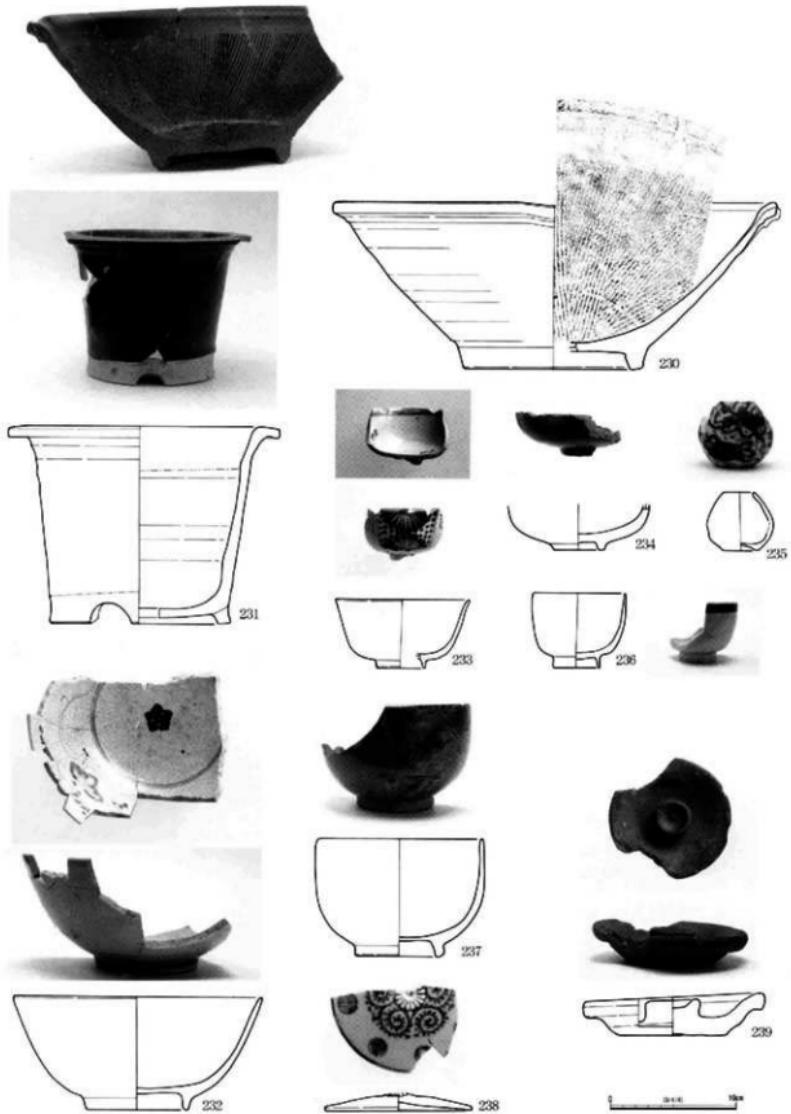


图38 第III道横出面出土陶器(A2区横出面)

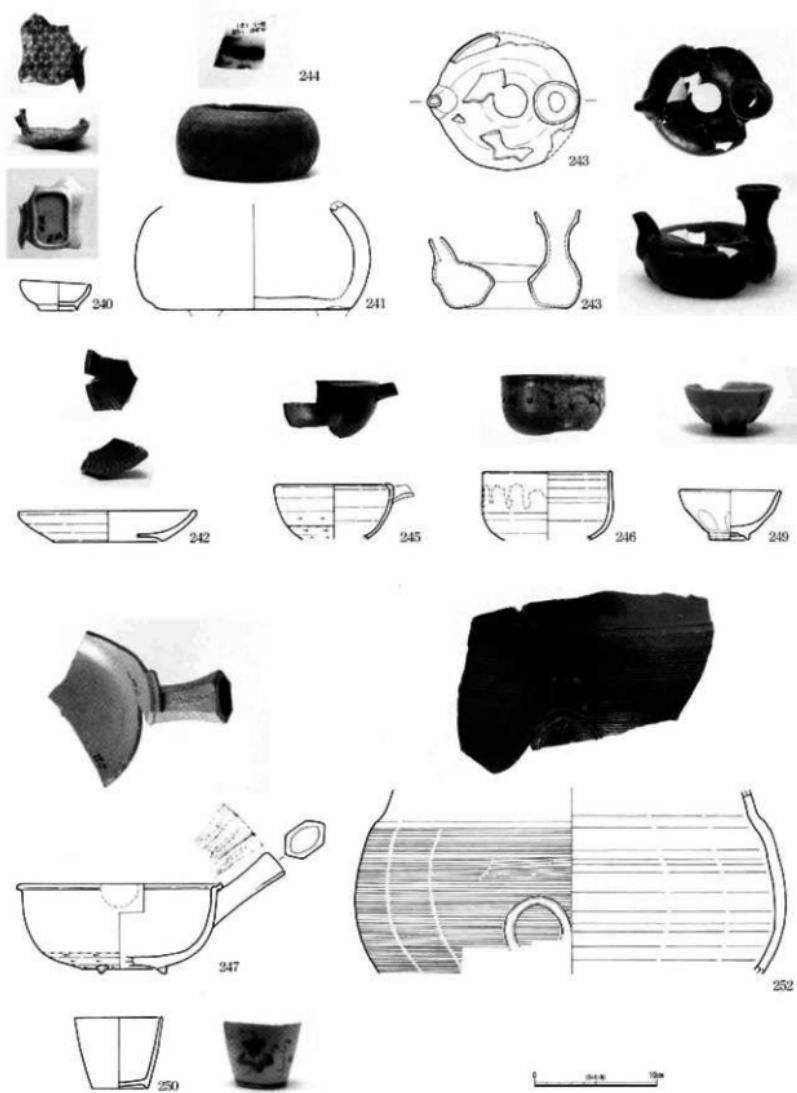


图39 第II·III造構検出而出土陶磁器(A1区)



図40 第II遺構検出面出土陶磁器(A1・2区②)

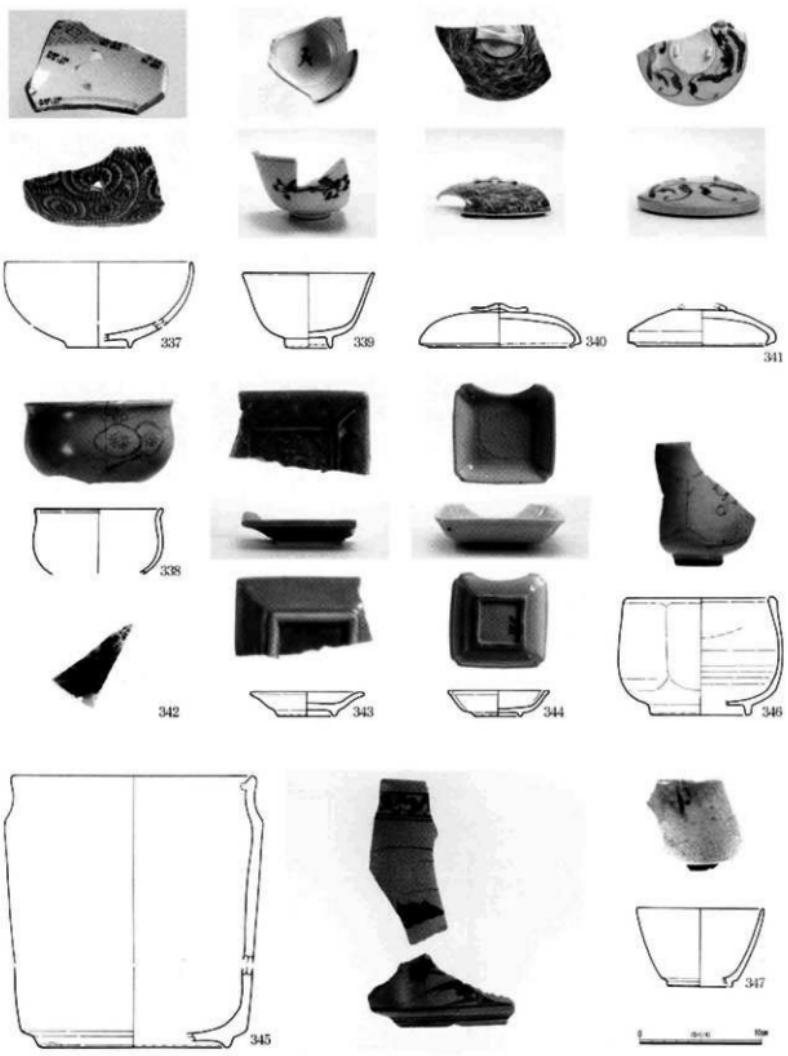


图41 第II道構検出面出土土器(A2・3区②)

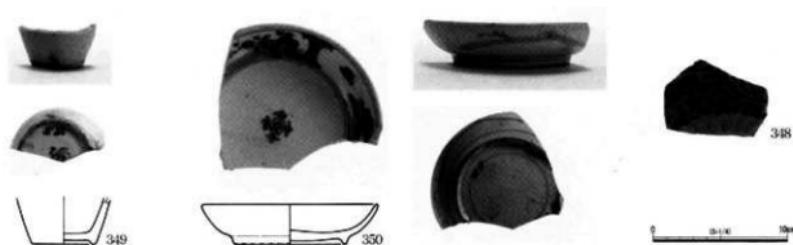


図42 第II遺構検出面出土陶磁器(A3区②)



写真40 A3区①-1 出土陶磁器



写真41 A2区①-2 出土陶磁器



写真42 A2区①-4 出土陶磁器



写真43 A2区①-5 出土陶磁器



写真44 A2区①-7 出土陶磁器(1)



写真45 A2区①-7 出土陶磁器(2)

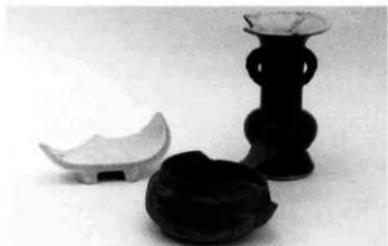


写真46 A2区①検出面出土陶磁器



写真47 A1区①-1出土陶磁器

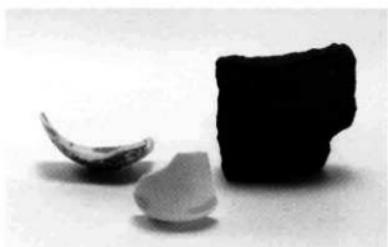


写真48 A3区①-3出土陶磁器



写真49 A3区①-1出土陶磁器(1)



写真50 A3区①-1出土陶磁器(2)

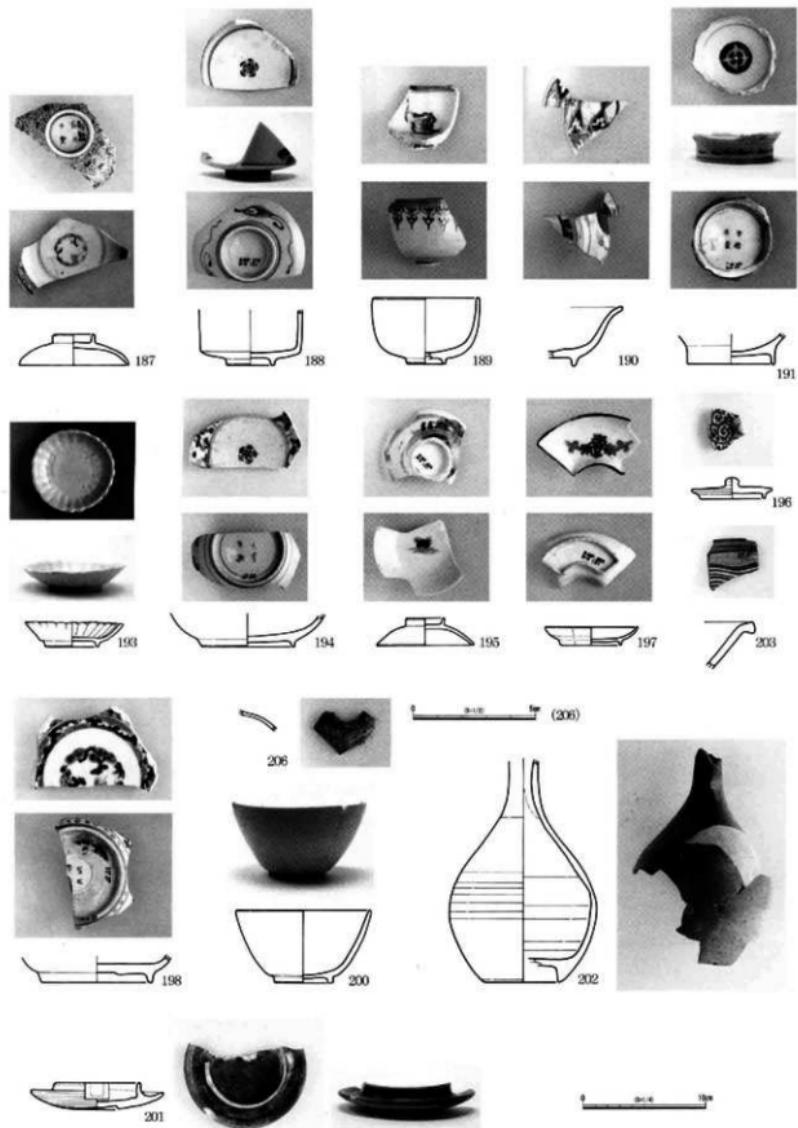


图43 第III造構検出面出土陶磁器(B2区)

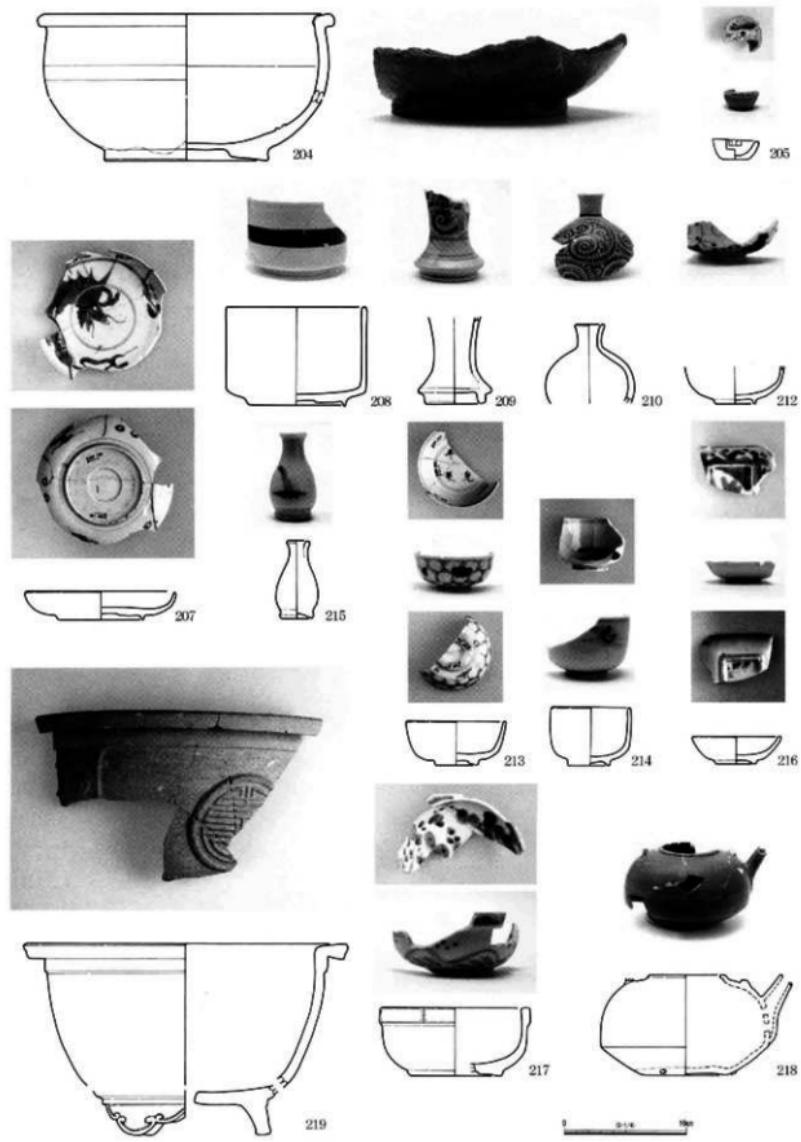


図44 第III造構検出面出土陶磁器(B1区・B2区)



图45 第Ⅲ遗构检出面出土陶磁器(B1区③-2下层检出面)

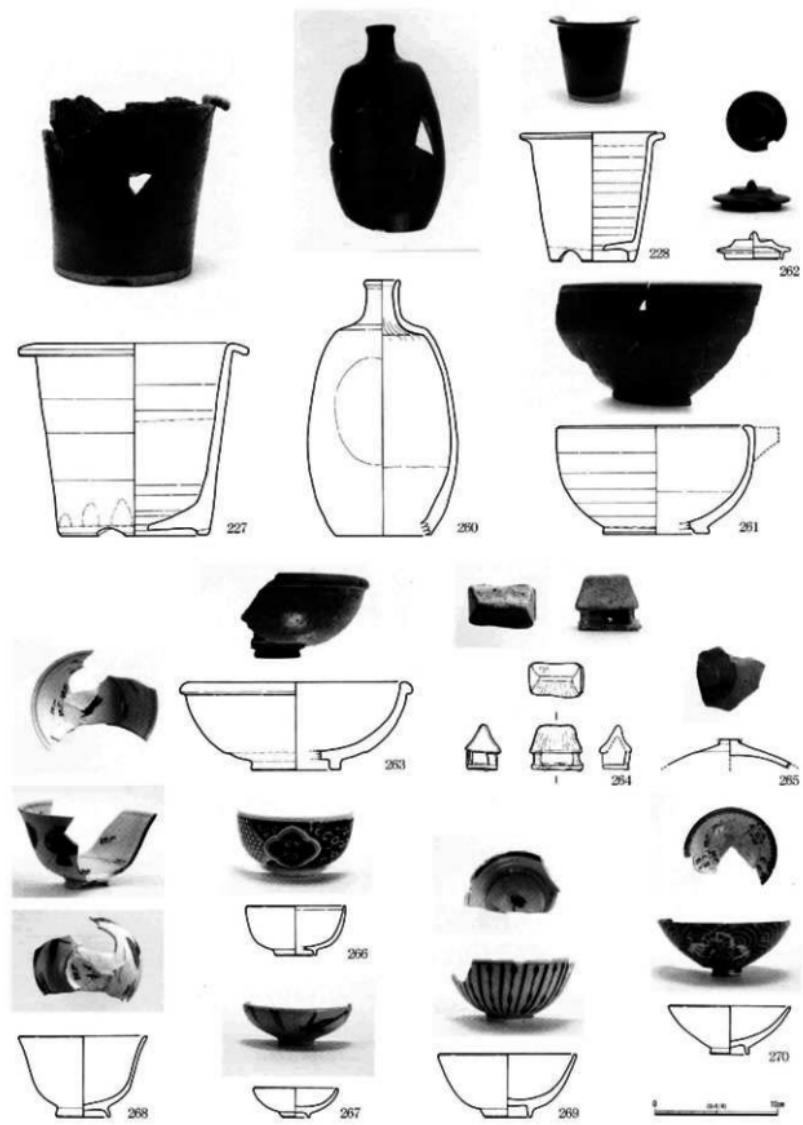


图46 第三结构出土陶器(B1区)

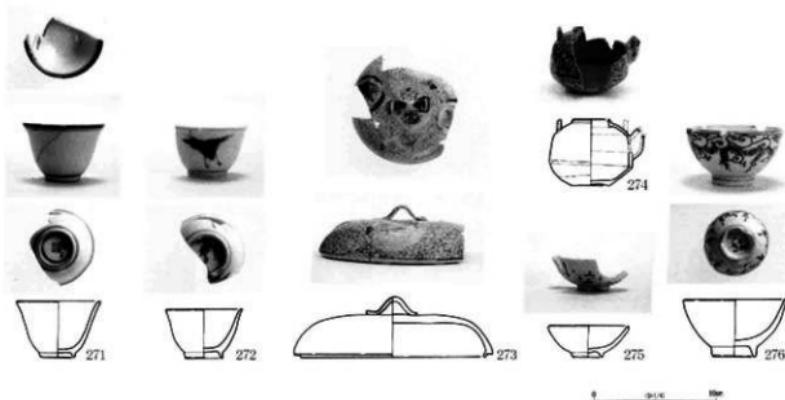


图47 第III遣構検出面出土陶磁器(B1区)



写真51 A区・B1区第II・III遣構検出面出土陶磁器

表5 土器・陶磁器觀察表(1)











表11 土器・陶磁器観察表（実測対象外）(1)

体 積 数 量	出土位置			出 土 年 代	断面	断面分類	形状	出土地・ 時期	測定法	最短部・ 極長部の値	直 径(D) (mm)	用 途			
	社 社 社	室 室 室	遺物名 遺物番号									測定事項・文様 測定期間	測定期間	測定期間	
1	A-1	2	陶器不規則形	1	120	上部	火笛型・球形	一	近似～弧曲凸	ロア法	無軸輪・瓦足付	40.7	洗濯中心	古墳時代	120～130
2	B-1	2	陶器不規則形	1	120	底部	壺輪・輪	古式村(笠置)	赤陶	ロア法	無軸輪・瓦足付	75.3	高台寺古墳中心	肥前系	120～130
3	A-1	3	陶器不規則形	1	120	底部	壺輪・空腹形	古式・室町・繩 文・江戸後半	口	ロア法	無軸輪・瓦足付(一輪の 丸み)	43.8	高台寺古墳中心	肥前系	100～120
4	A-1	2	陶器不規則形	1	120	底部	壺輪	口	口	ロア法	無軸輪・瓦足付	38.3	球体分類	古・室町後	110～120
5	A-1	2	陶器不規則形	1	120	底部	壺輪	口	口	ロア法	無軸輪・瓦足付	43.4	球体分類	古・室町後	120～130
6	A-1	2	陶器不規則形	1	120	底部	壺輪	口	口	ロア法	無軸輪・瓦足付	43.4	球体分類	古・室町後	120～130
7	A-1	2	陶器不規則形	1	120	底部	壺輪・火笛型・上部斜削	火笛形・口	ロア法	無軸輪	50.2	球体分類	古・室町後	120～130	
8	A-1	3	陶器不規則形	1	120	底部	壺輪	口	口	ロア法	無軸輪(表面自然磨 耗・内側無縫合)	21.1	球体分類	古・室町後	120～130
9	B-1	2	陶器不規則形	2	120	底部	壺輪	口	口	ロア法	無軸輪	72.1	高台寺古墳(笠置)	肥前系	120～130
10	B-1	3	陶器不規則形	2	120	底部	壺輪	小底・中底	手縫形	ロア法	脚輪・火笛・済物付	22.3	高台寺古墳(笠置)	肥前系	120～130
11	B-1	2	陶器不規則形	2	120	底部	壺輪	脚	脚輪	ロア法	脚輪・瓦足	22.3	球体分類	古・室町後	120～130
12	B-1	3	陶器不規則形	2	120	底部	壺輪	脚	脚輪	ロア法	脚輪	20.3	球体分類	古・室町後	120～130
13	B-1	3	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形・ 空腹形・口	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
14	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
15	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
16	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
17	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
18	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
19	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
20	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
21	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪・火笛形	口	ロア法	脚輪・済物付	30.3	脚輪・火笛・済物付	肥前系	100～110	
22	A-1	3	陶器	篠山田	120	底部	壺輪	球形	赤陶・口縁	脚輪・済物付	28.0	球体分類	古・室町後	120～130	
23	A-1	3	陶器	篠山田	120	底部	壺輪	球形	赤陶	ロア法	脚輪	24.0	球体分類	古・室町後	120～130
24	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪	小底・中底	火笛形・済物付	ロア法	脚輪・済物付	28.0	球体分類	古・室町後	120～130
25	A-1	2	陶器	篠山田	120	底部	壺輪	球形	火笛形	ロア法	脚輪・済物付	28.0	球体分類	古・室町後	120～130
26	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪・火笛形	一	近～弧曲	ロア法	瓦輪・火輪	27.7	小破片	高台寺古墳	120～130
27	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	脚	一	ロア法	骨輪(輪厚約2mm)	2.0	小破片	高台寺古墳	120～130
28	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	火笛形	一	火笛	ロア法(瓦輪)	35.4	脚輪・瓦輪付	古墳系	20
29	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	脚・高・火笛	火笛形・脚	ロア法	脚輪・瓦輪付	28.3	小破片	肥前系	120～130
30	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	脚	一	ロア法	脚輪	23.2	球体分類	肥前系	120～130
31	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	小底	球形	ロア法	脚輪	4.5	球形・瓦輪付	高台寺古墳	120～130
32	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	中底	火笛形	ロア法	瓦輪	13.5	球体分類	古・室町後	120～130
33	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	小底	中底形	ロア法	瓦輪・火輪(輪厚 約2mm)	32.3	球体分類	古・室町後	120～130
34	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	火笛・小底	一	ロア法	瓦輪・瓦輪付	0.9	小破片	古墳系	20
35	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	火笛・小底	火笛	ロア法	瓦輪・瓦輪付	23.2	瓦輪・火輪付	古・室町後	120～130
36	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	火笛・小底	火笛	ロア法	瓦輪・瓦輪付	23.2	瓦輪・火輪付	古・室町後	120～130
37	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	脚・火笛	脚形	ロア法	瓦輪	30.7	脚輪付	古・室町後	120～130
38	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	脚	一	ロア法	瓦輪	30.7	脚輪付	古・室町後	120～130
39	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	脚	一	ロア法	瓦輪	30.7	脚輪付	古・室町後	120～130
40	A-2	3	土器	2	120	底部	壺輪	脚	一	ロア法	瓦輪	30.7	脚輪付	古・室町後	120～130

表12 土器・陶磁器観察表(実測対象外)(2)

目次 番号	出土地点			形態	断面	断面分類	形状	胎土色、 物語	底部形状	底付部跡、 側面縫合の特徴	直徑 (mm)	特征				
	区	室	遺物名									種別	側面縫合	判定年代		
41	3-2	3	遺物遺物	1-A	130	内切	素・施瓦利	-	浅	四つ口	鉢底・瓦縫	23.3	側面縫合	直・口付底	1700~1800	
42	3-2	3	遺物遺物	1-A	130	上部	不規	平底	赤茶	豐台	瓦縫	23.4	直側面	右丸高干	不明	
43	3-2	3	遺物遺物	1-A	130	破端	縫口	堆疊	白	四つ口	江戸・透明輪	23.9	島・模花	肥前系	1600~1700	
44	3-2	3	遺物遺物	1-A	130	陶器	縫口・火口	-	圓・内腹鼓	四つ口	瓦縫・腰縫	24.0	口縫底・腰縫小孔	肥前系	1700~1800	
45	3-2	3	遺物遺物	1-B	130	陶器	縫	粗・手筋	圓・内腹鼓	四つ口	瓦縫・足袋 (4孔)	23.8	口縫底・足袋・腰縫	直・口付底	1700~1800	
46	3-2	3	遺物・器物	1-B	130	上部	手筋	-	赤茶	四つ口	無縫隙	23.8	手縫	直	不明	
47	3-2	3	遺物遺物	1-B	131	内切	縫・火口	施瓦利 (火口)	赤茶・灰茶	四つ口	鉢底・瓦縫	24.9	口縫底の火口施 (火口)	直前系	1600~1700	
48	3-2	3	遺物遺物	1-B	131	破端	不規	千葉型・施瓦利	白	四つ口	瓦縫・透明輪	23.6	直側面	肥前系	1600~1700	
49	3-2	3	遺物遺物	1-B	131	陶器	縫・火口	-	圓・内腹鼓	四つ口	腰縫・火縫	23.9	口縫底・腰縫・火縫	肥前系	1700~1800	
50	3-2	3	遺物遺物	1-B	131	上部	縫	白	灰茶	四つ口	腰縫・上脚 (施瓦利)	23.3	腰縫底	直・口付底	1600~1700	
51	3-2	3	遺物遺物	1-C	172	内切	中輪・火口	火口 (施)	白	四つ口・腰縫 (小孔)	瓦縫・透明輪	23.8	口縫底 (火口) 施 (腰縫)	直前系	1600~1700	
52	3-2	3	遺物遺物	1-C	172	陶器	縫・火口	手筋 (火口)	赤茶・灰茶	四つ口	腰縫	23.8	直側面	在地底?	17~18世	
53	3-2	3	遺物遺物	1-C	172	陶器	縫	手筋・火口	白	四つ口	腰縫・火縫	23.7	腰縫底・火縫大火	直・口付底	1600~1700	
54	3-2	3	遺物遺物	1-C	172	破端	火	腰縫	白	四つ口	瓦縫 (腰縫)	23.8	腰縫底・火縫・腰縫	直・口付底	1600~1700	
55	3-2	3	遺物遺物	1-C	172	内切	火	-	灰白	四つ口	瓦縫・上脚 (火口) 赤茶・手筋 (火口)	23.8	小吸門	直・口付底	1600~1700	
56	3-2	3	遺物遺物	1-C	172	内切	火	-	赤茶	四つ口	腰縫・手筋 (腰縫)	23.8	腰縫底	直・口付底	1600~1700	
57	3-2	3	遺物遺物	1-D	176	内切	火	手筋・火口	白	四つ口	腰縫・火縫	23.9	直・火縫	肥前系	1600~1700	
58	3-2	3	遺物遺物	1-D	176	内切	火	-	白	四つ口	腰縫・火縫	23.9	腰縫底・火縫	直・口付底	1600~1700	
59	3-2	3	遺物遺物	1-E	176	内切	火	手筋・火口	白	四つ口	腰縫・火縫	23.9	腰縫底・火縫	直・口付底	1600~1700	
60	3-2	3	遺物遺物	1-E	176	内切	火	-	手筋	四つ口・腰縫	四つ口・腰縫 (火口)	23.7	腰縫	直・口付底	1600~1700	
61	3-2	3	遺物遺物	1-E	176	内切	火	-	手筋	四つ口・腰縫	腰縫	23.7	腰縫底	直・口付底	1600~1700	
62	3-2	3	遺物遺物	1-F	176	内切	火	手筋	内方斜	内方斜	内方斜 (火口)	23.2	腰縫底	直・口付底	1600~1700	
63	3-2	3	遺物遺物	1-F	176	破端	火・手筋	手筋・火口・腰縫	白・灰	四つ口	腰縫 (手筋)	23.1	腰縫・透明輪	直・口付底	1600~1700	
64	3-2	3	遺物遺物	1-F	176	内切	火	手筋	白	四つ口	腰縫・火縫	23.3	腰縫底	直・口付底	1600~1700	
65	3-2	3	遺物遺物	1-F	176	内切	火	手筋	白	四つ口	腰縫・火縫	23.3	腰縫底・火縫	直・口付底	1600~1700	
66	3-2	3	遺物遺物	1-F	176	内切	火	手筋	手筋	四つ口・腰縫	腰縫	23.7	腰縫	直・口付底	1600~1700	
67	3-2	3	遺物遺物	1-F	176	内切	火	手筋	手筋	四つ口	腰縫	23.7	腰縫底	直・口付底	1600~1700	
68	3-2	3	遺物遺物	1-F	176	内切	火	手筋	手筋	四つ口	腰縫	23.7	腰縫底・火縫	直・口付底	1600~1700	
69	3-2	3	遺物遺物	1-F	176	内切	火	手筋	手筋	四つ口	腰縫	23.7	腰縫底	直・口付底	1600~1700	
70	3-2	3	遺物遺物	1-G	173	内切	火	手筋・火口	手筋・火口 (腰縫)	手筋・火口	腰縫・火縫	23.1	腰縫底・腰縫・腰縫 (火口)	直・口付底	1600~1700	
71	3-2	3	遺物遺物	1-G	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫 (火口)	23.2	腰縫底	直・口付底	1700~1800	
72	3-2	3	遺物遺物	1-G	173	内切	火	手筋	火・手筋	手筋・火口・腰縫	四つ口	腰縫・透明輪 (火口)	23.2	腰縫底・透明輪	直・口付底	1700~1800
73	3-2	3	遺物遺物	1-G	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.3	腰縫底 (火口)	直・口付底	1700~1800	
74	3-2	3	遺物遺物	1-G	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫・火縫	23.8	腰縫	直・口付底	1700~1800	
75	3-2	3	遺物遺物	1-G	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫底 (火口)	直・口付底	1700~1800	
76	3-2	3	遺物遺物	1-G	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫	直・口付底	1700~1800	
77	3-2	3	遺物遺物	1-G	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫	直	不明	
78	3-2	3	遺物遺物	1-H	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫底 (火口)	直・口付底	1700~1800	
79	3-2	3	遺物遺物	1-H	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫	直・口付底	1700~1800	
80	3-2	3	遺物遺物	1-H	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫	直・口付底	1700~1800	
81	3-2	3	遺物遺物	1-H	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫	直・口付底	1700~1800	
82	3-2	3	遺物遺物	1-H	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫	直・口付底	1700~1800	
83	3-2	3	遺物遺物	1-H	173	内切	火	手筋	火	四つ口	腰縫	23.8	腰縫	直・口付底	1700~1800	



表14 土器・陶磁器観察表（実測対象外）(4)

地名	出土地點			測量点	測量	測量分類	形状	胎土・ 表面	成形法	胎形記号・ 款識等の特徴	重量 (g)	備考			
	区	番	遺物名									新規系	既存	既存系	
121	B-1.	3	石器類(1)刀(縫石)	2	187	石器	輪	丸形	白	コクル	直筒・透視輪	46.8	縫石點点	既存系	1250~1500
122	B-1.	3	石器類(1)刀(縫石)	2	187	石器	輪・舟・圓	丸形・圓錐形	ガラス質	コクル	直筒・透視輪	38.3	縫石點点	既存系	1250~1500
123	B-1.	3	石器類(1)刀(縫石)	2	187	石器	輪	—	汎用	コクル	直筒・透視輪	55.9	縫石點点	既存系	1250~1500
124	B-1.	3	石器類(1)刀(縫石)	2	187	石器	輪	—	汎用形・粗面	コクル輪付	直筒・透視輪	47.3	縫石點点	既存系	1250~1500
125	B-1.	3	石器類(1)刀(縫石)	2	187	石器	輪	圓錐形	青白	コクル	直筒・透視輪	204.5	縫石點点	既存系	1250~1500
126	B-1.	3	石器類	1	2006	石器	輪・舟・圓	丸形・圓錐形・圓錐形	白・青	コクル・型削付	直筒・透視輪・輪錐輪	436.0	「くわい」の輪形	新規系	1250~1500
127	B-1.	3	石器類	1	2006	石器	輪・舟	圓錐形	青白	コクル	直筒・透視輪	388.1	縫石點点	既存系	1250~1500
128	B-1.	3	石器類	1	2006	石器	輪・舟	丸形・圓錐形	白・青	コクル	直筒・透視輪・輪錐輪	389.3	縫石點点	既存系	1250~1500
129	B-1.	3	石器類	1	2006	石器	輪・舟	丸形・圓錐形	青白	コクル	直筒・透視輪・輪錐輪	384.4	縫石點点	既存系	1250~1500
130	B-1.	3	石器類	1	2006	石器	輪・舟	丸形・圓錐形	白	コクル	直筒・透視輪・輪錐輪	384.4	縫石點点	既存系	1250~1500
131	B-1.	3	石器類	1	2006	石器	輪・舟	丸形・圓錐形	白	コクル	直筒・透視輪	33.4	縫石點点	既存系	1250~1500
132	B-1.	3	石器類	1	221	石器	輪小底	輪	白	コクル・ハリ輪	直筒	56.8	既存系(文)・分(既存系)	既存系	1250~1500
133	B-1.	3	石器類	1	194	石器	輪・舟	圓錐形・丸形	青白	コクル	直筒・透視輪・輪錐輪	112.0	縫石點点	既存系	1250~1500
134	B-1.	3	石器類	1	132	石器	舟	新規形	透視輪	コクル輪付	透視輪	41.5	縫石點点	既存系	1250~1500
135	B-1.	3	石器類	1	187	石器	輪小底	新規形	青白	コクル	日足の輪點	7.3	縫石點点	既存系	1250~1500
136	B-1.	3	石器類	1	1938	石器	輪・底脚・輪	丸形	—	—	—	縫石點点	既存系	7.0	
137	B-1.	3	石器類(縫石)	1	186	石器	輪・舟	新規形	青白	コクル	直筒・透視輪	54.8	縫石點点	既存系	1250~1500
138	B-1.	3	石器類(縫石)	1	186	石器	輪・舟	圓錐形	白ガラス質	コクル	直筒・透視輪	38.8	縫石點点	既存系	1250~1500
139	B-1.	3	石器類(縫石)	1	186	石器	輪	丸形	白	コクル	直筒・透視輪	33.8	縫石點点	既存系	1250~1500
140	B-1.	3	石器類(縫石)	1	186	石器	輪	丸形	白	コクル	直筒・透視輪	33.7	縫石點点	既存系	1250~1500
141	B-1.	3	石器類(縫石)	1	222	石器	輪・舟	—	白	コクル	直筒・透視輪	53.7	縫石點点	既存系	1250~1500
142	B-1.	3	石器類(縫石)	1	222	石器	舟	新規形	白	コクル	直筒・透視輪	56.2	縫石點点	既存系	1250~1500
143	B-1.	3	石器類(縫石)	1	222	石器	輪	丸形	白	コクル	直筒	228.3	既存輪點(既存)	既存系	1250~1500
144	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	輪・舟	新規形	青白	白	コクル・ハリ輪	直筒・透視輪・輪錐輪	109.5	既存系(文)・分(既存系)	既存系	1250~1500 (1250~1500)
145	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	輪・舟	新規形	青白	白	コクル	透視輪(底脚付)・直筒	203.8	既存輪點(既存形)(「木下形」)	既存系	1250~1500
146	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	輪・舟	新規形	青白	白	コクル	透視輪(底脚付)	143.3	既存輪點(既存形)(「木下形」)	既存系	1250~1500
147	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	輪	丸形・新規形	青白	白	コクル・ハリ輪	直筒・透視輪・輪錐輪	105.4	既存系(文)・分(既存系)	既存系	1250~1500
148	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	輪	丸形	青白	白	コクル	透視輪(底脚付)	122.1	既存系(文)・分(既存系)	既存系	1250~1500
149	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	輪	丸形	青白	白	コクル	透視輪(底脚付)	105.4	既存系(文)・分(既存系)	既存系	1250~1500
150	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	舟	丸形	青白	白	コクル	透視輪	224.7	既存輪點(既存形)(「木下形」)	既存系	1250~1500
151	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	舟	丸形	青白	白	コクル・ハリ輪	透視輪・底脚付	258.0	縫石點点	既存系	1250~1500
152	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	舟	丸形	青白	白	コクル・ハリ輪	透視輪・底脚付	196.8	縫石點点	既存系	1250~1500
153	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	舟	丸形	青白	白	コクル	透視輪(底脚付)	180.9	既存輪點(既存系)	既存系	1250~1500
154	B-1.	3	縫石類	1918	縫石	舟	丸形	青白	白	コクル	透視輪・底脚付	—	既存系	既存系	1250~1500
155	B-2.	1	縫石類	1	229	縫石	舟	丸形	—	—	—	25.4	透視輪(既存形)	既存系	1250~1500
156	B-2.	1	縫石類	1	229	縫石	舟	丸形	—	—	—	279.2	縫石點点	既存系	1250~1500
157	B-2.	1	縫石類	1	229	縫石	舟	丸形	—	—	—	56.4	縫石點点	既存系	1250~1500

表15 土器・陶磁器観察表（実測対象外）(5)

表16 土器・陶磁器観察表（実測対象外）(6)

発見場所	測定対象			測定方法	測定部位	形状	地質・構成	成形法	被付銀物・ 被覆物の内容	重量(g)	所見		
	区	属	遺物名								所見	文様	測定期間
100 A-1 2 上鉢 33 142 陶器 滑輪 王司山層 城邑 ○アビ 黒釉・透明白 23.6 磁片A点 彩色系 1600~1800													
100 A-1 2 上鉢 33 143 陶器 茶 地窓無白 石田 ○アビ 黑釉・透明白 20.3 磁片A点 彩色系 1600~1800													
100 A-1 2 上鉢 33 144 陶器 上蓋・底盤 剥離 地窓 ○アビ 黑釉 18.7 磁片A点 鹿戸高瀬系 1760~1900													
101 A-1 2 上鉢 33 145 陶器 徒木鉢 一 植葉・白子口 ○アビ 白面・脚付鉢 31.2 磁片A点 彩色系 1610~1800													
102 A-1 2 上鉢 33 146 陶器 線・三・白直 磁輪・丸足 石田 ○アビ 白面・脚付鉢 31.6 磁片A点 彩色系 1600~1800													
103 A-1 2 上鉢 33 147 陶器 線・三・白直 磁輪・丸足 玉井ノイケモコ 28.1 磁片A点 鹿戸高瀬系 1760~1900													
104 A-1 2 上鉢 33 148 陶器 茶 地窓無白 ○アビ 地窓・透明白 12.7 磁片A点 鹿戸高瀬系 1760~1900													
105 A-1 2 上鉢 33 149 陶器 線・三・白直 磁輪・丸足 石田 ○アビ 白面・脚付鉢 34.8 磁片A点 彩色系 1620~1800													
106 A-1 2 上鉢 33 150 陶器 地窓 一 植葉 ○アビ 黑釉 38.1 磁片A点 彩色系 1600~1800													
107 A-1 2 上鉢 33 151 陶器 線・三・白直 地窓無白 ○アビ 丸足・透明白 34.3 磁片A点 彩色系 1620~1800													
108 A-1 2 上鉢 33 152 陶器 茶 一 植葉 ○アビ 丸足 17.0 磁片A点 彩色系 1600~1800													
109 A-1 2 上鉢 33 153 陶器 線・三・白直 ○アビ 丸足・透明白 37.4 磁片A点 彩色系 1600~1800													
110 A-1 2 上鉢 33 154 陶器 茶 一 植葉 ○アビ 白面・脚付鉢 39.4 磁片A点 彩色系 1600~1800													
111 A-1 2 上鉢 33 155 陶器 線・三・白直 ○アビ 丸足 33.2 磁片A点 彩色系 1740~1780													
112 A-1 2 上鉢 33 156 陶器 茶 地窓 ○アビ 丸足 15.8 磁片A点 彩色系 1620~1660													
113 A-1 2 上鉢 33 157 陶器 地窓 一 植葉 ○アビ 丸足・脚付鉢 39.9 滑輪外観 素面・三云青 1620~1660													
114 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 142 陶器 磁輪・球・脚付鉢 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白・脚付鉢 252.4 彩色系 1740~1800													
115 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 143 陶器 磁輪・球 地窓無白 ○アビ 丸足 236.4 磁輪外観 彩色系 1750~1800													
116 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 145 陶器 磁輪・球・地窓 地窓無白 ○アビ 丸足・透明白 155.7 磁片A点 彩色系 1600~1800													
117 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 146 陶器 磁輪・球・脚付鉢 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 302.9 磁片A点 彩色系 1600~1800													
118 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 147 陶器 磁輪・球・脚付鉢 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 317.0 磁片A点 彩色系 1600~1800													
119 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 148 陶器 磁輪・球・地窓 地窓無白 ○アビ 丸足・透明白 30.3 磁片A点 彩色系 1620~1800													
120 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 149 陶器 磁輪・球・脚付鉢 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢 265.2 磁片A点 彩色系 1610~1800													
121 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 150 陶器 磁輪・球・脚付鉢 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 9.1 磁片A点 彩色系 1600~1800													
122 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 151 陶器 地窓 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 222.7 光滑器底外観 彩色系 1600~1800													
123 A-2 2 磁輪高瀬(板内) 1 152 陶器 大地窓・かわら・球・脚付鉢 一 植葉・透明白 ○アビ 大地窓・透明白・茶碗・白子口 145.1 彩色系 1750~1800													
124 A-2 2 石転高瀬 2 131 陶器 磁輪・球・脚付鉢 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 49.3 磁片A点 彩色系 1600~1800													
125 A-2 2 石転高瀬 2 132 陶器 磁輪・球 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢 265.2 磁片A点 彩色系 1610~1800													
126 A-2 2 石転高瀬 2 133 陶器 地窓 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 138.5 光滑器底外観・茶碗上部・茶碗部分 15.0 磁片A点 彩色系 1600~1800													
127 A-2 2 石転高瀬 2 134 陶器 磁・重 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 45.8 磁片A点 彩色系 1750~1800													
128 A-2 2 石転高瀬 2 135 陶器 磁・重 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 232.1 磁片A点 彩色系 1600~1800													
129 A-2 2 石転高瀬 2 136 陶器 磁 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 36.5 磁片A点 彩色系 1600~1800													
130 A-2 2 石転高瀬 2 137 陶器 磁 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口・透明白 178.8 磁片A点 彩色系 1610~1800													
131 A-2 2 磁輪高瀬(1) 2 138 陶器 磁・球・中空・蓋 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢 55.3 磁片A点 彩色系 1600~1800													
132 A-2 2 磁輪高瀬(1) 2 139 陶器 磁・球 地窓無白 ○アビ 丸足 156.3 2つの石器兼用焼成炉中心部・透明白 1840~1950													
133 A-2 2 磁輪高瀬(1) 2 140 陶器 磁・球・蓋 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢 136.5 2つの石器兼用焼成炉中心部・透明白 1840~1950													
134 A-2 2 磁輪高瀬(1) 2 141 陶器 磁・球・蓋・脚付鉢 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢 76.6 磁片A点 彩色系 1810~1950													
135 A-2 2 磁輪高瀬(1) 2 142 陶器 磁・球・蓋 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口 43.2 磁片A点 彩色系 1600~1800													
136 A-2 2 磁輪高瀬(1) 2 143 陶器 磁・球・蓋 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢・茶碗・白子口 134.6 光滑器底・茶碗上部・茶碗部分・白子口 1760~1800													
137 A-2 2 磁輪高瀬(1) 2 144 陶器 磁輪 地窓無白 ○アビ 丸足・脚付鉢 296.2 磁片A点 彩色系 1750~1800													

表17 土器・陶磁器観察表(実測対象外)(7)

地名	所在地			性別	種類	遺物分類	形状	出土場所・ 位置	成形法	断面形状・ 地質等の特徴	重量(g)	西系				
	区	街	道路名									形記事項・文様	発見場所	備考		
239	3-2	2	新興地(原心)	2	140	縁器	高・直・丸・深	丸形・浅鉢形	手作	白河川左岸	0.2kg	丸底・ハンドル・直 線	35.6	輪郭が中心	轟川流域	1800~1900
240	3-2	2	新興地(原心)	2	141	縁器	高・直・深	手作	圓筒形	圓・内装	—	底足・直線・直縁	38.8	輪郭が中心	轟川流域	1700~1800
241	3-2	2	城山町	轟山町	142	縁器	高・直・深	手作・白粘子	手作・輪付	三脚形	20.3	直筒形	形記事項	轟川流域	1800~1900	
242	3-2	2	城山町	轟山町	143	縁器	高・直・深	手作・白粘子	手作・輪付	丸形	21.3	直筒形	轟川流域	1800~1900		
243	3-2	2	轟山町	轟山町	144	縁器	高・直・深・腹	丸形・深鉢形	手作・輪付	直筒形	511.1	ハンドル・輪付	轟川流域	1800~1900		
244	3-2	2	轟山町	轟山町	145	縁器	高・直・深・腹	手作・輪付	直筒形	底足・直縁	208.3	底足・直縁	轟川流域	1700~1800		
245	3-2	2	轟山町	轟山町	146	縁器	高・直・深・腹	手作・輪付	手作・輪付	圓筒形・直縁	248.1	輪郭が中心	轟川流域	1800~1900		
246	3-2	2	轟山町	轟山町	147	縁器	高・直・深	手作・白粘子	手作	直筒形	21.3	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
247	3-2	2	轟山町	轟山町	148	縁器	高・直・深	手作・白粘子	手作	直筒形	202.4	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
248	3-2	2	轟山町	轟山町	149	縁器	高・直・深	手作・白粘子	手作	直筒形直腹	78.8	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
249	3-2	2	轟山町	轟山町	150	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	18.9	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
250	3-2	2	轟山町	轟山町	151	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	6.2	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
251	3-2	2	轟山町	轟山町	152	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	3.5	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
252	3-2	2	轟山町	轟山町	153	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	32.4	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
253	3-2	2	轟山町	轟山町	154	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	28.3	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
254	3-2	2	轟山町	轟山町	155	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	28.1	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
255	3-2	2	轟山町	轟山町	156	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	15.9	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
256	3-2	2	轟山町	轟山町	157	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	33.2	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
257	3-2	2	轟山町	轟山町	158	縁器	高・直・深	手作・白粘子	手作	直筒形・底足	396.6	笠形・腰形	轟川流域	1800~1900		
258	3-2	2	轟山町	轟山町	159	縁器	高・直・深	手作・白粘子	手作	直筒形	2.4	手作	轟川流域	1800~1900		
259	3-2	2	轟山町	轟山町	160	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	17.3	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
260	3-2	2	轟山町	轟山町	161	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	25.9	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
261	3-2	2	轟山町	轟山町	162	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	25.9	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
262	3-2	2	轟山町	轟山町	163	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	3.1	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
263	3-2	2	轟山町	轟山町	164	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	22.9	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
264	3-2	2	轟山町	轟山町	165	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	27.3	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
265	3-2	2	轟山町	轟山町	166	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	2.7	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
266	3-2	2	轟山町	轟山町	167	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	33.3	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
267	3-2	2	轟山町	轟山町	168	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	40.2	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
268	3-2	2	轟山町	轟山町	169	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	13.9	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
269	3-2	2	轟山町	轟山町	170	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	33.3	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
270	3-2	2	轟山町	轟山町	171	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	28.6	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
271	3-2	2	轟山町	轟山町	172	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	20.6	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
272	3-2	2	轟山町	轟山町	173	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	26.2	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
273	3-2	2	轟山町	轟山町	174	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	136.8	轟山町中心	轟川流域	1800~1900		
274	3-2	2	轟山町	轟山町	175	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	44.0	輪郭が中心	轟川流域	1800~1900		
275	3-2	2	轟山町	轟山町	176	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	22.3	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
276	3-2	2	轟山町	轟山町	177	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	41.6	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
277	3-2	2	轟山町	轟山町	178	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	4.7	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
278	3-2	2	轟山町	轟山町	179	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	35.4	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
279	3-2	2	轟山町	轟山町	180	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	55.3	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
280	3-2	2	轟山町	轟山町	181	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	68.0	輪郭が中心	轟川流域	1800~1900		
281	3-2	2	轟山町	轟山町	182	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	28.7	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		
282	3-2	2	轟山町	轟山町	183	縁器	高・直	手作	直筒形	底足・直縁	46.2	底足・直縁	轟川流域	1800~1900		

表18 土器・陶器観察表(実測対象外)(8)

番号	出土場所			目次	測定	断面分類	形状	土色・ 特徴	成形法	動作部・ 機能部の特徴	重量(g)	評 価		
	区	面	遺物名	遺物番号								特徴事例・文様	測定実績	推定年代
278	A-1	1	瓦形石器遺構	1	31	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合・縦縫合	灰・土色・土質	片口・輪打目	内斜・外斜・輪打目・鋸歯縁・足付	2100.7	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	1600~
279	A-1	1	瓦形石器遺構	1	32	土器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合・縦縫合	灰・土色・土質	輪打目	輪打目	65.6	破片状	青花文	16世紀
280	A-1	1	瓦形石器遺構	1	33	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形	灰・土色・土質	片口	輪打目	38.5	破片状	青花文	16世紀
281	A-2	1	瓦器遺構(火)	2	106	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口・輪打目	内斜・外斜・鋸歯縁・足付	2471.5	江戸時代後半から明治時代初期まで。	黒地・青花・墨	1600~1800
282	A-2	1	瓦器遺構(火)	2	107	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口・輪打目	白地・土灰彩	7934.4	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	16世紀~1800
283	A-2	1	瓦器遺構(火)	2	108	土器	丸・直縁・高脚・足付・鉢形	灰・土色・土質	片口	輪打目	473.7	破片状	青花文	16世紀?
284	A-2	1	瓦器遺構(火)	2	109	陶器	丸・直縁・高脚・足付・鉢形	灰・土色・土質	片口	輪打目	348.8	破片状	青花文	16世紀~1800
285	A-2	1	瓦器遺構	3	34	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口・輪打目	内斜・外斜・鋸歯縁・足付	181.2	江戸時代後半から明治時代初期まで。	黒地・青花・墨	1600~1800
286	A-2	1	瓦器遺構	3	35	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	343.2	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	16世紀~1800
287	A-2	1	瓦器遺構	3	36	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	19.4	当時解説	青花文	16世紀?
288	A-1	1	瓦器遺構(火)	5	129	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	468.0	江戸時代後半から明治時代初期まで。	黒地・青花・墨	16世紀~1800
289	A-2	1	瓦器遺構(火)	5	130	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	1896.8	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	16世紀~1800
290	A-2	1	瓦器遺構(火)	5	131	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	1276.1	洋字横行十點波	形容系	16世紀~1800
291	A-2	1	瓦器遺構(火)	5	132	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	21.5	漢字横行九點波	形容系	16世紀~1800
292	A-2	1	瓦器遺構(火)	5	133	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	224.7	漢字横行九點波	形容系	16世紀~1800
293	A-2	1	瓦器遺構(火)	5	134	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	38.8	破片状	青花文	16世紀?
294	A-2	1	瓦器遺構	6	44	陶器	小縁・直縁	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	54.9	昭和初期の織機の成形部と相似。	白地・青花・墨	16世紀~1800
295	A-2	1	瓦器遺構	6	45	陶器	縁付・直縁	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	52.8	破片状	青花文	16世紀~1800
296	A-2	1	瓦器遺構	7	36	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	1884.9	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	16世紀~1800
297	A-2	1	瓦器遺構	7	37	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	955.1	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	16世紀~1800
298	A-2	1	瓦器遺構	7	38	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	1077.5	明治初期の製陶所の成形部と相似。	白地・青花・墨	16世紀~1800
299	A-2	1	瓦器遺構	7	39	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	195.3	笠置焼の成形部と相似。	白地・青花・墨	16世紀~1800
300	A-2	1	瓦器遺構	7	40	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	1813.3	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	16世紀~1800
301	A-2	1	瓦器遺構	7	41	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	9279.1	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	16世紀~1800
302	A-2	1	瓦器遺構	7	42	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	1272.5	明治初期の製陶所の成形部と相似。	白地・青花・墨	16世紀~1800
303	A-2	1	瓦器遺構	7	43	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	320.8	当時解説	青花文	16世紀?
304	A-2	1	瓦器遺構(火)	7	44	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	2932.0	江戸時代後半から明治時代初期まで。	白地・青花・墨	16世紀~1800
305	A-2	1	瓦器遺構(火)	7	45	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	1862.3	江戸中期の製陶所の成形部と相似。	白地・青花・墨	16世紀~1800
306	A-2	1	瓦器遺構(火)	7	46	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	75.1	瓦器文	青花文	16世紀~1800
307	A-2	1	瓦器遺構(火)	7	47	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	303.8	二重の輪打目で成形。	白地・青花・墨	16世紀~1800
308	A-2	1	瓦器遺構	7	48	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	366.8	成形部と成形所の成形部と相似。	白地・青花・墨	16世紀~1800
309	A-2	1	瓦器遺構(火)	7	49	陶器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形・鋸歯縁・縦縫合	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	544.2	成形部と成形所の成形部と相似。	白地・青花・墨	16世紀~1800
310	A-2	1	瓦器遺構	7	50	土器	盤・直縁・高脚・足付・鉢形	白・灰・土色・土質	片口	輪打目	323.5	豊山と北山の成形部と相似。	白地・青花・墨	16世紀?

## (2) 金属製品 (図48~50、表19、写真52・53)

金属製品は銭貨も含め、総数200点余りが出土した。この内銭貨については全点を写真で掲載、銭貨以外は44点を掲載した。選択にあたってはできる限り多くの種類の遺物を提示するよう努めた。出土した金属製品は材質別では鉄・銅(銅合金含む)・金に分けられる。また、用途別に分けると以下の通りに分類することが可能である。

- 日用品………厨房具(下ろし金・包丁・匙・杓子・柄杓・火箸)、喫煙(煙管)、火具(五徳)、照明具(ランプ)、発火具(火打金)、文具(鉛)、装身具(簪)、その他(ピンセット・鉛・ベルト金具・銅製容器蓋・口金具・銅鏡)
- 建築………工具(鍛・鍛・鑿・鉈・ナイフ・鉄釘)
- 建具(飾金具・把手・引手・掛け金具)
- 遊・玩具………玩具(牛形銅製品)
- 武器・武具………武器(槍先)
- 刀装具(刀子・小柄)

以下に分類別に出土金属製品について概説する。

### 厨房具・火具

比較的多くの種類の遺物が出土したが、その多くは明治中期から昭和初期の遺構面(第1遺構面)からの出土であり、中には現代遺物と考えられるものも含まれていたこともあり、匙、火箸のみを掲載した。また、厨房具ではないが調理などに関連する遺物として五徳の一部とみられる鉄製品も出土した。

### 喫煙

煙管の雁首と吸口が出土している。煙管に関しては遺構面に問わらず、出土遺物全点を掲載した。煙管については編年案が示され、その変遷過程が明らかとなっている。<sup>6)</sup>これによると本調査地出土の煙管は6段階に分けられた編年のうちIV段階以降に編年される資料しか認められないことが大きな特徴として挙げられる。すなわち1750年代を潮る時期の煙管はみられないということであり、この点は今回の調査で確認できた最古段階の遺構が18世紀後半であることと矛盾しない。また、時期的にみて最も資料が多い段階はV段階(1800年代から1900年代)の煙管である。

今回の調査では装飾の施された煙管も出土している。図48-5の煙管雁首には首部に松と鳥の意匠が線刻されており、図48-7の煙管雁首は幾何学文様が点刻された上にリボン状の銀箔が螺旋状に首部に貼り付けられており、様々な意匠が存在していたことが出土資料からもうかがえる。

煙管の火皿部分を平らに潰した雁首銭とされる遺物も1点出土している。銭貨に混ぜて偽銭として使用されたとも、縒繩の固定に使用されたとも言われている。この点からは銭貨として掲載されるべきであろうが、考古学的にはこうした用途が追認されていないことから金属製品として掲載した。

### 発火具

火打金とみられる鉄製品が出土した。錆化が進み、本来の形状を保つてはいないものの籠状の形態から火打金と判断した。長方形の木製台座に打ち付けて使用した、カスガイ形と呼ばれる形態の火打金とみられる。

<sup>6)</sup> 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』 柏書房

## 装身具

簪が出土している。90度折曲がっているが、本来の全長は13cm程であったとみられる。頭部は耳搔きになってしまっており、髪にさす部分は二股となっている。こうした形態は簪が現れた当初の形態であるとされる。簪の登場は享保年間（17c初）とされていることから、本資料と遺構出土陶磁器の示す年代（18世紀後半）とはかなりの開きがある。埋土中への搅乱または使用期間を長く考える必要がある。

## その他

用途別分類が困難な遺物をその他として分類した。掲載遺物にはピンセット、鈴、銅鏡、帶金状金製品などがある。ピンセットは全長18.5cmで銅製、先端部片側のみに5mm間隔で目盛りが刻まれている。現代遺物とみられる。鈴は大きく歪んだ状態で出土しており、全体の1/2が残存していた。本来の法量を復元することは困難であった。

銅鏡は幕末～明治中期の遺構面（第II遺構面）の木組土坑（A3区②-15）から出土した。完形であり、銘化もほとんど認められず遺存状態は極めて良好であった。口径8.3cm、高台径3.5cm、器高6.7cmを測る。銅製で、体部と副部は別々でそれぞれを軸付けし、全面に鍍金を施している。器壁は口縁部が肥厚し、口縁端部の厚さは2mmである。この部分が最大厚であり、底部に向かうにしたがって薄くなっていく。高台は高さ2.8cmを測る。下部が最も器壁が厚く、上部はやや薄い。体部外面には彫金による文様が刻まれている。主な意匠は鶴、亀、松、などであり、いわゆる吉祥文様である。主文様以外の空間には約1mmの円文が施される。この銅鏡については用途が不明である。宗教に関わるものとも思われるが確証はない。使用にともなう摩滅や破損も認められず、出土状況や出土以降から一定期間の使用後不要となって廃棄されたものとは考えにくい。遺構の性格とともに注目すべき遺物である。

## 工具

多様な工具が出土しているが、そのいずれも明治中期～昭和初期の遺構面（第I遺構面）または明治以降の遺構からの出土であり、銘化は行わなかった。鉄釘は71点ほどが出土したが、遺存度、形態から5点を選択し、掲載した。今回の調査で出土した鉄釘は頭巻き釘がほとんどで、切釘などが一部みられるものの、瓦釘や合釘、皆折釘など特定の用途に用いられる形態の釘は認められない。

## 建具

建築・調度などに関連する遺物としては換の引手（図48-24）を始め、金具、把手類が出土しているが、本来の用途、形態については復元、推定が困難なものも多い。同様の理由から不明製品として分類された遺物の中にも建具に分類されるべきものが含まれている可能性がある。

## 遊・玩具

牛形の銅製品がある。全長8.7cm、高さ6.5cmを測り、左角を欠く。鋳造品であり、精巧に作られている。幕末～明治中期の遺構面（第II遺構面）からの出土であり、金属製の人形については他の近世遺跡において類例がみられないことから明治以降の所産であると推測される。

## 武器・武具

刀子、小柄、槍先が出土した。刀子は残存長8.5cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmで銘化が進んでおり、詳細な観察はできなかったものの、茎の部分と推定される。関節部や茎尻、目釘穴等は本資料では認められなかった。小柄は残存長9.6cm、幅1.0cm、厚さ0.6cmを測り、柄部分のみが残存する。内側には刀身が残存しているが銘化が著しい。側面には富士山を中心に三日月、島の群れ、船（？）が線刻されている。銅地のままで、表面加工は施されていない。

槍先は幕末～明治中期の遺構面（第Ⅱ遺構面）の板組土坑（A3区②-15）から出土した。表面を覆っている鱗は薄く、銹化が進行しておらず、刃が僅かに欠けているものの遺存状態は極めて良好であった。全体長45.2cm、刃部長18.1cm、基部長27.1cmであり、刃部幅は2.4cm、厚さは最大で1.0cmである。基部幅は最大で1.1cm、厚さは0.6cmを測る。また目釘穴の径は0.6cmであった。刃部は断面三角形状を呈し、表面は中央に鱗が通り、裏面は平坦であるが刃先がやや表面に向けて反り上がる。刃部裏面中央には長さ7.2cm、幅0.4cmの溝が設けられており、内側には赤色の漆痕が残存していた。他の部位には漆膜が認められないことから硝等の漆膜が付着したものではなく、この部分については赤漆が塗布されていたものとみられる。関部は刀部と異なり、断面六角形状で、幅1.8cm、厚さ1.6cmを測る。刃部から緩やかに関部に向かって絞り込まれ、再び広がる形で柄に着装される。茎はその長さが刃部の1.5倍と長大であり、茎尻に向かって幅、厚さ共に減していく。茎部中央やや茎尻寄りには目釘穴が設けられる。茎尻は隅丸形である。また、茎部表面には銘らしき文字が刻印されている様子が看取できるが、判読は困難であった。

槍先が出土した板組土坑からは柄や石突などのほかの部分は出土していない。本遺構の埋土の状況および壁面の板組が完存していることから木質部分が完全に腐朽した可能性は極めて低いことなどを勘案すると遺構への廃棄ないし埋没時、槍先は柄に着装され鞘に収められた武器としての槍の状態であったのではなく、槍先のみが廃棄ないし埋没したものと考えられる。ともかく、共伴遺物である銅鏡や複数の完形品の煎茶碗などと共に特異な状況で出土したことは注目しなくてはならない。

### （3） 銭貨（表20、写真54）

今回の調査では51点の銭貨が出土した。江戸期の銭貨が45点、明治以降の近・現代銭貨が6点を数える。絶対的な資料数としては少ないものの出土銭貨の傾向を見ると、江戸時代の銭貨では寛永通宝がそのほとんどを占め、渡来銭の私鋳銭と模鋳銭が僅かに含まれる程度である。寛永通宝には新寛永と古寛永の2種が存在することが広く知られているが、本調査地では古寛永通宝が2点、新寛永通宝が33点確認されており、新寛永通宝が卓越する。江戸後期の遺構面である第Ⅲ遺構面について見てみても古寛永通宝1点、新寛永通宝18点と同様の傾向が看取できる。古寛永通宝の铸造は1656年（明暦2）まで、新寛永通宝の铸造は1668年（寛文8）以降とされる。

今回の調査地では共伴した陶磁器から18世紀中葉以前の遺構は確認されていないことから古寛永通宝の出土数が相対的に少ないので妥当であると言える。また新寛永通宝は1739年（元文4）以降鉄銭が、1788年（明和5）以降は四文銭が铸造されるようになる。第Ⅲ遺構面の構造遺構（A2区③-1）、土坑（A2区③-4）からはこれら新寛永通宝鉄銭、四文銭が出土しており、いずれの遺構も共伴した陶磁器の年代から18世紀後半以降とされていることから矛盾しないと言える。

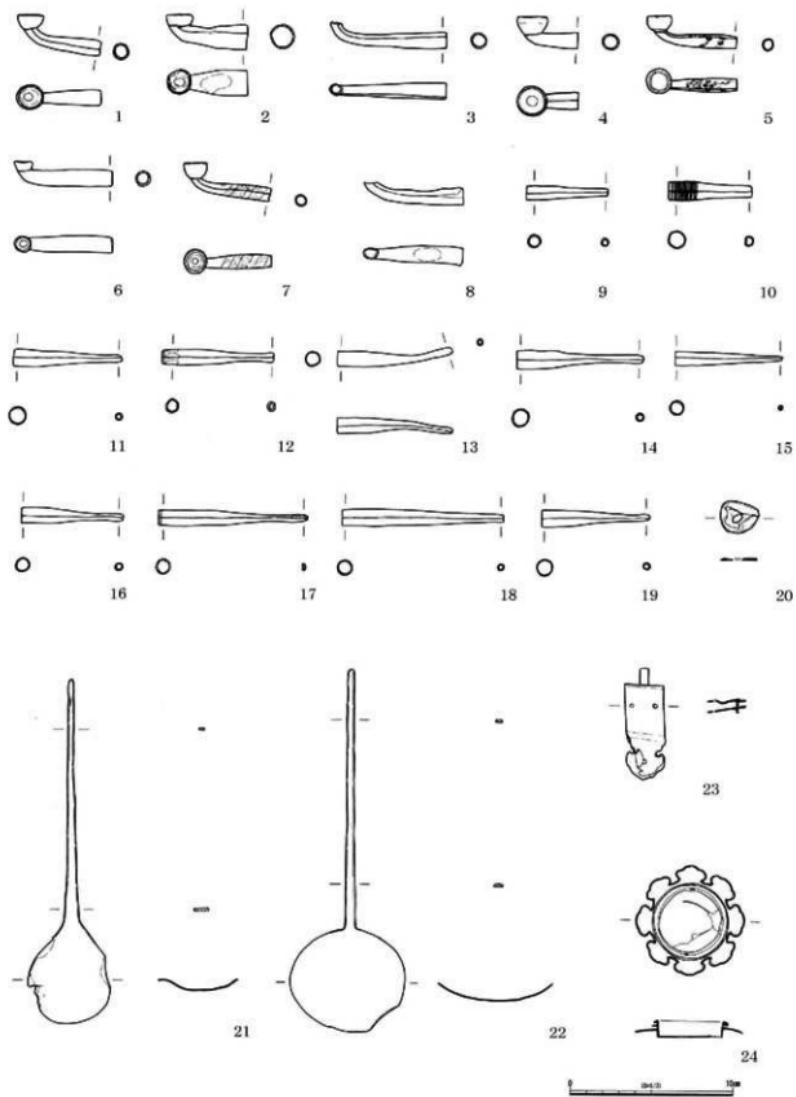


図48 金属製品(1)

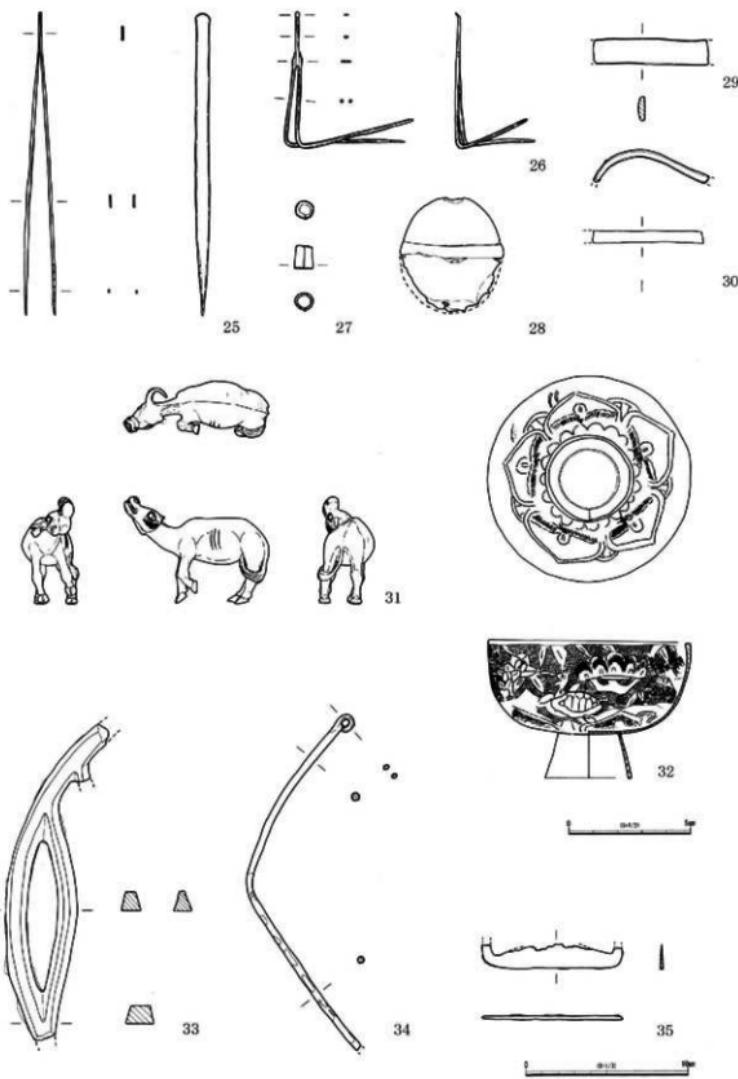


図49 金属製品(2)

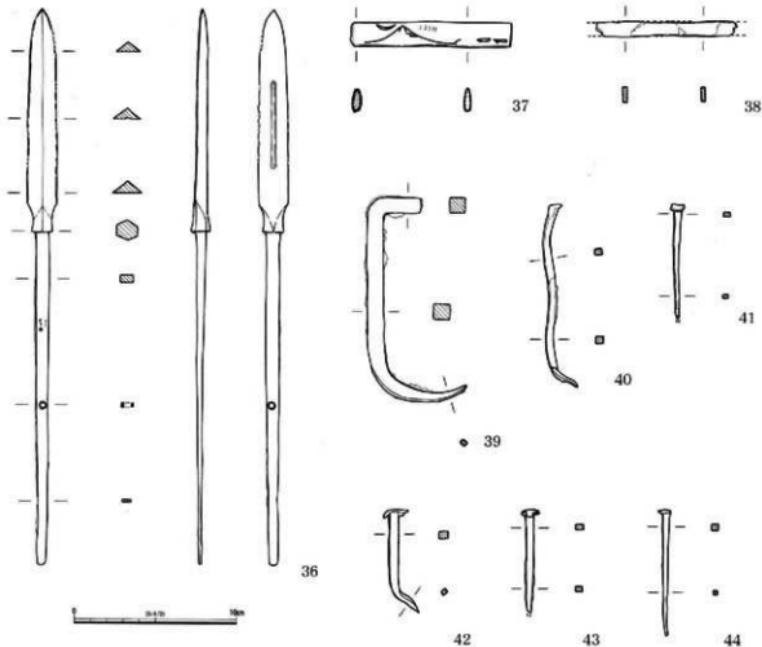


図50 金属製品(3)

表19 金属製品調査表

番号	調査EC	調査番	遺構名	種別	名 称	材質	法 量 (m)				重 量 (kg)	備 考	金属調査 既上番号
							a	b	c	d			
1	A-2	1	4Tr(トレンザ)	美焼	埋管被覆	鋼合金	5.2	1.1	0.9	2.4	11.0		M-049
2	A-2	2	埋立Tr	美焼	埋管被覆	鋼	5.0	1.5	1.5	2.1	10.7	鍛金 青銅鋳打版	M-058
3	A-3	2	4Tr(トレンザ)	美焼	埋管被覆	鋼合金	7.1	—	1.0	1.6	9.0	鋼合金製 純金一部金塊存	M-097
4	A-2	3	検出面	美焼	埋管被覆	鋼	3.6	1.8	1.0	1.9	7.0		M-115
5	A-2	3	4(土瓶)	美焼	埋管被覆	鋼	5.5	2.0	1.4	0.7	7.5	複層(板に施功)	M-133
6	B-1	3	検出面	美焼	埋管被覆	鋼合金	6.1	1.0	1.0	1.6	15.6		M-139
7	B-2	2	16(齊納)	美焼	埋管被覆	鋼	5.3	1.3	0.8	2.3	6.8	文様点刻・らんぐに施紋・ 錆の飛上に施功	M-156
8	B-2	3	検出面	美焼	埋管被覆	鋼	6.1	—	1.0	—	5.8	鍛金 朱み大きい	M-173
9	A-2	1	鉢底	美焼	埋管被覆	鋼	5.0	0.5	0.8	—	4.6	内部に羅字残存	M-017
10	A-3	1	検出面	美焼	埋管被覆	鋼	5.1	*0.6	1.0	—	6.2	首部に刻印	M-036
11	A-2	2	検出面	美焼	埋管被覆	鋼	6.7	0.4	1.1	—	4.9		M-053
12	A-2	1	1(右前)	美焼	埋管被覆	鋼合金	6.8	0.5	0.8	—	8.4	首部断面六角形	M-056
13	A-2	2	2Tr(トレンザ)	美焼	埋管被覆	鋼合金	7.0	0.2	0.9	—	4.4		M-096
14	A-1	3	検出面	美焼	埋管被覆	鋼合金	7.7	0.2	1.1	—	6.8	鍛金	M-150
15	A-2	2	3(右前)	美焼	埋管被覆	鋼合金	6.5	0.2	0.9	—	5.4		M-197
16	B-2	3	検出面	美焼	埋管被覆	鋼	7.3	0.2	0.9	—	4.4	鍛金	M-187
17	B-2	2	3Tr(トレンザ)	美焼	埋管被覆	鋼合金	9.1	0.2	0.9	—	8.6	鍛金 首部刻線	M-156
18	B-2	3	検出面	美焼	埋管被覆	鋼合金	9.9	0.2	1.0	—	14.7	鍛金	M-166
19	B-2	2	16(齊納)	美焼	埋管被覆	鋼合金	6.6	2.0	1.3	—	5.3	Tの巻着とセット陶体か	M-164
20	A-2	3	検出面	美焼	筆筒鉢	鋼合金	2.3	2.0	0.0	—	2.4		M-114
21	A-9	1	無地Tr	厨戸具	内子	鋼	22.0	*8.1	0.02	—	14.8	鍛金	M-011
22	A-2	2	検出面	厨戸具	内子	鋼	22.0	6.9	0.6	—	21.9	鍛金	M-092
23	A-1	3	1(性急小面鑄造)	その他	不明鋼製品	鋼	6.8	2.5	0.7	—	16.9	建築・家具関連金具か	M-138
24	A-2	3	4(左前)	道具	引手	鋼	6.6	1.0	4.1	—	18.0		M-131
25	A-1	2	9(履足)	その他	ビンセット	鋼合金	18.5	0.9	0.1	—	25.6	鍛金 片側先端に日燈	M-065
26	A-1	3	1(性急不明鑄造)	器具身	寶	鋼合金	8.3	0.6	0.2	—	7.6	頭部耳巻き	M-137
27	A-2	3	検出面	その他	不銹鋼製品	鋼	1.5	1.1	0.2	—	3.3	圆形 一端を折り返す	M-124
28	B-1	3	2(上墨石墨鑄)	その他	鉛	鋼合金	47.0	*6.3	—	—	45.4	1/2枚	M-179
29	A-2	3	1(底状遺構)	建具	把手	鋼合金	47.2	1.5	0.4	—	37.1		M-128
30	B-1	3	2(上墨石墨鑄)	その他	不明金製品	金ア	46.9	0.7	0.01	—	8.6	帶金状	M-178
31	A-2	2	2(底状遺構)	遊・秋具	牛形鋼製品	鋼合金	8.7	3.4	0.5	—	217.2	詩物品 一頭次 近代遺物か	M-672
32	A-2	2	15(板瓦遺構)	その他	鉗	鋼	8.3	3.8	6.7	—	97.6	鍛金 魚・鶴・松などの吉祥文様あり	M-091
33	A-1	2	34(廻乳)	火具	不明鉄製品	鉄	19.4	5.2	1.3	—	224.8	新御持辯 五色の一部	M-090
34	A-2	3	10(板瓦遺構)	厨戸具	火筆	鉄	20.5	0.8	—	—	23.6		M-091
35	A-2	3	1(右前)	厨戸具	火打金	鉄	8.7	1.5	0.2	—	19.3		M-125
36	A-2	2	15(板瓦遺構)	武器・武具	彌光	鉄	45.2	—	—	—	237.2	その他の法器については本文参照	M-096
37	A-3	2	検出面	武器・武具	小柄	鋼合金	9.6	1.0	0.6	—	27.1	刀身新削 文様あり(月・富士・鳥)	M-082
38	A-2	1	7(右前)	武器・武具	不明鉄製品	鉄	8.5	0.9	0.3	—	7.5	刀子の一部か	M-023
39	B-2	2	検出面	建具	金具	鉄	12.5	1.0	1.0	—	109.5	掛け金具か	M-151
40	A-2	2	15(板瓦遺構)	工具	釘	鉄	11.1	0.8	0.4	—	12.9	朱漆り	M-095
41	A-2	3	1(底状遺構)	工具	釘	鉄	7.0	0.8	0.4	—	3.3	頭巻付	M-129
42	B-2	3	検出面	工具	釘	鉄	6.3	1.5	0.6	—	9.8	頭巻付	M-182
43	B-2	3	検出面	工具	釘	鉄	7.7	0.8	0.5	—	5.1	頭巻付	M-182
44	B-2	3	検出面	工具	釘	鉄	6.3	1.1	0.5	—	3.7	頭巻付	M-182

## 丸例

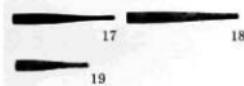
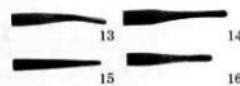
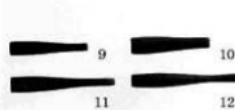
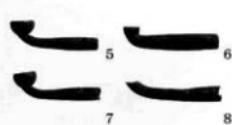
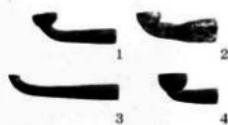
・法量(a～d)

溝幅：全幅 b：最大幅 c：最大厚 or 最大高  
埋管被覆：a：全長 b：高さ c：火薬径 d：青銅錫

・#は復古値

・遺物番号：実測図版中の各遺物番号を示す。

・検出面：遺物確認由



20



24



25



26



27



28



29



30

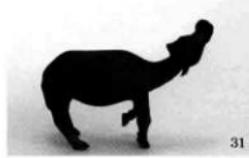


写真52 金属製品(1)

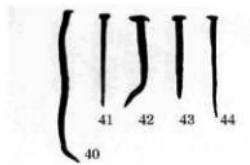
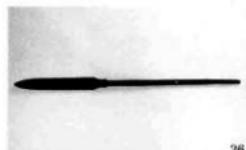
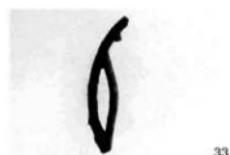


写真53 金属製品(2)

表20 錢貨観察表

遺物番号	調査区	調査面	遺構名	名称	分類	材質	法 直 (cm)		重量 (g)	備考	相鉄年	金属遺物 数(参考)
							a	b				
1	A-3	1	倒溝T r	新見永通宝	龜引大字	銅	24.0	0.8	2.30		1737(元文2)	W-064
2	A-2	1	1(右銀鏡)	新見永通宝		銅	28.0	1.0	4.45			W-018
3	A-2	1	横出面	不明銭貨	—	不明	25.0	1.2	3.24	古代銭貨		W-020
4	A-2	1	4(左銀)	不明銭貨	—	不明	22.0	0.9	2.08	近世銭貨		W-021
5	A-2	1	7(右銀鏡)	御内銭白銭貨	—	銅・ニッケル	29.6	1.5	4.41		1894(明治27)	W-022
6	A-3	1	1(右銀鏡)	新見永通宝		銅	25.0	0.8	2.89			W-025
7	A-3	1	1(右銀鏡)	私鉄錢?	—	銅	25.0	1.0	3.28	光明宝(私鉄錢)の私鉄錢。 銅鏡鑄か、金箔付等。		W-037
8	A-3	1	1(右銀鏡)	新見永通宝?		銅	25.2	0.8	2.61	背面面張り・後世のものか?		W-028
9	A-3	1	1(右銀鏡)	新見永通宝	平木	銅	23.7	0.9	2.82		1767(明和4)	W-043
10	A-3	1	横出面	平銀銭貨	—	銅	22.0	0.9	2.27	銘化著しい	1883(明治16)	W-044
11	A-3	1	倒溝T r	100円銀貨	—	銀・銅	25.0	1.0	4.79		1906(明治41)	W-046
12	A-3	2	横出面	新見永通宝		銅	22.5	0.8	2.19			W-037
13	A-2	2	倒溝T r	新見永通宝		銅	23.8	0.8	2.12			W-029
14	A-3	2	横出面	新見永通宝	四字背元	銅	25.0	0.8	2.92		1741(慶長元)	W-000
15	A-3	2	横出面	新見永通宝		銅	21.8	0.9	1.94			W-091
16	A-3	2	横出面	新見永通宝		銅	25.0	1.5	3.26	銘化著しい		W-070
17	A-2	1	2(右銀鏡)	新見永通宝		銅	23.5	0.9	2.18			W-025
18	A-1	2	横出面	新見永通宝		銅	22.3	0.8	1.65			W-077
19	A-1	2	23(土印)	新見永通宝		銅	22.8	0.8	1.99			W-081
20	A-1	2	23(土印)	新見永通宝		銅	25.0	1.0	3.93	銘化著しい・金箔付等		W-081
21	A-1	2	23(土印)	新見永通宝		銅	24.0	0.9	2.66			W-081
22	A-3	2	横出面	吉見永通宝	吉田鏡	銅	24.2	1.3	3.71		1637(慶永14)	W-082
23	A-3	2	横出面	私鉄錢?	—	銅	24.0	0.9	2.61	慶光通宝の私鉄錢・私鉄錢か?		W-083
24	A-2	2	2(右銀鏡)	御内銭白銭貨	—	銅・ニッケル	20.6	1.0	4.47		1889(明治22)	W-110
25	A-1	3	横出面	新見永通宝		銅	25.0	0.9	2.95			W-132
26	A-1	3	横出面	古見永通宝?		銅	23.0	1.0	2.99	表面摩滅		W-133
27	A-2	3	1-1(唐状通鑑)	新見永通宝	瑞字	銅	23.2	0.8	1.89	墨脱り不良	1746(慶長元・支那)	W-118
28	A-2	3	1-1(唐状通鑑)	新見永通宝		銅	25.0	1.0	1.99	銘化著しい		W-119
29	A-3	3	横出面	新見永通宝		銅	24.0	1.0	2.90			W-123
30	A-1	3	2(性格不明通鑑)	新見永通宝		銅	—	0.8	1.40	1/2枚		W-126
31	A-2	3	4(土印)	新見永通宝	青口底	銅	28.0	1.1	4.60	四文字		W-131
32	A-2	3	4(土印)	新見永通宝		銅	28.0	1.1	2.61			W-131
33	A-2	3	4(土印)	新見永通宝	京都七種鏡	銅	22.2	0.9	2.91		1726(亨保11)	W-131
34	A-2	3	4(土印)	新見永通宝	西文鏡	銅	28.2	1.2	4.87			W-132
35	A-2	3	1-1(唐状通鑑)	新見永通宝		銅	25.2	1.0	2.95			W-136
36	B-1	3	横出面	新見永通宝		銅	22.0	0.8	1.90			W-148
37	B-2	2	横出面	10銭アーチ奇制貨	—	アルミ・青銅	22.6	1.0	1.67		1938(昭和13)	W-152
38	B-2	2	横出面	10銭銀貨	—	銀・銅	17.0	1.1	3.79		1891(明治24)	W-153
39	B-1	3	横出面	新見永通宝		銅	23.0	0.8	2.62			W-154
40	B-2	3	横出面	新見永通宝		銅	23.0	0.9	2.71			W-159
41	B-2	3	横出面	新見永通宝		銅	24.2	0.9	1.66			W-171
42	B-1	3	1(右銀鏡)	新見永通宝		銅	21.8	0.6	3.09			W-156
43	B-1	3	2(上層部銀鏡底古板板)	新見永通宝		銅	23.0	0.6	1.78			W-177
44	B-2	3	横出面	新見永通宝		銅	24.0	1.1	1.89	銘のため詳細不明		W-181
45	B-2	3	横出面	新見永通宝?		銅	23.0	1.0	3.06	銘のため詳細不明		W-185
46	B-2	3	横出面	新見永通宝?		銅	23.0	1.2	2.51	銘のため詳細不明		W-185
47	B-2	3	横出面	新見永通宝?		銅	25.0	1.1	2.87	銘のため詳細不明		W-185
48	B-2	3	横出面	新見永通宝		銅	23.0	0.9	2.76			W-185
49	B-2	3	横出面	新見永通宝		銅	22.8	0.9	2.74			W-185
50	A-3	1	1(右銀)	兎永通宝		銅	23.0	0.8	2.37			W-188
51	A-2	1	横出面	新見永通宝		銅	22.5	0.9	2.23			W-050

## 凡例

a: 横徑 b: 最大幅

b: 直径 c: 最大厚

貨幣の分類および判斷等は『日本貨幣カタログ』2005 日本貨幣流通団総合に従った

・誤認: 通鑑銀通鑑

・牙直回版: 牙直回版銀通鑑番号

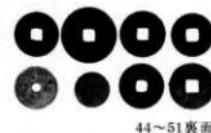
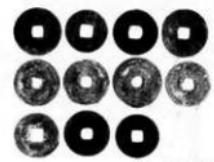
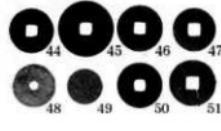
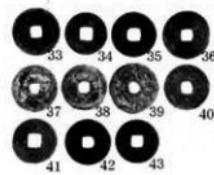
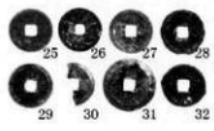
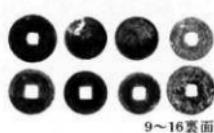
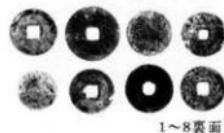
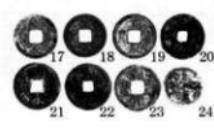
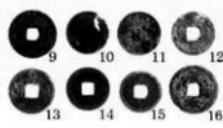
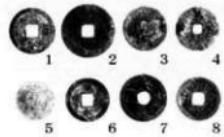


写真54 銭貨

#### (4) 木製品 (図51~55、表21、写真55~57)

本製品は110点余りが出土し、このうち31点を掲載した。掲載遺物に関しては2点を除き、保存処理を実施している。出土木製品を用途別に分類すると以下の通りになる。

日用品………食器具（漆器椀・漆器椀蓋・漆塗膳・箸）、厨房具（杓子・柄杓）

容器（漆器蓋・結桶）

履物（下駄）

その他………不明木製品

以上の分類に基づいて各木製品の概略を述べる。

##### 食器具

漆塗木製品が数多く出土した。そのほとんどは漆器椀である。漆器椀は椀、蓋合わせて10点を掲載した。漆器椀については江戸遺跡出土資料から江戸遺跡における編年案が示されている。あくまでも江戸遺跡における編年であり、編年をそのまま援用することには問題があるが、型式分類の面から本遺跡出土資料を見てみると、平椀・腰丸椀・一字文字腰椀など、多くの器種が出土しており、バリエーションに富んでいることが分かる。また、漆塗膜構造調査の成果からはいずれの漆器椀も渋下地で、赤色漆はほとんどがベンガラを顔料として用いていることが分かった。また、上塗りの回数も1ないし2回と少ない。渋下地の使用および赤色漆に用いられたベンガラの使用は近世漆器椀では一般的であり、今回出土した漆器椀については一般に広く流通していた椀であると考えられる。このほか、本調査地からは漆塗膳が出土した。全体の2分の1を欠くものの、比較的の残存状態は良好であった。脚部の形態から本資料は蝶足膳と呼ばれる形態の膳である可能性が高い。この蝶足膳は最も格式が高い膳として用いられたとされ、これを裏付けるように本資料に用いられた下地は渋下地であり、赤色漆にはベンガラに加えて朱が用いられていることが確認されている。また、上塗りの回数も多く、膳の角部などには布着せ補強が確認できた。以上の点から本資料は一般に高級品とされる漆塗りの技法が数多く用いられており、格式の高い場で用いられた高級品である可能性が高い。

##### 厨房具

杓子・柄杓が出土した。杓子（図52-15）は一つの木材から削り出して全体が製作されており、金属製の杓子と形態的に類似している。柄杓は曲物であり、直径8cm、高さ6.6cmを測る。底板と柄の部分は出土していない。なお、柄を接続するための大きさの異なる方形の孔が側面を貫通する形で2つ認められる。

##### 容器

容器類としては漆器蓋を2点掲載した。それぞれ直径12.8cmと21.4cmを測る。

##### 履物（下駄）

下駄は第Ⅲ遺構面出土遺物を中心に15点を掲載した。江戸遺跡出土の下駄の型式分類によれば今回出土した下駄は連齒下駄、露卯下駄、陰卯下駄に分けられ、さらに緒孔の位置、台の形態などから細分される。注目されるのは法量が極端に小さい資料が出土していることである。連齒下駄、露卯下駄とともに全長が14~18cm前後の資料が出土している。女性用もしくは子供用の可能性が考えられる。